

---

# バカと鴉天狗と召喚獣

紅月紅蓮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと鴉天狗と召喚獣

### 【Nコード】

N82350

### 【作者名】

紅月紅蓮

### 【あらすじ】

幼馴染に木下姉と弟を持つ主人公。

そんな主人公たちが繰り広げるお気楽学園生活。

ちょっとシリアスなところもあったりするけども・・・

初投稿の処女作です

文才が乏しいけれどもがんばって完結を目指します。

バカとテストと召喚獣（科学）と東方Projectの織りなす世界  
オカルト  
始まります！

## ブローグ

中学に入って初めてのクリスマス・・・・・・・・

僕こと射命丸彩斗しゃめいまる あやとは、幼馴染で親友の木下 秀吉から呼び出され

近所の公園に向かっている。

・・・わざわざ呼びさなくても家に来ればいいのに

なんてことを考えていたら目的地が見えてきた。

案の定そこには秀吉が・・・・・・・・いなかった。

待っていたのは秀吉の双子の姉、木下 優子だ。

ここにきて僕はようやく「謀られた」と悟った。

Side Yuko

今日は、クリスマス・・・・・・・・

アタシは双子の弟の秀吉に頼んで彩斗を呼び出してもらった。

自分で呼び出すのは・・・恥ずかしくて到底できない。

だって、今日は・・・・・・・・

特別な日だもの……

そう、今日は……アタシ木下 優子が

幼馴染でありながら想い人射命丸 彩斗に……

告白する日なのだから……

待ち合わせは午後7時なのに30分前から待っている。

不安と緊張……それらを合わせた感情が自分の中を駆け巡っている

ついに——彩斗が来た。

彩斗がこっちを向いてその姿に見とれていると背後から迫りくる男に何かを嗅がされて

意識を失った。

Side Ayato

優子がこっちを向いたときに、後ろから見知らぬ男に何かを嗅がされて

連れていかれてしまった。

早く追いかけないとっ!!

優子が乗せられている車を追って全力で走る――

・・・・・・・・あの方向は大通りのはず、賭けてみるしかないっ

細い脇道を通り抜け、歩道橋の上であたりを見渡していると、

あの車を見つけた――

一か八か、歩道橋を飛び降り車に着地・・・・・・・・成功した。

だが、車の急停止によって体を投げ出される。

体中が痛い・・・・でも車は止まった。

「何だ・・・・くそガキ、なにしちゃってくれてんだあ!？」

「優子を返せ!!」

「さつき連れてきた奴か・・・・これはアニキに渡す手筈出よお、簡単に返せないんだよなあ」

「んなことどうでもいい!!早く返せ!!」

一触即発といつてもいい状況・・・・・・・・そんな中、

「なにやってるんですか!？」

あたりはやじ馬がたくさんいて、騒ぎを見た警察官がこつちに来た。

「お巡りさんじゃないですかあ、実はですねえ、この子供が歩道橋

から飛び降りて

車に傷をつけてくれたんですよ」

「そうじゃな「君」、歩道橋から飛び降りるなんて危険なこととして、危ないじゃないか」

「話を聞いてくだ」では、俺たちも用事があるのでもう悪さしないようにその子供抑えていてくださいねえ。」

「ちよつとま「君」、暴れるんじゃない！！ちゃんと親御さんを読んで話を聞かせてもらおうよ」

もう、誰も当てにならない。そうなったら優子が・・・優子が・・・

そのとき、何かが壊れていくような感じとともに、禍々しい気配が全身を覆い

僕は理性というストッパーを外した。

「なあ、警察官の方、なんであいつらを逃がしたんだ？」

「決まってるじゃないか。あの人たちに非はない」

「・・・じゃあ、放して」

「駄目だ」

「チャンスはもう1度。放して」

「駄目と言っているだろう」

・・・ほんとに使えない。自分でやるしかないか

まず、こいつが邪魔だな・・・吹き飛ばすか

「ハッ」

グシャと音がして警察官を地面に押さえつけた

さて、優子を探さないと・・・不思議と場所は分かる。

S i d e   Y u k o

気がついたら、見知らぬどこにいた。

声を上げようとしても出ない。

（そっか、アタシは連れ去られたんだ・・・・・・・・）

「おい！娘が目覚めたみたいだぜ」

「そうか。気分はどうだい？嬢ちゃん、ってそれじゃ話せないか」

最悪にきまつてるじゃない！！

「ほんとよくなったな、かなりの上玉じゃねえか」

「へへ、どうも・・・」

「さあどうすつかない。・・・助けを期待するなら無駄だぜ。ここは誰もしらねえからな」

「ここで日ごろの鬱憤を晴らすとしようじゃねえかお前ら・・・!」

『イエー』

(嫌、嫌、嫌、助けて・・・・・・・・彩斗っ!!)

ガラガラ

「おう、遅かったじゃねえか。今から楽しいとこだぜ」

ボタン

「お、おいどうしちゃったんだ?」

男の1人が倒れてからその奥に1人の少年が見えた。

アタシの大切な人・・・・・・・・

でも、いつもと違うのは・・・彼の背に

漆黒の翼があった――

S i d e   A y a t o

ようやく、あいつらのアジトを見つけた。

相手は・・・7人ほどいるが、問題ない

・・・なんだろうな、こんなに血が騒ぐのは

久しぶりだ――

「俺の大切な人をよくもこんなにしてくれたなあ!!」

奴らは完全にひるんでいる

「さあ、地獄を見てもらおうかああア」

俺はどうやって出したかもわからない日本刀を武器に1人、また1人と斬っていった。

ただただ、優子を助けるために・・・・・・・・

そして、最後の1人を倒したとき、優子が無事である姿を見つけた。

しかし、優子は恐怖で染まっていた。

S i d e   Y u k o

アタシを助けに来てくれた彩斗。

でも、いつもと違う・・・

1人称が「俺」に変わってるし、何よりもあの翼・・・

そんな姿を見てアタシは即座にこう思った。

【怖い】——と

誘拐犯全員を圧倒的な強さで倒していく・・・

自分を助けに来てくれたのに、喜べない。

そんなことよりも、怖い。それだけだった。

彼が最後の1人を倒した後、アタシを見たけど、

すぐに去ろうとした。

「じゃあな、木下姉」

その言葉と聞いたとき、アタシの中で何かが壊れていった。

S i d e   A y a t o

「じゃあな、木下姉」

その言葉とともにその場を去った。

俺にはあいつを名前で呼ぶ資格はない——そういう思いも出てきた。

外に出て警察に連絡しておいた。

時間はもう9時を回っただろう・・・あたりは真っ暗でどこに行けばいいかわからない。

そんななか、ある1人の女性が現れた。

その人を見たときに、すべてを思い出した。

そう―この女、八雲 紫こそがすべての始まりだと

## プロローグ（後書き）

こんにちはノ紅月です

プロローグなのに長い……

バカテスを期待していた方、申し訳ないですが

しばし、東方に付き合ってください

1日1回載せたら……イイナー

## 第1話 僕と能力と幻想郷

—— お姉ちゃんにもう会えないの？

違うわ、少しの間さよならするだけよ。

なら、紫姉ちゃんについていく

ふふふ・・・なら、あなたにふさわしい場所に連れて行ってあげるわ

ホント！？嬉しいなあゝ

ほら、ちゃんと離れないようにね

うん——

そして僕は幻想郷を去った・・・・・・・・

S i d e   A y a t o

八雲 紫と対峙した時、

すべてを思い出した。自分が半妖だということ、腹違いの姉のこと、

ここに来る前のことなんかを全部——

目の前にはすべての元凶といえる奴がいる。

あいつのおかげで2人に会えた。だが、あいつが何もしなければこんなことには

ならなかったかもしれない。

そして、失って初めて気がつくことが僕の中にあった。

それがたとえどんなものだとしても、僕にとってはとても大切なものの。

でも、それに気付くのは遅すぎた。

この妖怪としての力は半妖だが、人間にちかい僕にとっては大きすぎる……

その力を操れなければあの子に会う資格はない。

そのためにも僕は1つの決心をした。

「久しぶりですね……とでも言えばいいのかな？紫姉さん」

「久しぶりね、彩斗。立派に成長したじゃない」

「いろいろ話したいことはあるけど、なんで僕の記憶を変えたの？」

「それは……あなたは半妖でありながら、ほとんど人間のような存在だった。成長速度からもわかるようにね。それだけなら問題な

いわ。人里に行けばいいだけだから・・・しかし、大妖怪に匹敵する妖力を持っているということがわかってしまったの。そうなってしまつては話は別。妖気があふれる幻想郷にいればすぐにでもその力が表に出てきてしまふ。だから、記憶を消し、別の世界に送つたのよ。人間として生きてもらうために・・・」

「そうだったのか・・・」

僕は正直驚いた、妖力なんてほとんどないものだと思っていたのだから。

「じゃあ、この状況は何？」

「それは想定外の出来事、感情だけで妖怪化するなんて思つてみなかったもの」

「けど、もう取り返しは付かない・・・」

「・・・なら、僕のお願いを1つ聞いてくれてもいいかな」

「ええ」

「僕を・・・幻想郷に連れて行つて——」

忘れ去られたものが集まる幻想郷・・・そこに行けば何かが変わると確信している

「・・・・・・大体事情はわかっているけれど何故そうしてほしいの？」

「この力を完全に自分のものにしたい。自分の意志関係なく暴走するようでは周りを気づつけてしまうから・・・」

「原因はあの子ね？」

「・・・すべてお見通ししてことが」

あの子に会うことはないとわかってから自分の気持ちに気がつく。

そのためには自分を磨かなければ逆に傷つけてしまうだろう。

「本気で惚れこんでるのね」

「しょうがないさ、惚れちゃったんだから」

「ふふふ・・・くだらないことなら元の生活に戻ってもらうつもりだったけど、いいわ、

連れて行ってあげましょう」

「ありがとう。紫姉さん」

「なら、今回のお詫びとして、私の能力をあなたに授けましょう」

「えっ・・・」

紫姉さんが僕の頭に手を置いたとき何が入ってきた・・・

「『境界を操る程度の能力』？」

「そうよ、その能力を使えるのはあなたと私しかない。練習つい

でに使ってみましょうか」

「使っつてこつ?」

僕がイメージするとスキマが現れた。スキマの中からは無数の目が光る。

「そうそう、ちゃんとできたじゃない」

「……これはすごい」

「さあ、幻想郷に行きましょうか」

「はい」

少年少女移動中……

「さあついたわよ」

目の前には大きな山1つ。だけどこを知っている。

「ここはたしか、妖怪の山だったかな。」

「よく思い出せたわね」

「そりゃそうだ生まれ故郷だもの」

「ここからは1人で行ってもらうけど、あなた能力について説明し

ておくわね」

「まず、あなたの能力は『自分の適性に合った能力を写し取る程度の能力』よ

この応力自体は今の彩斗の状態でも使えるけど、写し取った能力によつては妖怪化しないと使えない時もあるから

注意が必要ね。それに、適性に合わない能力だと何も起こらないから。」

「へー、つてなんかすごくない？」

「もちろん規制もあるわ。さつき渡した『境界を操る程度の能力は』本来適性外なのに、

無理やり使えるようにしたから、適正範囲が狭くなってるからね。」

へーそうなのって……………

「ええええええええええ!!」

「うるさいわよ、耳が痛い。」

「いやいやいや、それってマジデスか？」

「本当と書いてマジというわ」

……………なんてことしてくれてんだこの人。まあ便利な能力ではあるけども…………

「本当は冬眠の季節なんだから眠くって…………さようなら」

「ちょっと待てっ！！って行っちゃったし」

紫姉さんはスキマを開いて帰っていた。まったく自分勝手すぎる。

さて、これからどうするかなー、とりあえず、山登るかなーとか考えていたら

人影が1つこっちに向かっていった。

「あやや、こんなところでなにをつ——あなたは・・・」

「久しぶりだね、文姉」

その人影とは、

射命丸しゃめいまる 文あや・・・・・・・・僕ぼくの姉さんだった。

## 第1話 僕と能力と幻想郷（後書き）

こんちゃノ紅月です

リアル +  $\alpha$  が忙しくなりそうなのでこの時間帯にしか投稿できず・

このペースを続けていけるようにがんばります^^

感想、誤字、脱字、等お願いします

## 第2話 僕と俺の境界線

「久しぶりだね、文姉」

僕の腹違いの姉、射命丸 文がそこにいた。

「あ・・・や・・・と？」

「彩斗っ！！」

その言葉とともに文姉が飛んでくる。

「ホント、どこ行つてたのよ！？ずっと心配したんだから！！」

「あ・・・や・・・ね・・・え、ぐるし・・・」

文姉が僕に抱きついて離れない・・・しかも、首をしめて・・・

「つていい加減はなれろお！！」

「わっいつの間にそんな力を・・・はて、彩斗に翼あつたっけ？」

ん、翼・・・？はて、そんなもの・・・しらなくない。あ  
あこれが妖怪化って奴か。

「ま、まあいろいろ話すから、とりあえず移動しようぜ」

「はいはい押さない・・・はて、彩斗ってこんな言葉使いだっけ

「？」

「その説明は・・・俺が聞きたい」

「あ、そう。・・・はて、彩斗って俺って言ってたっけ？」

「・・・・・・・・めんどくせえ。しょうがない・・・文姉だぁーいき。だから早く移動しょ？」

「さあ、行きましょつかぁ!!」

扱いやすいなーこの人

少年少女移動中・・・・・・・・

山の方移動してたら天狗に会ったびに声掛けられた。

久しぶりー、とか、大きくなったなあとか、付き合ってくださいとかホントいろいろと。

ん、なんか変なの混じってたけど・・・いいか。

さて、ここは文姉の私室。和風な感じに趣おもむきがありますね。

「で、なにがあつたの？」

「簡単に言うと、あの日紫姉さんについて行ったら記憶を消され、妖力がバカみたいに高いから別世界の特別な争いのない世界に飛ばされました。終わり」

「あの、スキマ女め……それでなんで帰ってこれたの？」

文姉の周りに黒いもの見えるけどキニシナイ、キニシナイ

「砕いて言うところある日、幼馴染（女）が誘拐されてキレたら妖怪になつて紫姉さんが迎えに来て、何故か『境界を操る能力』もらつて帰ってきた。」

文姉がキョトンとした顔でこっちを見る。……そういや、この人新聞記者だからな――

幼馴染についてきかれ――

「彩斗……あなたついに妖怪になれたのね！！」

――なかった。しかも、能力スルーですか。

「なれたけど自分でコントロールできないから。……そういや今つて妖怪？」

「立派な妖怪」

そうか……なら自分の姿でも見てみよう。気になるし

「全身見えるほどの鏡ある？」

「持ってくるね――」

さあ、物はため「持ってきたよー」って速っっ！！

「ハハハ、速いね――」

「幻想郷最速の名は伊達じゃありません」

今回だけは伊達であってほしかった。

「で、何に使うの？」

「ん、ちょっと試したいことがあってね。俺の能力は『自分の適性にあった能力を写し取る程度の能力』「何ソレ強い」・・・はいはい、それでもしかしたら自分で自覚していない  
隠された能力があるんじゃないか？と思ったんだ」

「自分にあった適正ってどうわかるの？」

「もちろん知らん。しかも、『境界の操る程度の能力』のおかげで適性の範囲が狭くなってるし、人間時でも使えるのと妖怪時じゃないと使えないものがあるらしい」

「・・・あのスキマ・・・イツカコロス」

あ、またやばい。今度は「スキマコロス」を連呼してるし

「文姉―帰ってこーい」

「ハッ私は何を・・・」

ここに、文姉ブラコン説が誕生した・・・（異論はほとんど認めないby作者）

「はいはい、鏡持って立って」

そして、初めて妖怪となつた自分の姿を見る。

漆黒の翼・・・しか特徴がなかった。あとは前同じ

まじまじと鏡を眺めていたら、黒色だったはずの右目が赤くなっていた。

俺の目ってこんな色だっけ？

うーんこれも妖怪化のせいなのか？

あ、何か頭に入ってきた。えーと、『自分の中の人と妖怪の割合を操作する程度の能力』・・・？

自分に。。。するっての多いな、しかも説明もあった、便利だなー  
「私がつけてあげたのよ」って紫姉さんアンタの仕業か、さりげなくコンタクトしてこないで。

収穫もあつたし、妖怪化を解くことにする。

「彩斗、もういいの？人間に戻ってるけど」

「うん、いいよ。いろいろわかったし」

「どんなこと？」

「いづれわかる。だから言わない。」

「いいじゃない、言いなさいよー」

「嫌だ、って弟に色仕掛けするな!!」

「ぶー」

「……まったくこの人は。」

文姉が拗ねているので御茶でも飲むとしよう。

どこから出したかは皆さんわかるはず。いや、わかってほしい。

「ずずず……」「そういや、幼馴染って「ぶはあ!!」もう、汚いじゃない」

「アンタのせいですからねっ!!」

「はい、これで拭いて。それでどんな子?」

「うーん、メモ帳投げ捨てたら話してもいい」

「ばれたか………チッ」

舌打ちまでしたよこの人

「メモ帳しまったから話してもいいでしょ?」

「……しょうがない。えーと、ちょっと強気だけど仕草がとってもかわいい子」

「惚れてるんだ」

「うぐっ」

す、鋭い

「惚れてるんでしょ？」

「・・・ハイ、ソウデス」

押され負けてしまった・・・まあ事実だけでも

「なら、なんでその子のところに行つてあげないの？」

「あいつを傷つけてしまうから・・・かな」

妖怪化してから続ける。そう、この能力がすべての始まり

「この能力が暴走して——ね」

「暴走・・・ねえ」

「この俺の2つ目の能力『自分の中の人と妖怪の割合を操る程度の能力』は

自分の人と妖怪を操れる。いつもの状態が3/4人間だとしたら今は1/2って具合に。」

「3/4はまだ大丈夫だろうけど、4/4・・・すなわち完全に妖怪化した時理性が飛んでしまうんだ」

「そして、そのせいであいつに怯えた顔をされたってことさ」

「そう・・・そんなことがあったのね」

「だから、俺はこの力をコントロールしたい。自分自身のためにも、あいつのためにも・・・って文姉どうしたの？」

これが俺の決意、ここに来た理由。

だけど、何故か文姉が腹抱えてうずくまっていた・・・

「ぷっ・・・あはははははははは」

そして盛大に笑われた。

「ちよっ、そんなに笑わなくても・・・」

「ごめんごめん、あーくるしー。ほんとに惚れこんでるねー。で、私に何かしてほしいんでしょう？」

「うん、俺を鍛えてくださいー!!」

「いいよ、でも私はきびしーよ」

「そんなもの覚悟のうちだ!」

そして、文姉はあたりを探り出して

「ならまず、彩斗にあった武器でも探しましょうか。あなたはほぼ人間の状態なんだから

その、人間時に使えるものでないとだめでしょ」

無造作に出された数々の武器、刀、両手剣、槍、弓、鎌など・・・

「どれが適正かは、持ったらわかるでしょ？」

「じゃあ、まず刀を・・・適正っぽいです」

見つかるの速いなこれ、

「じゃあ、今から出かけるわよ。ついてきなさい」

「ちょ、引つ張らないで〜」

こうして幻想郷の生活が始まった。

## 第2話 僕と俺の境界線（後書き）

こにゃにゃちわノ紅月です

彩斗、文と再会しました。

文がこれからもたびたび壊れそうですがまあ、スルーで  
さて、主人公の能力ですが

チート（微笑）程度だといいなー・・・

まあ、何とかなる・・・はずだ

次回はみんなの大好きあの人・・・？



「何故住み込み!？」

「そのほうがいいでしょ。いや、絶対いいはず」

「・・・まあいいや」

何か釈然としないな

つと気がついたら入口っぱいところが見えてきた。とりあえず、人間時(1/4)に戻ろう。

「こんにちわー。幽々子さん。いますか？」

やけにフレンドリーだなこの人・・・

「はいはい、今出ますよー」

出てきたのは僕よりちょっと背が低く、白い人玉?を連れた少女であつた。

「文さんですか。幽々様に何か用ですか？」

「あやや、妖夢さんが出ましたか。実は用があるのは妖夢さんのほうなんですよ」

敬語の文姉・・・なんか合わない

「私に用ですか?もしかしてその後ろにいる、半妖・・・ぽい方が関係してるとか」

「はい、その通りです。用件は本人から言ってもらいましょう」

ここで話を振ってくるかこの人っ！！なんかニヤけているし。

はあ、しょうがない

「初めまして、射命丸 彩斗です。文姉の異母兄弟です。」

「私は、魂魄 妖夢と申します。ここ、白玉楼の庭師をやってます」

「で、用とはなんでしょう?」

「かくかくじかじか（詳細は1話あたり参照b y作者）というわけで剣術を習いに来たんです」

「そういう理由なら、喜んで引き受けましょう」

「ありがとうございます妖夢さん」

「では初めにどこまでできるか見ましょうか。こちらへどうぞ」

少年少女移動中・・・

「では、初めは木刀でやりましょうか」

「はい」

「1回振るので見ていてくださいね」

「はい」

そういうと、妖夢さんは集中を高めていった。こつ間近でみるとなんかすごいなー

ビュン――

あ、適性反応・・・『剣術を操る程度の能力』説明：要らないですよ？（紫ばいす）

なんか、近道した気分だ・・・あと、紫姉さん地味に入ってこないで

「おおー（パチパチ）」

「どうも・・・／＼／＼／」

妖夢さん顔真つ赤だー。幻想郷に男少ないから慣れてないんだろう・・・そうあってほしい

「そ、それでは彩斗さんやってみてください」

そう言われ、手元に用意された木刀を持って構える。

そして、体になじんでいるかのように木刀を振り下ろす――

ビュン　ゴオオオオオ

「「「・・・・・・・・・・」」」

木刀を振り下ろしたら妖気で周りのものがいろいろ飛んでいった・

俺も妖夢さんも絶句していた。

「彩斗さん……剣使ったことない……ですよ？」

「はい。……心当たりはあるんですけど」

「それは……？」

「僕的能力『自分の適性にあつた能力を写し取る程度の能力』です。武器も適性はうつすらとわかるっぽいです」

「ほー、それで剣が使えるそうだからここに……」

「妖夢ーどうしたの？ってあらステキなボーイフレンドじゃない」

縁側から、青を基調とした服を着た女性が現れた。

「違いますよ！！幽々様」

「……妖夢さん、顔真つ赤で言われても説得力0ですよ

「それで、あなたは？」

「自己紹介まだだったわね。ここ、白玉楼の主、西行寺 幽々子よ」

「射命丸 彩斗です」

「それで、彩斗はここで1年間住み込むって文から聞いたけどいいの？」

「はい、一応、大丈夫です」

僕は即答する。抵抗？そんなものどつくに捨てた

「え、い・・・1年も・・・？／／／きゆう」

あ、妖夢さん顔真つ赤で倒れた。

「あら、妖夢も青春してるわねー」

いや、アンタ人ごとでないだろ。・・・決して口にしないが

「幽々さんとりあえず、妖夢さん運ぶので部屋教えてください」

妖夢さんを持ち上げようとするけど・・・地味に重い・・・

何故かと思っていたら腰の後ろに真剣が2本・・・

これは仕方がないか——妖気解放（1／2）

「あら、それがあなたの本当の姿？」

完全に半妖化した俺を見て幽々さんが問いかける。

「まあ、そうですね。」

「ふうん。あ、部屋こつちね」

少年＋気絶中半霊など移動中

「はい、ここね。ここ、妖夢の部屋だけど彩斗もこの部屋で寝てもらうから」

「………ちなみに拒否は「無理よ」「ですよね」」

「では、ごゆつくり」

……あの人が絶対楽しんでるな

……眠くなってきた、色々あったけどまだ日が沈んでないや。

そんなことを考えていると意識は遠のいて行った。

Side Yomu

目が覚めたら自分の部屋だった。

なんか、頭に柔らかい感触があると思ったら彩斗さんが膝枕したまま眠っていた。

きれいな顔していて、優しそうだし、文さんとはいろいろ違うなー

……あれ、翼なんてあったっけ？まあ後で聞けばいいや

・・・今はこの感触を楽しもう。

しばらくじつとしていたら彩斗さんの顔が下りてきた・・・

なんだろ・・・すごくドキドキする。でも、彩斗さんって想い人いるって言っていたような・・・

そして、そのまま顔が下りてきて額をぶつけられた

そのまま、また意識が飛んでいった。

Side Ayato

痛え、俺は眠っていたらしい。

妖夢さんに頭ぶつけて起きたんだけど、妖夢さんまた気絶してる。

ふと思った。向こうの世界にあったフィクションである能力って

適性次第では物にできるのだろうか？

うーん・・・そうだ、紫姉さんに聞いてみよう。

スキマを開いて紫姉さんの気配をたどっていく。

「紫姉さん」

「彩斗じゃない。どうしたの？」

「俺の能力ってフィクションにも効果あるの？」

「微妙なところね・・・試してみたら？」

「じゃあ、『とある魔術の禁書〇録』から」

少年読破中・・・

「どうだったの？」

「完全記憶能力しか出てこなかった・・・」

「それは・・・悲惨ね」

「まあ、できることだとわかったしいいか、じゃあねー」

「幽々子は私の古い友達だからよろしく言っておくのよ」

部屋に戻ると妖夢さんは起きていた

「どこ行っていたんですか？彩斗さん、しかもスキマって・・・」

「紫姉さんは小さいころから相手してもらってたからいろいろあつてね、ここに戻ってくるときに能力もらった。」

「もらっただんですか！！？ それにその翼は？」

「これはもともと鴉天狗だからあるものです。これは、『自分の中の人と妖怪の割合を操る程度の能力』で自在に変わるってことです」

「・・・もう、何でもありですね」

「・・・そして、沈黙が流れる。き、気まずい・・・」

「そうだ、妖夢さん」

「なんでしょう？」

「これから一緒に暮らすわけだし、堅苦しい言葉じゃなくてもっと、砕いて行こうよ」

「・・・そう？ならそうしようかな」

「うん、そっちのほうが気楽でいい。今日はもう疲れたから寝るね」

ふとんを敷いて、入る。ベッドじゃないのは初めて・・・いや、久しぶりかな

「おやすみー妖夢」

「っ！！／／／／／おやすみなさい彩斗」

そして、慌ただしい1日は終わった。



### 第3話僕と師匠(?)の剣術指導(後書き)

3話投稿しました。

1日1話ペースを保ってますが、

眠気のせいで誤字脱字などが増えているかもしれません

ご指摘お願いします^^

お気に入り登録も日々少しずつ増えているのがここまでうれしいとは・・・

そういえば、彩斗が「文姉」って読んでるけど「文姉」ってどこかで見たような・・・

そのうち、いろいろな作品の言い回しやら、展開やら、いろいろ入りそう・・・

バカテス展開を待っている方もうしばらく待ってください><  
では、また次回に^^^v

#### 第4話僕と妖夢と花見の宴会（前書き）

1日間が空きました。

金曜の夜は毎回こうなりそうです^^；

## 第4話僕と妖夢と花見の宴会

あれから月日は流れ、初めての春を迎えた。

今までの主な1日の流れは

- ・起床（妖夢が布団に何故か入ってきている）

- ・食事

- ・修行

- ・食事

- ・修行（たまに買い出しなど）

- ・食事

- ・外の世界の創作物を見る

- ・就寝（このときは妖夢は自分の布団で寝ている）

の繰り返しをしている。修練の時は基本通常時（1/4）の状態である。

今日もいつも通り布団の中の妖夢を起こして、午前の修行を終わったら

幽々さんが珍しく出てきた。

「精が出てゐるわね。彩斗」

「まあおかげさまで。で、何か用でも？」

「今日は、年1度の花見の宴会なのよ。だから準備を頼みに来たのへー今日、宴会なのか。……。あれ、妖夢がなんか震えてる。もしかして……」

「……。妖夢、宴会のこと忘れてた？」

「ギクウー！ソ……。ソナコトナイデスヨ」

「忘れてるわね」（幽々さん）「忘れてたね」（僕）

「まったく、毎日彩斗の布団にもぐりこんでるからそうなるのよ」

「な……。なんでそれをつ！！？ってそれは関係ないです！！」

「ふふふつ、妖夢顔真つ赤よ。じゃあ彩斗、買い出しお願いできる？」

「わかりました。行ってきます」

少年移動中……

ということでは人里へ。

メモを見ながら必要なものをそろえていく。

・・・これよし、これもよし。これもOK。・・・ん、酒5升？

どんだけ飲むんだよこの奴ら・・・

・・・よし、これでそろった。片手に食材、もう1方に1升瓶  
×5

これは、妖気解放だけじゃきついか・・・

——妖気解放・改（3 / 4）

ふー、うまくいったな。

これで4 / 4もいけたらいいんだけどな・・・

「おい、その妖怪、ちょっと待て・・・って彩斗か」

後ろから来たのは上白沢 慧音。人里で寺子屋をやっている。

実は、たまに授業やってくれと頼まれたり・・・

「慧音さん、どうかしたんです？」

「いや、大きい妖気を感じてきたんだが、お前だったとはな」

「たぶん、いつもより割合多くしたからですかね。」

「つくづくお前は反則じみてるな」

「それはいっちゃだめです」

「ははは、そうか。では、今日の宴会楽しみにしてるぞ」

「ぜひ来てください」

さあ、帰ろうか

少年帰宅中（文よりちょっと遅いくらいの速さで）

「ただいま帰りました」

「速いじゃない。さすが天狗ね」

「今日は妖怪を多めにしましたし、それにまだ完全じゃないですよ」

「ほんと・・・妖力だけはそんなにあるのにね・・・なら今のままで準備に入ってくれる？」

「はい」

少年達準備中・・・

日も沈み、ようやく宴会の準備を終えたところで

幻想郷中の妖怪たちが集まってきた。

少し前に吸血鬼と神様2人＋人間1人来たらしいけどどんな人だろうと、そろそろ始まるみたいだ。妖気解放状態で会場に向かう。

「ん——どこかで見たような・・・」

宴会の人ごみの中、背がかなり低い鬼に捕まった。・・・この人どこかで・・・

「思い出した！！、神社に遊びに来てた妖怪か人間かよくわからない奴！！」

「・・・ああ、確かによく行っていました。名前は射命丸 彩斗です」

「あたしは伊吹 萃香。あんた半妖だったんだねえささ、飲んで飲んで」

「ああ、どうも・・・って僕まだ、未成年なんで遠慮を・・・」

「気にしない、ここは幻想郷だもの。ささ、飲んで」

と言って酒を進めてくる萃香さん。・・・まあ少しくらいいいかな

「じゃあ、少しだけですよ」

ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ

ぶはー

「いい飲みっぷりだねえ、ハイもう一杯」

「どうもどうも……ってこれ以上はやめておきます。今日初めて飲んだんですし」

「初めてなんならやめておくとするよ。でも、次の宴会の時は覚悟しときなよ」

「お手柔らかに」

鬼はよく飲むと聞いていたけど結構きついな……

そんなこと考えながら、ぶらぶらしていると、紅白&amp;mp・白黒コンビが見えてきた。

あれ……どこかであった気がしなくもない。向こうもそのようですつとこつちを見てる。

えーと、確か記憶にあるのはこの紅白を小さくしてと……

『思い出した!』

3人同時に叫んだ。こいつらは博麗 霊夢と霧雨 魔理沙だ。向こうに行く前よく遊んだな

二人揃って彩兄ちゃんと呼んでたな。懐かしいな

「な、なんでアンタがここにいるのよ!」

「彩兄さんはあたしたちが小さいころにいなかったんじゃないの？」

「あー、それについては……かくかくじかってことだ」

「へえそうだったの」

「大変そうだな」

上から霊夢と魔理沙。なんか2人とも反応薄いな……

「いつかは戻ると思うが、それまではこっちいるし、いつでも帰れるからな」

「そのたびに紫がそっち行くの？」

「いや、自分でスキマ開く」

「へえーってなんでスキマが使えるのよ!!」

「紫姉さんがくれた」

「いや、くれたって……そんなことがあるのか？」

「信じてないな……じゃあ見たらわかる!!……………ホラ」

僕はスキマを開く。2人は驚いているようだ。

「ホントに使えるのね」

「その分自分の能力に制限付いたけどな。じゃあ僕は紅魔館ってこの人たちと会ってくるから」

「あー、彩兄さんはあったこと無いんだっただな。あそこの連中は面白<sup>い</sup>ぜ」

「それを言うならこの人たち全員だよ」

そんなことを言って2人と別れる。

そっぴや、紅魔館の人たちってどこにいるんだ・・・

吸血鬼って妖夢から聞いたけど、とりあえず羽ありそうだから探してみよう。

その辺をぶらついてみると、羽と牙っぱいのがある少女を見つけた。

「やっと来たな」

話しかけようとしたときに向こうが話しだした。

「どうい<sup>う</sup>ところですか？」

正直わけがわからない・・・

「なに、お前が我を訪ねることを運命で見たのだよ」

なるほどー、そういう系統の能力か。

「そうなんですか。あと、話し方がかなり不自然です」

「なっ！？私のカリスマっぷりは完璧のはず！！・・・いや、あそこはやっぱこっちか・・・」

メッキはがれました。しかも「うー、うー」唸ってるし。

あ、メイドが鼻血出した。

「一生の悔いなし・・・」

「いやいや、そんなこと言っていないで、止血しましょう」

「あなたがお嬢様が気にしていた方ですか。私は十六夜 咲夜。紅魔館でメイド長をやってます」

丁寧に自己紹介してくれた咲夜さん。鼻血出しながら言われてもどう反応していいやら・・・

「射命丸 彩斗です。とりあえず、鼻血止めてください」

・  
そついい終ると同時に鼻血が止まっていた。しかも適性反応って・・・

『時を操る程度の能力』そのまんま時を操れるわ。止めたり、早めたり、遅くしたりは

できるみたいだけど、戻すことはできないみたいね（byゆかりんばいす）

・・・とりあえず、能力については黙っておこう。

「一つ聞きたいんですが、最近幻想郷に来たんですか？」

「そうですね、ここ1〜2年あたりですね」

「へえー、僕は10年ほど前までいたんですが少し外に出てまして・・・」

「何か理由でも？」

「紫姉さん・・・八雲 紫さんの決定でしばらく外の世界で過ごしてました。」

「それは御愁傷さま」

それからしばらく話しこんでいた。

「では、この辺で失礼します」

「いつでもいいので紅魔館にも来てくださいね」

あー疲れた。部屋に戻って寝るかな・・・

『輝夜！！ここであつたが1000年目今日こそお前を殺す！！』

『その言葉そっくり返すわ。妹紅！！』

一体何の騒ぎだ？それにあの戦い方は何かルールっぽいので縛られていそうだ

「あやや、彩とは弾幕ごっこについて知らなかったね」

いきなり文姉が僕の後ろにいた。

「弾幕ごっこ？」

なんだそれ

「弾幕ごっこは人間と妖怪がともに暮らすために作られたものよ。」

「そうなんだ」

「弾幕ごっこは非殺傷というのと、必ずよけられる弾幕を出すことが大まかなルールね。」

あと、スペルカードって言うのもあるわ」

「スペルカード？」

「必殺技みたいなものを出すときに、この技を出しますって感じで相手に知らせるものよ」

対決の際には、決闘開始前に決闘内での使用回数を提示して、技を使う際には「カード宣言」をするのよ」

「そんなものもあるんだ」

後で妖夢に教えてもらおう。

「文姉。そろそろ部屋に戻るから」

「さすがに疲れた？あ、そうそう修行終ったら新聞記者として手伝ってもらうからね」

「はい、じゃあねー」

文姉と別れて部屋に行こうとしたら何かが抱きついてきた。

うわっ 酒臭いな

「ん？あやとおく？」

それは泥酔した妖夢だった。幽々さん、絶対遊んでたな・・・

「あやとおくしゅき」

「はいはい、・・・もう一回言って」

「もう、何回言わせるのおく？だあゝかあゝらあゝしゅきだって言ってるの」

・・・どうしてこうなった。僕はあいつが好きだし、ここは丁重に断らないと・・・

「妖夢、僕には好きな人が「しってるよう」・・・はい？」

「あやとはおもってるひとのために頑張ってるんでしょあ？」

確かに妖夢にはこのことを話した。

「だったら、あやとの妹にしてもらえばいいとおもったの」

・・・ナンテコッタイ。だめではないけど、幽々さんはどうなんだろう・・・

「いいわよー」

すげータイミングで幽々さんきたし。しかもいいんだ・・・

「なら今から、妖夢は僕の妹だね。よろしく」

「よろしゅくおねがいしましゅ。兄様♪」

ということで妖夢が義妹になった。

今日はホント疲れた・・・もう寝よう。

布団を出して妖夢を寝かして、僕も布団に入る。今日ぐらいは一緒にでもいいと思う。

薄れていく意識の中、僕はふと思った。

妖夢ってかなり酔ってたけど、このこと覚えてるのかな・・・

案の定次の朝、妖夢は自分の言ったことに顔を真っ赤にさせて

幽々さんはそれを面白がり、大騒ぎとなりましたとさ。

#### 第4話僕と妖夢と花見の宴会（後書き）

ふと思ったけど、彩斗の割合変化についてちょっと説明的なものを・

・

人、妖怪1/2のときは「妖気解放」

1/4、妖怪3/4のときは「妖気解放・改」となってます。

人4/4、妖怪4/4はまだ出てきかないので後ほど・・・

名前がイタイ気もするけどwwwこれが筆者の限界ですww

感想、誤字、脱字等、お願いします

## 第5話僕と文姉と新聞記者（前書き）

少し間が空きましたが5話投稿です。

## 第5話 僕と文姉と新聞記者

またまた月日は流れ、ここ白玉楼に来て1年がたった。

白玉楼を去る時、妖夢が泣きまくっていたが、僕の写真あげたら上機嫌になった。

月1回くらいでここに来ることを決められたが・・・僕放置で。

ということで、今妖怪の山に向かっている。

・・・家どこだっけ？

とりあえず、その辺の哨戒天狗に聞いてみることにする。

「ねえ、文姉の家ってどこかわかる？」

「文姉・・・ああ、文様ですか。私が案内しますね」

少年少女移動中・・・

「はい。ここです」

「ありがとね。助かったよ」

「いえいえ、では私はこれで」

これからはのんびり暮らすかな・・・

「ただいまー」

「あ、彩斗帰ってきたんだ。これから取材に行くからついてきて」

・・・のんびり暮らすという幻想は早くも崩れ去った。

そして、半ば強制連行された。

少年少女移動中・・・

「それで、どこいくの？」

「今日は地底ね。地霊殿つてところに行くのよ」

地底は初めてだ。どんなところだろ・・・

そして、地上と地下を結ぶ穴を通っていると、人影が見えた。

「あ、パルスイさん。こんにちは」

「また来たのね。相変わらず妬ましいわね」

「あなたも相変わらずですね。では先急ぐんで——」

「ちょっと待ちなさい。そこの後ろの奴初めてみるわね」

僕のことか？

「あ、僕は射命丸 彩斗です。文姉とは異母兄弟です」

「私は、水橋 パルスィよ。あなた、よくわからないけど妬ましいわね」

「それ、どういうことですか・・・」

地底の人ってみんなこんなに癖があるのかな・・・あ、滴正反応

『嫉妬心を操る程度の能力』相手の嫉妬心を上げたり、下げたりできるわ。

これが原因で地底送りにされたみたいね。(by 毎度おなじみ、ゆかりんぼいす

へー、ってなんか攻撃系の能力少くない・・・？とりあえず、試しに使ってみよう

えーと、妖気解放・改じゃないと使えないのか・・・嫉妬心を下げて・・・っと

「・・・まあいいわ。早く行きなさい」

「では～～」

おー簡単に突破できた・・・さあ、文姉を追うか。

「あら、速かったね」

「嫉妬心下げたら通してくれた」

「あー、納得」

そして、なんかすごい大きい館についた。中から猫が出てきて迎えてくれた。

「あら、後ろの奴は誰？」

「文姉の弟の射命丸 彩斗です」

「あのブン屋に弟ねえ・・・あたいは火焰描 燐。みんなからはお燐って呼んでもらってるよ」

こんなやり取りがあと10回ほど続いた・・・

「さとり様はここにいます」

「誰それ？」

文姉に聞いてみる。

「この主よ。さとりは心読めるから取材は楽ね」

「へえ」

「さて、入ろうか」

「こんにちわー。清く、正しい、文々。新聞ですー。取材させても

「らつてもいいですか？」

「いいわよ。・・・後ろのあなたは？」

「射命丸 彩斗です。文姉の弟になります」

「そう。私は古明地 さとり。ここ、地霊殿の主よ」

「では、取材はいつものでいい？」

「いいですよ」

それから、文姉は無言になり、さとりさんだけが話すようになった。

二人のやり取りを見ながら、僕はふと思った。

文姉を始め、幻想郷の人たちが全力を出したらどうなるんだろう。

自分はそんな人を相手にできるんだろうか・・・と。

・・・文姉の取材が終わったようなので帰ることになった。

部屋を出るとき、さとりさんから話しかけられた。

「あなたの疑問は今、幻想郷で一番強いと言える博麗の巫女の本気を出させればかなう

と思うわ。方法は自分で調べること」

「・・・」

僕は、何も言わず去った。

地霊殿からの帰り道、ずっと最後の言葉について考えていた。

博麗の巫女を本気にさせる――

あいつは昔からさぼり癖みたいなのがあった。

正面から「戦ってくれ」といつても手抜きされるだろう。

文姉は博麗の巫女は異変を解決していると言っていた。

ん、までよ……

異変は全力でやらなければ幻想郷の存続にかかわる。

ならば、それを利用するしかない……

家についてから、僕は紫姉さんに相談することにした。

「今日はお疲れ様、彩斗。もう少ししたら同じように働いてもらうからね」

「わかった」

「じゃあ、私は新聞作りに入るから」

文姉は自分の部屋に入っていた。

それを確認して、僕はスキマを開いて紫姉さんの家に行った。

少年移動中・・・

紫姉さんの家に着いた。

扉をあけると藍さんが出てきた。

藍さんは紫姉さんの式神で、幼いころにお世話になっている。

藍さんに案内してもらい、紫姉さんの部屋に行く。

コンコン「こんにちは、紫姉さん」

「あら、彩斗じゃない。珍しいわね」

「実は相談したいことがあって・・・」

「言ってみなさい」

「———ということなんです」

「霊夢の本気と戦う、ねえ・・・確かに異変を起こしたらできなくもない」

でもね、と紫姉さんは続ける。

「今のあなたじゃ勝ち目は0よ」

「そうか・・・」

「これからの頑張りにもよるとおもうけど、2年間。それだけしか待てないわ」

2年後・・・外で言うとは高校1年生だ。いまさら学校に行くとは思わないが・・・

「まさか、高校に行けとでも？」

「その通りよ」

「・・・何が目的？」

「ちょっと昔、手を貸した人間がいてね。そろそろ監視役でも付けようかと思っていたのよ」

「紫姉さんが手を貸すなんて、珍しい」

「私だつてたまにはそうしたりするわよ。それにあの子もそこに行くように仕向けているわ」

「姉さんも物好きだ」

「ふふふ・・・でも、あの子を守るっていつのなら、霊夢にあっさりやられるようでは駄目よ」

「姉さんありがと。これで目標ができた」

「それはよかったわ。・・・異変をするタイミングはこっちから出すわ。異変は何でもいいけどなるべく影響の少ないようにね」

「はいはい、わかってますよ」

そう言つて、紫姉さんの家を去つた。

・・・決戦は、2年後だ

---

## 第5話僕と文姉と新聞記者（後書き）

この小説・・・初めはバカテスで始まって、過去編として幻想郷編を入れようとした

けど・・・

やっぱり時系列順の方がいいんじゃない？と勝手に思い、

こうなった^^；

そろそろ、幻想編は終わり・・・そんな予感がしなくもないです。

でわまた次話――

## 第6話僕と異変と2つの力

Side Ayato

紫姉さんとの話から早2年・・・

とうとう、決戦の日が来た。

紫姉さんから合図もあつたことだし、異変を始める。

そして、幻想郷に風が走り——暴風が妖力を吸い取り始めた。

・・・さすが幻想郷。妖力の大きさは尋常じゃない。

でも・・・まだ足りない。・・・どうか間に合ってくれ。

Side out

Side Reimu

今日は風が強い・・・とおもっていたら、幻想郷中の妖力が妖怪の山の一点に集まっていた。

このままでは弱い妖怪は妖力が切れてしまう。

「これは・・・異変ね」

私は妖怪の山に向かった。

・・・相手は以前、山に神社が来たときに戦った相手だったけど、妖力が集まっている分、若干強くなっている。

でも、私の相手じゃない。

1匹ずつ確実に落としていく。

そして、あの地点につく手前、

鴉天狗が出てきた。

「幻想の伝統ブン屋：射命丸 文」

「あやや、意外と速かったですね」

「またあんたか、いい加減かなわないとわかってるのだから来なければいいのに」

「まあそうですね・・・今回はかりはちょっと違うですよ」

「なら、私が落とせばいいだけよ!」

言い終わると同時に、私は弾幕をばらまいた。

ここは一気に攻めて、速く元凶を倒そう・・・そう思って投げる札の数を増やしていく。

「風符：風神一扇」

文のほうが耐えられなくなったのか、1枚目のスペルカードを出してきた。

目の前に弾幕が展開されるが、よけられないわけじゃない。それに1度見たものだ。

いつものように1つ1つ見極めていく。

相手のスペルカードが終わった。私はその瞬間を攻めることにした

「靈符：夢想封印」

7色の弾幕が文に襲いかかる。

このまま押し切るっ！！

「風技：暴風の壁」

2枚目を出してきた。・・・このカードは初めてみる。

っ！！これは私の放った弾幕じゃない・・・よく見ると相手の弾幕と相手が弾き返した自分の弾

幕が私に方向に向かってきていた

「そんな技、いつの間に手に入れたのよ!？」

「企業秘密ですよ、私を倒せばわかります」

いちいち感に触るわね・・・

「じゃあ、教えてもらっわよー!!」

「霊符：夢想妙珠」

追尾機能のついた12個の円状の弾幕を展開する。

全弾が文に向かって追尾し、ヒットする。これで私の勝ちだ

「あやや、さすがに負けてしまいましたね」

「私に勝とうつてのが無理なのよ」

私は博麗の巫女なのだから。と付け足す

「でも、異変の元凶はそう思っていないようです」

「え？」

「さあ、行ってください。私に言えるのはここまでです」

・・・この異変を起こした奴は私を倒そうとしている・・・？

そんなことを考える奴が・・・いるわけがない。

この博麗の巫女に立ち向かうものなど・・・

そして、妖力が集まっている地点にたどり着いた。

そこにいたのは、こつちに来てから3年間で伸びたきれいな黒い髪、いつもと変わらない穏やかな表情をしている彩斗であった。

しかし、いつもと違うのは………

彼から感じる妖力が0だった――

「人と妖怪の集大成：射命丸 彩斗」

Side out

Side Ayato

ここから少し麓で戦闘が始まったような気配があった。

おそらく、文姉が戦っているのだろう。

そして、僕は計画を最終段階へと移行する。

もう、十分な妖力は集まった。後は……僕自身の中の妖力すべてを取り出すだけ……

「境界を操る程度の能力」を使い、人と妖怪のパーツを完全に分ける。

妖力のほうは予想道理といったところか、集めた妖力のほうに引き寄せられていった。

ガクン——と急に体が重くなる。

妖力を抜くということはこんなにもきついものなのかと実感する。

それよりも、早く仕上げをするとうとう。

・・・以前、能力の適性を探すときに見たものをそのままできれば、この2つの力の均衡が不安定な存在、「人」と「妖怪」を混ぜることができはらず・・・

今、スキマを開こうとしたとき、紅白の脇の空いた巫女服を着た少女

博麗 霊夢がここに来た。

「早いね、さすがは博麗の巫女・・・といったところかな」

「いろいろ気になることはあるけど、アンタ、その状態は何？いつものような妖力が

全く感じられないじゃない」

やはり、鋭い・・・

「それは今からある事をするためだよ」

「何よそれ。教えなさい」

「まあ、落ち着け。これは最近気がついたことだけど、僕の中の人と妖怪の力はかなり不安定なんだ。原因は母親が異常な量の霊力を

残していったから、そして父が大妖怪であつたから。」

それで、と僕は続ける

「その異常な量の霊力せいで妖力はぎりぎりまで封じられていた。妖力が解放された後も  
霊力が邪魔して安定した状態を保てなかった」

そこで霊夢が口をはさんだ

「そこで、「自分の中の人と妖怪の割合を操る程度の能力」が現れたわけね」

「そういうこと。その状況のまま、完全な妖怪化をすると、霊力が影響して妖力が暴走してしまう。だから、ある1つの方法を実行することにした」

「それが、この異変のきっかけ、というわけね」

「・・・この異変の目的は2つある、1つは僕の方法を実行するのに妖力が足りなかった。大妖怪級の妖力でも、この霊力とは釣り合わなかった。だから見ている通り妖力を集めたんだ。そして僕の妖力も境界を葬って切り離れた。もう1つはここに来る前、ある人をこの力で傷つけてしまった。そして、そのようなことが2度と起こらないように博麗の巫女を倒すことであいつに会う資格を見つける  
つてこと」

「それで妖力が全くなかったのね、2つ目のほうはかなり私情らしいけど」

「まあ、そういうな。本当は戦う準備ができてから霊夢と会う予定だったのだけど、今はこの状態だ。剣が人より少し使える程度ではない。・・・だからもう少し待ってもらおうよ」

そうして、僕は作業を再開する。

境界を介して顕現させる能力は遊戯王の魔法カード「融合」。

かつて、アニメで主人公とモンスターの魂を融合させたときのように・・・

僕の人と妖怪を混ぜる――

「さあ、行くよ！！」「融合」発動！！対象は僕の人部分と僕の妖怪の部分！！」

「人と妖怪の融合・・・？まさか、無理やり混ぜるとはね・・・」

頭上にあつた妖力の塊が人間体の僕に流れ込んでくる。

「う・・・うわあああああああ」

激痛・・・それだけしか僕には感じられなかった。

頭、腕、足、内臓・・・すべてが同時に痛みを出している。

何分たっただろうか・・・痛みは徐々に引いて行った。

その痛みが終わると同時に、今までと違った、感覚が現れた。

「彩斗・・・あんたその妖力・・・いや、霊力もあるわね。しかも両方かなりの量じゃない」

今までと同じ感じだが、圧倒的な量の多さがある妖力。

そして、それに対をなすようにある霊力。

その相対する2つの力が完璧に調和していた。

試しに割合を操ってみるが…何かが違う。

今までのあいまいなものではなく、はっきりとした分割。

「人と妖怪の割合を操る」よりは「人と半妖と妖怪に変化できる」といった感じだ。

「ふう・・・待たせたね、霊夢」

「ホントにあんたは規格外ね」

「ははは・・・否定できないね。じゃあ始め——ようかつ!!」

妖力全開!!（妖怪）

互いに一斉に弾幕を展開する。

不慣れなこちらとは対照的に、慣れた手つきで弾幕を次々と出していく霊夢。

負けじと弾幕を展開していく。・・・っ！！やばい・・・当たりそうだ

「風符：暴風の壁」

自分の周辺に風を起こして相手の弾幕を押し返す。

「これはさっきのと同じね・・・」

霊夢がそんなことをつぶやいていた。

「ということは、文姉はこれを使っただけだね」

「厄介だけど大したことはないわよ」

「そりゃそうさ、これはまだ初歩だからね」

だんだん弾幕の出し方がわかってきた。

今までは押され気味だったが、押し返す。

「霊符：夢想封印」

霊夢が1枚目を出す。ホーミング性能の光の球がこちらに向かってくるが、

すべてが止まって見えるかのように動きが遅く見える。僕は難なくよけた。

「六爪：戦場の舞」

僕はスキマを使い、刀を6本にして弾幕を繰り出す。

1本の時より、数が増え、方向も多くなる。

ここで追いつめたかと思ったが、霊夢は2枚目をだす。

「夢符：二重結界」

結界を張り、全方位に向かって攻撃を仕掛けてくる。

・・・さすがにきつくなってきた。それに霊夢のスペルカードを使うタイミングが

よすぎるという気がする。

「夢符：退魔符乱舞」

霊夢は決着をつけにきたのか、追い込まれている狭い範囲に超高速の針を撃ってきた。

僕はさすがにまずいのでスペルカードで相殺することを試みる

「剣技：無限一刀流、乱立の並」

相殺しながらも、霊夢を落としに行く。

今までとは違い、ランダムに弾幕を出していく。

・・・それでも大半は霊夢のスペルにぶつかり、間を抜けたものは

よけられた。

「・・・さすがだ。このスペルは結構自身あったのだけどなあ」

「あんたこそ、新参者とは思えないわね」

「ははっ・・・じゃあこれで終わらせようかつー!!」

「望むところよ!!」

「秘奥義：無限一刀流、乱立の並、暴風の舞」

「夢想転生」

僕はさっきのスペルに風を付け足した、いわば自分の力の集大成ともいえるスペルを繰り

出す。霊夢は陰陽玉を展開し、紫のお札弾ワイヤーを扇状に8way展開していく。

互いの全力のスペルを出し切った――

そして、僕は被弾した・・・

そう、僕は霊夢に負けた――

霊夢は僕のすぐそこまで来ていた。

「私の勝ちね」

「ああ、・・・負けてしまったな」

でも・・・と続ける

「なんか、すがすがしいな。今ならあいつを暴走することなく守れる気がする」

「今のあんたなら大丈夫でしょ。私はあんたより強いやつをみたことないわ」

「何言ってるんだ、俺の目の前にいるだろう」

「そうね」

クスクスと笑いだす霊夢。

さて、そろそろ紫姉さんが来てもいい頃だ

「やっぱり負けてしまったわね。彩斗」

噂をすればなんとやら、紫姉さんが現れた。

「そつだね、でも今なら大丈夫な気がする」

「そう・・・それじゃあ、向こうに行く準備はできているの?」

「いつでもいいよ」

「え...?向こうに行くってまたもどるわけ?」

そこで霊夢が入り込んでくる

「ちょっと紫姉さんに仕事を頼まれてね。幼馴染にも会えるしね。休みのときはできるだけ帰ってくるから」

そう言つて霊夢の頭を撫でる。

「・・・また子供扱いして。文達には伝えてあるの?」

「朝伝えたよ。」

「なんなら、早く行つてきなさい。どうせ、恋人の1人や2人いるんでしょ?」

霊夢が拗ねかけている・・・

「そう拗ねるな。いなくなるわけじゃないんだし」

「・・・・・・・・」

今度はだんまりか

「・・・・行つてくるよ霊夢」

「・・・行つてらっしゃい彩兄さん」

そうして僕は幻想郷を離れた。

スキマの中・・・

「あ、言い忘れてた」

紫姉さんが唐突に言う。

「私の手違いで入学に間に合わず、2学期からの編入ってことになつてるけど気にしないでね」

・・・はい？

「まじです？」

「マジ」

「ははははは・・・・・・」

駄目だこの人・・・

そんなことを思っていたらスキマが終わりを迎えた。

そして僕の新たな場所、文月学園へと向かっていく――

## 第6話僕と異変と2つの力（後書き）

幻想郷編・・・終了!!

いやー、短くて駄文だった。

いろいろな小説をみさせていただいている中、戦闘描写は難しいです  
と言っている人が多いけど・・・確かに難しかったです。

しかもテキトーな部分が多いwww

ここで、また彩斗の変化について

妖力封印（人間）

妖気解放（半妖）

妖力全開（妖怪）

となっております。

次回からとうとうバカテス編・・・

長かったあー。ここまで来るのに・・・

では今回はこの辺で失礼します。

## 第7話僕とあいつと文月学園

Side Ayato

季節は残暑の残る9月・・・僕は始業式1日遅れで編入することになった。

坂道を歩いて行くとうやうやく文月学園が見えてきた。

紫姉さんが事前に手続き的なことを終わらせてあると言っていたから

今日から編入できるらしい。無論、妖気封印状態ある

門が見えてきて、その横に人がいた。

おそらく担任かその類の先生だと思うことにした。

「こんにちわ」

「お前が、1年の編入生の射命丸か？」

そこにいたのはいかにもスポーツマンとした男の教師だった。

「はい」

「俺はお前のクラスの担任で生徒指導をやっている西村だ。このまま教室に案内するからついてくるように」

「はい」

「……いまさらだがここ、文月学園は科学とオカルトと偶然でできた「試験召喚システム」

の試験校である。2年からは進級テストでクラスがAからFに振り分けられる。各クラス

は設備に差がある。Aクラスが高級ホテル並みだとFクラスは卓袱台＋畳といった感じだ。

そして、「試験召喚獣」を使い「試験召喚戦争」を行って、上位クラスに勝つと、

クラス設備の交換ができる。ちなみに、オカルト「妖怪で偶然」この学園長が

紫姉さんと出会ったことであるという裏話もあったりする。

教室についたようだ。1年だからか教室は普通のようなのだ。

先に先生が入っていった。

「おい、お前ら！！HR始めるぞ！！席に着け」

「今日からこのクラスに編入生が来る」

「「「キタ————」」」」

「うるさいぞ、編入生は……男だ」

「「チツ・・・・・・・・」」

・・・・・・・・何このクラス、怖い。

「おい、入ってこい」

先生に呼ばれたので教室に入る。

「射命丸 彩斗です。趣味は写真撮影で、新聞部に入ろうとおもってます。これからよろしく願いします」

「皆、仲良くするように。射命丸の席は・・・あそこが空いているな、そこでいいだろう」

「はい」

そう返事して、指定された座席に向かう。

「射命丸じゃったかの？ワシは木下 秀吉じゃ。これからよろしくじゃ」

「うん、よろしく」

隣になったのは男子の制服を着ていながらどう見ても女の子の顔をして

翁言葉を使う変わった人だった。

・・・・・・・・あれ、どっかで見たような。まあ気のせいだろう

「・・・おぬし、どこかであった気がするのじゃが、気のせいかな？」

「うーん、僕もわからないね。3年前にこの町を出て帰ってきたからその時にあつてゐるかも」

向こうもそう思っていたようだ。しかし、3年前・・・かあー。案外早いものだな...3年って。

ん、3年前・・・？あの日に会ったような気もするけど、あいつは男じゃないし。

.....ちよつと整理してみよう。あの日、あつたのは木下 優子（♀）。

今、隣の席にゐるのは木下 秀吉（推定♂）。

名字が一緒・・・ってことは・・・

双子・・・？あ、そーいやあいつには弟がいたような...って

「では、HRを終わるぞ」

いろいろ悩んでるとHRが終わりクラスの他の皆が転校生に質問攻めする体制に入った時、

「「あ—————」」

僕と秀吉は互いに指をさして叫んでいた。

「おぬし、彩斗出会ったか、久しいの」

「なんか見たことあると思ったら秀吉かぁー。ようやく思い出したよ」

「髪が伸びててわからなかったぞい。それに連絡してもよからうに」

「いろいろあったからねー。あと、僕秀吉のこの番号知らないよ」

おもいで話しに入ろうとしていると、茶髪の男子が話しかけてきた。

「えー・・・と、射命丸君だっけ？僕は吉井 明久。これからよろしくね」

「彩斗でいいよ、射命丸って長いでしょ？吉井君」

「僕も、明久でいいよ。で、その秀吉とはどういった関係？なんか久しぶりに会ったって感じが出ていたけど・・・」

「ああ、僕と秀吉は幼馴染で——」「総員、狙え——！！」・・・は？」

気がつくとクラスの男子大半が襲いかかろうとしていた。全員敵意むき出しだった。

これ、やっちゃっていいよね・・・人間時でも剣術は使えるし、スキマも出せるし。

何より、正当防衛って奴じゃない？

「秀吉、僕の後ろにいて」

「わかったのじゃが、逃げなくていいのかの？」

秀吉はそう聞いてきた。普通この人数相手だと逃げるけど弾幕に比べたらゆるい

「大丈夫だよ」

そう言つて、襲いかかってくる奴らをスキマから出した剣で片っ端からなぎ倒していく

もちろん、峰打ちだがみぞおちを狙ってKOする。

最後の1人を倒したら教室の中は骸の山ができていた。

「彩斗、おぬしなかなか強いのお」

「まあね、あの日みたいに力におぼれたくないから・・・」

「そついや、あの日に何があつたのじゃ？姉上も話したがないのじゃ」

「俺も、気になるな。とくにその物騒なものを出したスキマっぽいのが・・・」

そこに、筋肉質の男子生徒が立っていた。

「・・・よく見ていたね。で、君の名前は？」

「坂本 雄二だ。雄二でいいぞ、射命丸」

「僕も、彩斗でいいよ。・・・この話は昼休みでいいかな。なるべく知られたくないからこの3人だけで」

「いいぞ、じゃあ昼休みな」

そう言つて雄二は自分の席に帰つていった。

キンコーンカーンコーンキールコーンカーンコーン

やっと4時限目まで終わった・・・

チャイムに違和感があつたが気にしないでおく。気のせいだろ。

弁当（手作り）を食べようとしたら、雄二がやってきた。

「彩斗、屋上行こうぜ。話もあるしな」

忘れかけていたな...

「そうだったね。秀吉も行くよ」

そして、屋上に着いた。

「で、彩斗よ、あの日何があつたのじゃ？」

「・・・まず、この状態から説明しないとな」

妖気解放――

「背中から翼が・・・」

秀吉は驚いた顔しているけど、雄二は何か考え込んでいるようだった。

「まずわかってほしいのは、僕は人じゃない。妖怪だ。完全に妖怪でもないからさしずめ半妖ってところかな」

「ということは、人間でもあるってところか？」

「そうだね、でも僕の場合は少し特殊で妖怪が持つ妖力と妖怪が持つことがありえない霊力があったんだ。それで、ついさっきになるかな...その相反する2つの力を混ぜたんだ」

秀吉はなんかさっぱりって感じた。

「・・・どうやって混ぜたんだ？さっきのスキマっぽいやつか？」

「あのスキマ「境界を操る程度の能力」って言うんだけど、あれも使った。でも、一番役立ったのとは違うかな」

「それじゃあ、何を使ったんだ？」

「それを言う前に、遊戯王って知ってる？」

「ああ、昔遊んだな」

「ワシもじゃな」

ここにあったんだ…遊戯王。後でみんなで遊ぼうかな

「なら、融合ってわかるだろ。それを使うとどうなる？」

「決められたモンスター2体以上を融合する…ってまさかお前  
！！」

雄二は気がついたようだった。

「雄二は気がついたようだけど、秀吉はわからないっぽいね。…  
僕はその融合を使って2つの力、霊力と妖力を混ぜたんだ。それで、  
人間にもなれるし、半妖や妖怪にもなれるようになった」

「そうだったのか」「そんなものなのかの」

2人とも一応は納得してもらえたようだ。

「それで、この力を手に入れるきっかけとなったのが3年前のクリ  
スマス」

「その日は確か暴力団グループが警察に捕まったって新聞に載って  
いたな」

確か…と雄二は続ける

「暴力団の奴らの話だと、やったのは黒翼の天使…といってようだ

が」

黒翼の天使…ねえー

「そんなことになっていたんだ…あの日、僕は幼馴染の秀吉の姉さんに近所の公園に呼ばれたんだ。そして、たぶんその暴力団のことだろうね。そいつらが彼女をさらったんだ」

それでね、と続ける

「僕は怒り狂って、今まで出てこなかった妖怪の血が目覚めたんだ。そして奴らを倒したんだけど、……あいつは怖がっていた。それを見たときにもうここにはいられないと思ったんだ」

「なるほどな」「そんなことがあったのじゃな」

2人違った感想と口にする。

「なら、黒翼の天使ってのはお前のことか？」

雄二が聞いてくる。

「多分そうだね」

「時に彩斗よ、姉上とはもう会ったのか？」

秀吉が話題を切り換えてくる

「まだだよ、あいつにはまだ合わす顔がないからね」

「ホントにそうかの・・・？姉上はおぬしが去ってからどこか浮かない顔をしたままだからのう。一度会ってみてはどうじゃ？」

・・・確かに自分の思い込みかもしれないけど、それでもまだ会いたくないな。

「これは自分の中のけじめだから、まだ会うわけにはいかないかな。秀吉も

僕がこの学園にいるってことは黙っておいてもらえる？」

「ふむ…そういうことならワシは何もできんのう。じゃが、一つだけ言わせてもらうぞい」

秀吉は一呼吸おいて続けた。

「姉上は怖がったといったのじゃが、それでもおぬしを好いておるぞ」

そう……か

「わかったよ、ありがとね。秀吉」

「・・・お前も大変そうだな、人ごとじゃないが」

ということとは、雄二もそういうことがあるらしい。

「雄二も何かあるようだけど、お互い頑張ろうか」

「そうだな……」

そうして、僕たちは教室へ帰っていった。

教室に帰ったとたん、一人の女子生徒が明久に関節技決めてたのは引いた。

キール、コーン、カーン、コーン

ようやく授業が終わった……。今までの生活がアレだけに死にそうだ

「彩斗、今日は部活がないから一緒に帰らんかの？」

秀吉が誘ってきた。同時に戦闘態勢に入る男子ども。

「いや、今日は新聞部行ってみるよ」

「そうかの・・・じゃあ、また明日」

「バイバイ」

そうして新聞部に行こうとしたが、学園長に会ったとけと紫姉さんが行ってたのを思い出した。

学園長質と書かれた部屋に来てノックする

コンコン「入りな」

「失礼します。学園長」

「アンタ確か編入生じゃないか。こんなとこまで何のようさね」

「僕がこの学園に来た理由を紫姉さんが伝えとけって言うってたので……」

紫という言葉に学園長が反応する。

「紫ってあの八雲 紫のことじゃないだろうね？」

「その通りです」

「ということはアンタも妖怪かい？」

「そうなりますね」

といって、妖力開放をする。

「……目的は何さね？」

「この学園の監視ってとこかな」

「監視……ってあの年増も切羽詰まってるのかねえ」

「知らないって。紫姉さんはあまり変なことはするなって言うってたけどアンタどんなことやってたんだ？」

「アンタに言う筋合いはないさね。用がそれだけかい？」

なんか、厄介者として見られてるけどいいか。

「あ、たまに二日酔いで学園来るけど見逃してくれ、あと僕的能力を召喚獣に使えるようにしてほしい。仕様はそっち任せる」

「二日酔いってアンタまだ未成年さね。召喚獣の件はこっちのルールの上で使えるようにはしてやるよ」

「幻想郷には年齢関係ない。じゃあ、今日はこの辺で」

妖気封印をして学園長室を出る。

「また・・・厄介なのが来たさね」

去り際にそんな言葉も聞こえてきた。

学園長室を後にして、新聞部へ行った。

「こんにちはー。新聞部に入りたいのですが…」

「あら、新入部員さん？私は部長の荒川 あかりよ。ようこそ、新聞部へって言ってもほかの部員は取材に出かけているけどね」

「それで、他の人がいないのですか。では、これからよろしく願います」

「早速で悪いんだけど、今「学年の美少女ベスト5」ってのをやってね1年生の部をちょっと手伝ってもらいたいのよ」

「わかりました。誰の所へ行けばいいですか？」

「今、校内にいるはずの霧島 翔子さんと木下 優子さんの2人を  
お願いね。これ、写真」

「了解です」

そうして、写真を貰って新聞部の部室を出て行った。優子のは部屋  
に飾ろうかな…

いや、飾ろう。規定事項だ。

校門のほうに行ってみると下校しようとしている霧島さんを見つけ  
た。

「すみませ〜ん霧島さん。新聞部ですが、ちょっと取材させてもら  
ってもいいですか？」

僕は、記者の仕事をしていると敬語になっってしまう。文姉の影響だ  
ろう。

「……………わかりました」

「ご協力ありがとうございます。では……………」

そうして、霧島さんの取材を進めていく。

「……………」。  
はいこれで終わりです。御時間ありがとうございます  
ました」

「……………あなたも1年？」

「はい、今日編入した射命丸 彩斗です」

「……………そう、私は霧島 翔子、よろしく」

「よろしくです、霧島さん」

「……………翔子でいい。あなたはいい人だから」

「……………どこでいい人と思ったのかはこの際ほっとこう

「そうですね、僕も彩斗でいいですよ。では次があるのでこの辺で」

「……………また明日」

さて、次を探さないと。

校舎内の自習室とされるところを探しまわったら優子を見つけた。

「こんにちわ、新聞部です。取材させてもらってもいいですか？」

「また、来たわね、新聞部。……まあいいわ受けてあげるわ」

あれ、こいつこんな性格だっけ…

「では、始めます。まず、恋人はいますか？」

部長からもらったメモに書いてある取材事項を読み上げていく。

「いないわ」

「気になる方は？」

「……………いないわ」

なんだろうこの間は。

「趣味は？」

「読書よ」

そうそう、こいつ確か腐女子……………

「特技は？」

「柔道ね、得意科目も柔道よ」

「そうですか、苦手科目は？」

「特にないわね」

「そうですか、最後に一言お願いします」

「新聞部の取材がしつこい」

「はい、ではありがとうございました」

「二度と来ないでほしいわね」

ははは・・・ホントに嫌ってるみたいだな。そう思って部屋に戻るうとしたら呼びとめられた。

「ちょっと待ちなさい。アンタ初めてみるけど編入生？」

「はい、そうですけど」

「へえーアンタがそうなのね。名前は？」

「射命丸 彩斗です」

あ、本名出してしまった...

「・・・え、もしかして...あの彩斗？アタシのこと覚えてる？」

あ、ばれた。どうしようかと考えてみる・・・.....よし、優子を試してみよう。

「あやや、ばれちゃいましたね。そう、僕だよ優子」

「なんで・・・ここに？」

「それを話すならこの状態にならないといけないのだけど」

妖気解放――

予想道理というべきか、優子は怯えていた。僕は、ここを去ること

に決めた。・・・あの時と同じように

「・・・・・・・・・・では、取材も終わったので帰らせていただきますね」

記者モードになってその場を去る・・・

優子が何か言っていたけど気にしない。

そして、部室に戻ったが、鍵がかかっていたので明日持つていこうと思う。

僕はそのまま、帰路についた。

僕は・・・・・・・・また優子から逃げた――

次の日、文々。新聞を張り出したのは言っまでもない。

## 第7話僕とあいつと文月学園（後書き）

日が少しあきましたが、第7話です。

ようやくバカテス編に・・・今回は少し長めです

でも本編までは@1話はさむことになると作者の脳内スケジュールに載ってます。

最近、部活の方が大変ですが・・・少しずつでも書いていこうと思います

ここらへんで彩斗の現在使用可能能力について・・・

- ・ 自分の適性に合った能力を複写する程度の能力
- ・ 人、半妖、妖怪に変化する程度の能力
- ・ 剣術を操る程度の能力
- ・ 時を操る程度の能力
- ・ 境界を操る程度の能力
- ・ 嫉妬心を操る程度の能力
- ・・・・このくらいですなー

ちと、設定談を

現在彩斗君は人間時で能力をすべて使えるけども、妖怪に近いほど効果が増す...ということとなっています。

この場ですが補足しておきます。

でわまた次回に^^

## 第8話 僕と優子と聖なる夜の日・リターンズ

Side Ayato

編入の日から月日は流れ・・・

2学期も終わりが近くなってきました。

今日は、12月25日。

街はクリスマスムードで一杯である。

恋人といちゃいちゃする者もいれば、リア充爆発しろ！・・・とか言ってるやつもいるだろう。

僕こと、射命丸 彩斗も恋人と一緒にいる奴は羨ましく、妬ましいわけで、

必死で自分の嫉妬心を操り、校舎へと向かっていた。

靴箱を開けて、中靴を取ろうとしたら――手紙があった。

バタンッ

速攻で靴箱を閉めて、周りに誰もいないことを確かめる。

そーっともう1度あけると、確かに手紙があった。

どうやって保管しようかと考えていたら、秀吉が来てしまった。

「おはようなのじゃ、彩斗」

「お、おはよう・・・秀吉」

秀吉はいつものようにといった感じで靴を履き替える。

「ん？彩斗、どうしたのじゃ？なんで靴をはきかえないんかの？」

「ちょっと用事があつてね…先に行つてよ」

僕は、秀吉が先に行くのを待っていてしようとしたが、逆に不信感を出させてしまったようだ。

「そうかの」

「う、うん。また教室でね」

なんとか、秀吉は行ってくれたようだ。

さて、誰もいないうちに手紙を取り出そうとしたら…

「おう、彩斗じゃねえか。早いな」

筋肉ゴリラが現れた！！

「お、おはよう。雄二」

「んで、何を取ろうとしていたんだ？」

「靴に決まってるじゃん」

・・・妙にするどい。

「ん、ならいいがな・・・」

そこで僕はおもいついた。靴を取り出す瞬間にスキマで手紙を取り除けばいいんじゃないかと

作戦A、実行・・・

靴を取り出そうとして、靴箱の中にスキマ開いて・・・手紙を押しだした！

よし、成功だ・・・

ヒラッ・・・

唐突に僕の足元に見覚えのあるものが・・・

だ・す・と・こ・ま・ち・が・え・た！！！！

「なんだこれ・・・手紙か？」

それを雄二が取ろうとする。

やばい、最終手段。THE WORLD 発動！！

時は止まった。僕は一安心して、手紙を回収した。



「問答無用じゃあ！！野郎ども奴を捕えろおおおお！！」

僕の声もほかの大声で消されていった。武器でも出すかと考えていたら

「お前らっ！静かにしろ！」

西村教諭こと鉄人の一言で静まった。

「出欠確認を続けるぞ」

「。。。」「射命丸クロス」「。。。」「射命丸クロス」「。。。」「射命丸クロス」

「射命丸」「殺せるものならやってみな」

ここで、挑発してみることにした。

「。。。」「射命丸クロス、だが、あいつに勝てるのか？」

「。。。」「やってみなきゃわからんだろ」

「。。。」「無理なら吉井で我慢するか」

「。。。」「それで行こう」

「ちょっと待って、なんで僕が・・・」

「よし、今日も遅刻欠席なしだな。今日も一日頑張るように」

明久の言葉は無情にもスルーされた。哀れだな…

鉄人が教室を出て行って、僕VS男子軍の構図が出来上がった。

「総員、突撃っ！！」

敵わないかもしれないと知っておきながら、バカの明久の号令で全員突っ込んでくる。

嫉妬心あげてみたから、理性はないだろう…

・・・そっいゃ、昨日新技見つけたのを思い出した。試してみよう。  
スキマからバスターソードを取り出す。

「全員寝てもらっようっ！」

「超究武神波斬」

「ぐわああああああ」

数秒後、屍の山ができていた。即座にバスターソードを戻す。

「・・・相変わらず強いな、彩斗。しかもさっきのはFFだろうっ」

元凶雄二が話しかけてくる。

「雄二、お前は、突撃しなかったのかよ。しかもラブレターって当てるとはね…まあ、はったりでもこいつらは動くけど」

「そうだな…それに本物だったとは俺も驚いたぞ」

はったりだった……

「ホントにはったりかよ。さてと、こいつらがおとなしい間に読んどくかな」

「俺は見ないほうがいいか？」

「自由どうぞ」

そういつて、手紙をあけると

「今日夜7時に。。公園に来てください」

の一文だけだった。

「名前は書いてないね」

「彩斗、それがラブレターかの？」

「そうだけど…」

そう言つて秀吉は手紙をじつと見つめはじめた。

「この字……姉上のと似ているのう」

「秀吉の姉貴つて確か木下 優子だよな」

と雄二が確認のためか、聞いてくる

「そうじゃな、よく間違われるがの」

「それは気の毒だな…」

「それにしても優子がねえ…」

とつぶやいて、手紙を見る。

「そういえば、姉上は3年前にも彩斗を呼び出しておったの」

「そうだったね」

「3年前って言うつと前に話してもらったあの日か？」

「そうだよ、雄二。あの日は確か直接行ってもらったはずだったかな」

「あの時はワシの家の隣に彩斗が住んでおったからの」

「そういえばそうだったな…またあそこに住みたいという気もしなくはないけど」

今は無理だろうな…いろいろと。

キンコーンカーンコーン

そこで、次の授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「じゃあ、俺は席に戻る。頑張れよ、彩斗」

そう言つて雄二は戻つていった。

1時限目、理科総合で「射命丸の。。に塩酸を」とか言つていた奴がいたけど、気にしなくていいだろうと思い、昼休み、飯で起きた以外きっちり放課後まで寝て過ごした。

待ち合わせ場所の。。公園についた。

時刻は18時20分。かなり早いけど部活もないし、暇だったから早く来てみた。

といつても待つている間も暇なことに変わりはないので、スキマから刀を取り出して

手入れをして待つことにした。

・・・・・・20本目が終わつたところに人影が見えた。

こちらに歩いてきていたのは確かに優子だった。

僕は、刀をしまつて待つ。

優子が公園の敷地内に入った時、隅っこの茂みから何かが出てきた。

それは、人であり優子に襲いかかろうとしていた。

その時、僕は3年前の光景が浮かびあがってきた。

もう・・・あのようなことは起こしたくない・・・

そのために・・・そのただけに、僕は・・・いや、俺は幻想郷へ行ってきた。

2度と・・・あいつを泣かせないために・・・っ!!

妖力開放!! 「時よ...止まれ!!」

妖怪化のあと、すぐに全開で能力を使用する。

優子のすぐ横で止まり優子奴らからを少し遠ざける

「そして、時は動き出す」

能力を解除した後、声を出させる前に刀で昏倒させる。

「なんだデメエ・・・」

仲間が出てきたようだった。人数は3人

「そうだね...黒翼の天使とでも名乗っておこうか」

「オイ!!黒翼の天使って言ったら暴力団1つ潰したって噂じゃ・・・」

連中の一人がそう口にした瞬間そいつ倒した。

「さあ、次はアンタらだ」

そう言っただけ残り2人を同時に倒した。

・・・終わった。俺はあいつを守れた・・・。

だけど、妖怪化した以上あいつとは会っちゃいけない。

そう思ってその場を去ろうとした・・・時

「待ってっ!!」

優子が後ろから抱きついてきた。

「なんで逃げるのよっ!! アンタはいつもそうやってアタシから逃げて・・・」

「俺はあの日にお前を怯えさせた。お前をさらった奴じゃなくて俺がな」

「そんなのどうだっていいわよ!! 確かにあの時は怖かったけど、アンタがいなくなってアタシがどのくらい後悔したかわかる?」

そう言っただけ優子は一息おいて言った。

「アタシは彩斗のことが好き。3年前彩斗をここに呼び出したときからずっと・・・ずっと・・・」

そう言われた。なら答えるしかないじゃないか・・・

「・・・俺がこの町を去った理由はわかるか?」

「——っな、なんで今そんなことを・・・」

「まあ聞け、それは優子、お前のためだ」

「・・・アタシの・・・ため？」

「そう、あの時俺の力は暴走してしまった。だから2度とそんなことが起こらないように。」

そんなくだらないことで優子を傷つけないから俺は故郷である幻想郷へ行った」

「・・・そうだったの」

そして、俺は優子のほうに向きなおってこう告げた。

「だから、俺、射命丸 彩斗は木下 優子のことが好きだ——」

「うん・・・」

「こんな俺でもいいか？」

「そんなアンタがいいのよ」

優子の目から涙かこぼれるのが見えた。

「ははは・・・泣かせないと決めたのにな」

そんな幸せの中、頭の中に声が聞こえてきた。

（彩斗、青春してるわね）

（紫姉さんかよ、こんなときに何の用？）

紫姉さんが能力使って話しかけてきた。・・・ということは見られてたってことか

とりあえず、時を止めてこっちに専念する。

（おめでたい雰囲気だけどこの子人間でしょ？あなたはこの子が死んだらどうするの？）

（あ・・・）

忘れていた。俺は半妖で、優子は人間。寿命でどうしても優子は先に死んでしまう。

（そんな事だろうと思ったわ。今回は特別にいいこと教えてあげるわ）

なんかむかつくけどおとなしく聞くことにした。

（今回のみ限定でその子を妖怪にすることを幻想郷の創始者の名のもと許可するわ）

（あ、ありがとうございますってそんなことできるのか！！？）

（不可能ではないわ。方法は、その子に妖力を直接注げばいいのだけど・・・手段はキスぐらいしかないわね）

まじかよ…まあキスぐらいなら…（もちろん、軽いほうだったら注ぐなんて無理よ）

ですよー……………

（・・・ほかはないのか？）

無理だろうと思うけど聞いてみる

（今のところそれがベストね）

（そう…わかった。ありがとな紫姉さん）

（あなた雰囲気変わったわね…それが本性ってことになるとおもっけど…まあ頑張りなさいよ）

紫姉さんからの通信が途切れたので時を動かす。

「優子、ちょっと話があるんだけど」

「なによ」

「俺のこの姿についてかな…」

「まず、俺は人間じゃない。妖怪だ。だから、寿命が人間と比べてかなり長い」

「だから、あんな動きができるのね…それに寿命が長いってどのくらいなの？」

「1000年以上は軽く生きれる」

「・・・ということはアタシが死んでからあんたはずっと1人なわけね」

「そういうこと。俺にとっては耐えられない・・・だから俺はある人から助言をもらった」

「それは――優子、お前を妖怪にすることだ」

優子は少し黙り込んで、問いかけてきた。

「それって、1000年以上一緒にいられるってこと？」

「そうだな」

でも、と続ける

「そうなってはもう人には戻れない。俺に飽きたときとかもどうしようもないしな」

「あんたに飽きることなんてないわよ。アタシはアンタと一緒にならどこでも行くし、人も捨てるわ」

優子はそう言い切った。

「そうか…ならこれはもう、結婚の約束といってもいいな」

少し笑いながら優子に言う。

「ふふ・・・そうね」

優子も返してくれた。

「で、これから優子を妖怪にするんだけど・・・」

「そついや、どうやってやるのよ」

「それはね・・・ちょっと目を瞑ってて」

「何よ・・・」

とか言いながらも優子は目を閉じる

俺は出せるだけの妖力を高めていった

そして、優子を引き寄せて「抵抗しないように」といって

優子の唇に自分ののを合わせた。

そして舌を絡めていく・・・

優子は一瞬驚いたようだったが、今は身をゆだねている

数秒間ずっと続けていて、妖力を注ぎきったので口を放す。

優子は頬を紅く染めていて2人の間には糸が通った。

「・・・随分と派手なことやってくれたわね」

「嫌だったのか？」

そう言ってみると優子は目をそらして「別にそんなことはないけど」といった

「なら、いいじゃん」

「立ったままはさすがにしんどいからベンチに座ろうか」

「いいわよ」

俺たちはベンチに座る

「・・・で優子は妖怪になったわけだけど、自分の中に今までとは違う感覚があるのはわかる？」

「うん」

「なら、それを体全体に広めてみて」

「わかったわ」

優子はそう言って集中し始めた。そしてすぐに黒の翼が出てきた。

「今の状態が妖怪だ。俺たちは鴉天狗だから翼が生えてくる。俺やお前は人間の血もあるから翼は消せるようだけど」

「へえー、これって飛べるの？」

「飛べるよ。それは後でやるとして、次は能力だお前の能力は・・・」

「あらゆるものに完璧に変化する程度の能力」かな。何か自分がなりたいってものを思い浮かべてみて」

「わかったわ」

そうっ言っつて優子は能力を使った。変化したのは猫だった。・・・おもわず抱きしめてしまった。

「ちょっと、痛いし、くすぐったいわよ」

「ああ、ごめんごめん」

後押し見しながらも優子を解放する。

「それが能力の使い方だから忘れないで」

「ええ」

「じゃあ、ちよつと散歩しようか」

そう言っつて、優子をお姫様だっこする

「ちよつと／＼／＼／＼／＼おろしてよ」

「だーめだ」

そして、飛び立つ――

「いい眺めだろ？」

「そうね」

夜の空の旅を2人きりで十分堪能した後

そのまま、優子を家に送った。

次の日、優子と一緒に登校したら男子どもに襲われたから返り討ちにした。

優子は隣で「スタアアアライトオオオ・・・」とか言ってたのは気のせいだ・・・

いや、そうあってほしい・・・

## 第8話僕と優子と聖なる夜の日・リターンズ（後書き）

ついにここまで来た… 8話投稿です

今思えば…この優子襲われすぎじゃ・・・まあいいかw

次回からようやく本編に・・・

長かった・・・しかし、文章は駄文で短いorz

優子はノリで妖怪にしちゃったけどいいよね。。

今日はこの辺で^^

ではまた次話で

## 第9話俺とバカ×沢山と試召戦争

Side Ayato

校舎に向かう坂道の両脇には桜が咲き誇っている

俺は優子と並んでその坂を歩いていた。なぜ一緒かというと、

新年に入って引っ越しをして、以前住んでいた木下家隣の空き家に移った。

その時に久々に会ったおじさんには「いつ結婚するんだ？」と聞かれ

おばさんには「いつでも襲っていいからね」って言われたりして優子ともども

終始真っ赤だった。それに、おばさんの発言はかなりアブナイだろう…

そして、なんだかんだで許婚状態にすぐ自然になったわけだが…

それで、優子とは一緒に登校するようになった。

ふと、優子が問いかけてきた。

「ねえ、次の宴会はいつ？」

「えーっと、来週くらいだとも思う。そのころには桜が満開だろうし」

「そう・・・じゃあ、その時に幻想郷の人にあいさつに行きましょ  
うか」

周りの嫉妬の視線がやってくるが、パルスィよりましだ。

そんな・・・他愛のない話をしながら玄関へ向かっていく。

「木下、射命丸。相変わらずだな」

玄関には鉄人こと西村教諭が立っていた。

「西村先生おはようございます」

「鉄じ——西村先生おはようです」

「射命丸、さっき鉄人と言いかけなかったか？」

「・・・気のせいでは？」

「ふむ、そうか・・・」

危ない危ない・・・いつもの癖で「鉄人」って呼ぶとこだった。

「アタシはあっちだから後でね」

「どうせお前はAクラスだろ」

「ふふふ・・・わからないわよ」

そう言つて優子は自分の1年の頃の担任の所へ行つた

「本当にお前たちは仲がいいな。ほれ、クラス分けの結果だ、受け取れ」

「ども」

一応だが、頭を下げた受け取る

クラス分けを書いた紙だが、ごく丁寧に封筒まである。

「そういえば、なんでこんな面倒なやり方でクラス分けを発表してるのですか？」

「普通はそうするんだが、ウチは世界的に注目されている試験校だから、こういう変わったやり方もその一環ってわけだ」

「そうなんですか」

ところで、俺のクラスだが、実は振り分け試験の時の記憶が曖昧なのである。

だいたい予想は付いてるけど…

「射命丸、今だから言つがな」

「なんでしょっ？」

「学園長からいろいろ多めに見てくれと言われているが」

「確かにそんなお願いもしました」

そう言いながら封筒を開ける

「せめて、試験の日くらいは二日酔いになるなよ……」

【射命丸 彩斗……Fクラス】

こうして、俺の高校生活2年目は始まった。

靴箱付近で優子と再会した。

「で、どうだった？」

「Aクラスよ。彩斗も普通にやればAクラスだともうけど」

さすがだな…裏と表がはつきりしてらあ

「なんか、むかついたのだけど気のせいかしら…」

「……気のせいだろ（心読むなっ！！）」

優子は読唇術を覚えたのか。さとりにも変化したのかな…

「それで、彩斗はどうだったの？」

「Fクラスだ」

そうだった瞬間、優子の手には白い悪魔の武器が…

「おい、落ち着け。それより振り分け試験の時の記憶がないんだが何か知ってるか？」

「知らないわよ。前の日にはどっか行っちゃって帰ってきたらお酒臭かったわよ」

悪魔の武器を消してから優子が怒り口調で言う。

「やっぱ飲んだのか…でもなんだ。」

考え込んでいると優子が思い出したように言った。

「あー、確か試験前日にはアンタの能力使ってアニメ見てたような」

「それって確か…と。魔術の禁書目録だったか？」

「確かそうだったわね。それでそのあとインデックスと美琴はどっちがヒロインかで軽くケンカになって…」

なんとなく思い出してきたぞ…

「そのあと、アンタが出て行ったのよ」

「そうそう、それで文姉のそこ行って酒飲んで、愚痴って気がついたら次の日…」

「あー、思い出した。それで幻想郷行って酒飲んだんだった」

「もう…何やってるのよ。せっかく同じクラスかと思ったのに」

「悪い悪い。昼は一緒だからいいだろ？」

「まあそうね、・・・アタシはここだからまたね」

「昼になったら迎えに行くから」

「うん。待ってる」

そう言っつて優子はゴージャスな教室に入っつていった。

ここは本当に学校なのだろうか？と錯覚するくらいに。

気にしてもしょうがないだろうとおもい、自分の教室へと向かった。

「なんだこりゃ・・・」

二年F組と書かれたプレートは真ん中で折れていて、

中は卓袱台、綿なし座布団、腐りかけの畳という状態だった。

「おう、彩斗もFクラスか？」

身長180を優に超える人物、雄二が教壇に立っていた。

「ああ、ちょっと試験前日に優子とケンカしてな、自棄酒飲んで当日二日酔いだった」

「それは御愁傷様」

「で、なんで雄二が教壇に立っているんだ？」

「先生が遅れるようだから立ってみたんだ」

「こりゃまたなんで？」

「俺が最高成績者だからな」

「ということはお前が代表か1年よろしくな」

「ああ、お前の能力は規格外だからな、有効活用させてもらっぜ」

「ふっ・・・それは楽しみだ」

こいつは昔、神童と呼ばれてたからな。かなり面白くなりそうだな。新聞のネタ的にも・・・

「そういや、座席は決められているのか？」

「いや、自由らしい」

「そうか」

といって、あたりを見渡す。席は半分近く埋まっていた。

俺は秀吉を見つけ、その後ろが空いていたのでそこにすることに決めた。

「彩斗、おぬしもFクラスかの？」

俺を見つけた秀吉が話しかけてきた。

「試験当日に二日酔いだったもんだからな。まあこのほうが面白そうだ」

「まったく、おぬしは姉上とケンカするたびに酒に逃げおって…」

「そういうなって。俺は寝るから先生来たら起こしてくれ」

そう言っただけ俺は横になった。

「・・・斗・・・彩斗、おぬしの番じゃぞ」

「ん、何が？」

「自己紹介じゃ」

秀吉に起こされて、自己紹介を始める

「射命丸 彩斗です。新聞部に所属しております」

「質問いいですかー？」

一人の男子がそう言った。っても48人ほど男子だが…

「どうしてここにいますか？」

俺がAクラスだろうと思ったのだらう。もっともな質問である。意

味合的に失礼にあたりかねないが

「振り分け試験の前日に優子とケンカして——」「殺せえええええ」  
「……返り討ちにされたいのか」

そう言つて刀をちらつかせる。

「すみませんでしたあああああ」

変わり身速いな、オイ

「とりあえず、１年間よろしく」

自己紹介を終わらせてそのまま座る。

もう一度寝ようかと思ったけど、クラスの奴の名前くらい覚えておこうかとおもい、起きておくことにした。

「………土屋 康太」

なんだ、康太までこのクラスか。口数少ないな…ホントに

「——です。海外育ちで日本語は話せるけど、読み書きは苦手です。あ、一応英語は出来ます。ドイツ育ちだったので…」

なんだ、女子もいるじゃないか…

「趣味は吉井明久を殴ることです」

………できれば普通的女子が来てほしかった。

自己紹介は淡々と進んでいった。

「——コホン、吉井 明久です。気軽に「ダーリン」と呼んでくださいね」

「「ダアアーリーーン!!」」

野太い声の大合唱。明久はやっぱり馬鹿だ。

「失礼、忘れてくださいこれからよろしくお願いいたします」

明久のバカ発言の後も何の変哲もない自己紹介は続いていく。

そろそろ、寝ていいころかと考えていたら、教室のドアが不意に開き、

息を切らせて、胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「「えっ？」」

教室全体から驚いたような声上がる。

確かに驚くだろうな、普通はAクラスにいるはずなのだから

そんな中、平然としている担任の福原先生が話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん

もお願いします」

「は、はい！あの、姫路 瑞希といいます。よろしくお願いします・  
・・・」

数少ない女子として、異彩を放っているが、それだけじゃない。

「はいっ質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

さっきと同じような質問が繰り返される

姫路は学年次席という成績を残している。（彩花帖調べ）なのになぜFクラスにいるのか

その疑問はもつともだろう。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

「「ああ、なるほど」」とクラスの連中はうなずいた。

途中退席は0点になるという話を聞いたことがあるからそのせいでFクラスなのだろう。

そんな中、クラスのアチこちから言い訳が上がる

「そっといえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

ホントにやっていけるのか？このクラスで

「で、ではっ、一年間よろしく願いします」

そんな中、姫路は逃げるように雄二と明久の間の卓袱台に座る

もういいや・・・俺は寝ることにした。

「——不満はないか？」

「「大ありじゃあっ！！！！」」

そんな叫び声で目を覚ました。

どうやら、雄二の自己紹介であるらしい。

「だろう？この現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いて

いる」

「そつだそつだ！」「いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそも、Aクラスも同じ学費だろ？あまりにも差が大きすぎる！」

そんな反応に満足したのか雄二は不敵に笑って

「これは代表としての提案なんだが——FクラスはAクラスに試召戦争を仕掛けようと思う」

戦争の引き金を引いた・・・

もちろん、戦力差は歴然としていて

「勝てるわけがない」「これ以上設備を落とされるのは嫌だ」

「姫路さんがいればなにもいらない」

という声も上がっている。一部あふおがいるが

Fクラス3～5人でAクラス1人に勝てるかどうかの戦力差がある

普通は不可能だろう。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

我らが軍師、雄二はそう言い切った。

「何もバカなことを」「何の根拠もないだろう」

否定的な意見も教室に響く。

確かにどうやっても普通にやれば勝てるわけがないが勝てないから  
つてやめる奴らでもないだろう

「根拠ならあるさ。このクラスには試召戦争で勝つことのできる要  
素が揃っている」

雄二の言葉に皆がざわめく。

それでも雄二は続ける

「それを今から説明してやる」

不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす。

「おい、康太。畳に顔付けて姫路のスカートを覗いていないで前に  
来い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

必死になって否定の姿勢を取る康太。

そして、頬についた畳の跡を手で隠しながら壇上へ行く

「土屋 康太。こいつがあ有名な、ムッツリーニだ」

ムツツリー二という名は男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を以て挙げられる

「ムツツリー二だと・・・？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか？」

「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ・・・」

こいつはたとえどんな状況でも自分の下心を隠し続ける。異名は伊達じゃない。

ちなみに、文々。新聞のスポンサーでもあったりする。

「姫路のことは説明するまでもないだろう。うちの主戦力だ」

「えっ？私ですかっ？」

「ああ。期待している」

確かに姫路の力は強大であるがそれ1つに頼ることは危険だと思うが…

「木下秀吉だっている」

優子の弟で演劇部のホープである

「おお・・・・・・・・・・！」

「アイツ、確か、木下優子の・・・」

「その木下姉の彼氏である射命丸 彩斗もいる」

雄二が俺の名前を出す。とたんに嫉妬の眼が膨れ上がっていくが、ここでは面倒なので

下げておく。

「射命丸という名だけじゃ知らない奴も多いだろうが、こいつは文月のブンヤでもある。成績も本来ならAクラスだ」

「いつの間にそんな名前が・・・」

そついや、文姉は幻想郷のブンヤだとか…

「何だとっ！！あいつが文月のブンヤだと……」

「あの、学園中のスクープを必ず手に入れるという伝説の……………」  
「」

いつの間に伝説になったんだ、俺は。

「当然、俺も全力を尽くす」

「確かにやってくれそうな奴だ」

「坂本って小学生のころ神童と呼ばれてなかったか？」

「ということは実力はAクラスレベルが3人いるってことだよな！」

クラス内がいけそうだ、やれる。といった雰囲気になる。

「それに、吉井明久だっている」

………シン――

一気に士気が下がる

当然のごとく明久が抗議にでる

「ちょっと、雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそんな必要ないよね！」

「誰だよ、吉井明久って」「聞いたことないぞ」

「ホラ！せっかく上がりかけていた士気も翳りが見えてるし！僕は雄二と違って普通の人間なんだから、普通の扱いを――って、なんで僕を睨むの？士気下がったのは僕せいじゃないでしょう！」

こいつのとりえって……1つあったな

「そうか、なら教えてやる、こいつは「観察処分者」だ」

言っただな、雄二。

「それってバカの代名詞じゃなかったっけ？」

その通りである

「ち、違つよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ、バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

観察処分者、用はとってもバカな成績なうえ、バカなことをして課せられた

バカの代名詞。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路は成績優秀なためその言葉に縁がないようだ

「主に教師の雑用だな。力仕事とかそういう雑用を、特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」

本来、召喚獣は物に触れないが、明久のは触れるように改良されている。

「そうなんですか？それってすごいですよね召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、便利ですよね」

何故か姫路が尊敬の目を明久に向けている

「あはは。そんな大したものじゃないんだよ」

下手に謙遜している明久が妬ましく思ったのでフィードバックをばらす

「そついや、観察処分者って召喚獣のダメージが何割か本体に戻るんだろ？雄二」

「そうだな、明久の召喚獣が叩かれたら、明久自体にも痛みが来ることになる」

雄二は悪役顔で答える

「おいおい、それっておいそれと召喚できない奴が一人いるってことだよな」

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな？」

「とにかくだ。俺たちの力の証明としてまずはDクラスを征服しようと思う」

明久は見事にスルーされた。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

「「おおーっ！！」」

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

「「おおーっ!」」

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない! Aクラスのシステムデスクだ!」

「「うおおーっ」」

こうして、俺たちのAクラスへの挑戦が始まった。

……ふと気がついたがAクラスには優子がいるじゃねえか

## 第9話俺とバカ×沢山と試召戦争（後書き）

休日は時間がありますな。第9話投稿です。

原作編が始まったということもありゲストで彩斗君を読んでみました〜

彩斗「こんにちわ。射命丸 彩斗です」

はい、主人公の彩斗です

まず、質問だけど、なんで一人称が「俺」に変わって口調も変わってるの？

彩斗「たぶんだけど、優子を助けたことで眠っていた本性が浮き出たんだろ

紫姉さんの話だと、霊力で強気な部分も封じられていたかもしれないらしい」

へえそうなんだ。

じゃあ次、成績はどんな感じ？

彩斗「全力を出すと10000超えるだろうな。紫姉さんがまた余計なことをしてくれてアンサーストーリーカー・・・だっけ？まあ忘れたけどそんな感じのやつを付けた からそれに時を操つたらいくらでも・・・まあ、制限として両方を同時に使う

場合、時間はとめれないみたいだけど。そこまでとる必要ないから腕輪使える 程度が普段の点数だな」

ほんとに規格外ですね。では最後に一言

彩斗「これからも「バカと鴉天狗と召喚獣」をよろしくお願いします」

はい、丁寧語と普段の言動が混じっている彩斗君でした。

という感じでたまにだれか呼んだりしますので「こいつ出してくれ！！」ってのがあつたらお願いします^^

ではまた次話に^  
^

## 第10話俺と姫路とDクラス戦（前書き）

11/24修正しました…でも微妙…

## 第10話俺と姫路とDクラス戦

Side Ayato

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

Dクラス戦が決まった俺達Fクラス。その使者に雄二が明久を指名した。

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目にあうよね？」

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加えるわけない。騙されたと思って行ってみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

見事雄二に言いくるめられている明久……哀れだな

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

現在進行で騙しているがな

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

クラスメイトの歓声と拍手の中、明久はDクラスへ向かった。

「……………姫路、これもつとけ」

「えっ、は、はい。わかりました」

どうなるか簡単に予想がついたのでとりあえず、手を打っておくことにした

明久は姫路のこと好きだし、姫路も明久に好意を抱いてるからいい機会だろう。

文々。新聞の情報網をなめちゃいけない

「騙されたあっ！」

叫び声とともに、明久が教室に転がり込んだ

「やはりそうきたか」

「大方予定道理だな」

雄二と俺は平然とそう言い切った。

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「それに、気付いてないのはお前だけだろ・・・」

「雄二は少しは悪びれるよ！彩斗も気づいていたんなら言ってよ！」

いや、普通わかるだろ。

姫路が明久のもとに行こうとしたので小声で話しかける

「（姫路、お前が明久の傷を手当てしたら振り向いて貰え易くなるぞ）」

「（ふえ！？射命丸君！？だ、だから応急箱を渡したんですね・・・）」

「（そういうことだ、頑張れよ）」

といって姫路を送り出す。この2人、両思い（仮）なのになんてくつつかないかな...

「吉井君大丈夫ですか？今、手当てしますね」

「あ、うん。大丈夫。その・・・手当てありがとうね」

ほー！いい感じじゃん。俺は後ろの男子の残りの嫉妬心下げるので大変だが...

「吉井、本当に大丈夫？」

ここで、ダークホース・・・もとい、ミス関節技の島田が行ってしまった。

「平気だよ。姫路さんも手当てしてくれているし。心配してくれてありがとう」

「そう、よかった・・・。ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・」

「

「ああっ、もうだめ！死にそう！」

あわてて、腕を押えて転げまわる明久。それはオーバーだろう

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

他の場所で話し合いをするつもりらしいので雄二は外へ出て行った。

おそらく盗聴でも恐れているんだろう。

・・・・・・・俺は優子との約束があったな。

「雄二、さすがに優子は連れて行けないだろうから、後で連絡してくれ」

「ん、そうか。わかった」

そう言っただけ俺はAクラスへと向かう。

「（姫路、明久に何かしてあげたいときはいつでも相談してくれ、

後で連絡先教えるから」

「（はいっ！わかりました）」

去り際に姫路にこう言っておいた。

そして、Aクラスについた。

扉をあけると中にいたほぼ全員の視線を受けた。

「・・・・・・・・彩斗、何か用？」

いきなり翔子が話しかけてきた。

「翔子か、優子どこかわかる？」

「・・・・・・・・優子なら、あっち」

翔子が指さすほうには優子が机に伏せていた。

「ありがとな、翔子。後でほしいもんやるよ。雄二の写真とか（ボソッ）」

「・・・・・・・・ありがとう。やっぱり彩斗はいい人」

そんなやり取りをして、優子のもとへ向かう。

うつ伏せになっていたので大体わかっていたが、案の定寝ていた。

パシャパシャパシャ寝顔写真3枚ゲットだぜ♪

さて……ここで普通に起こすのも面白くないな。

選択肢をいくつかあげてみる。

1 起きるまでほっぺたぶにぶにする

2 後ろから抱きついてみる

3 キスしちゃえ♪

さあ、どうしよう……

3は却下だな、周りに大勢いるし、1は楽しそうだけどありきたりっぽい。

じゃ2だな、俺は決行を決めた。

優子の後ろに回り込み、抱きつく。

「ひゃあっ!!」

「おはよー優子。飯食おうぜ」

「もう、脅かさないでよね彩斗」

優子は顔真っ赤にしていた。パシャパシャ、うーんやっぱり可愛い。

「ちょっと、撮らないでよ／＼」

「気にしない、気にしない。俺以外見せないし」

「もう・・・／＼／」

優子＋照れる「いつもより１００倍可愛い。という式が成り立った。

優子と昼を食べているとショートカットのボーイッシュな女子生徒が現れた。

「優子、その人ダレ？もしかして彼氏？」

「ええ、そうよ／＼」

顔を赤らめて言う優子。可愛い！もう一枚パシャ

「へえーそうなんだ。ボクは工藤 愛子。得意教科は保健体育だよ。実技のほうね」

「俺は射命丸 彩斗。新聞部だ」

「新聞部なんだ。あの色恋沙汰のスクープの多い・・・」

む、否定・・・・・・できん・・・・・・

「射命丸君「長いだろう、彩斗でいいよ」・・・なら、ボクも愛子でいいよ。彩斗君僕と一緒に保健体育の勉強しない？もちろん、実技、で」

愛子がそう言った瞬間、優子はムツツとして何かを期待しているようだった。

「間に合ってるから大丈夫」

「あ、優子がいるんだったね。ゴメンゴメン」

そうわざとらしく言う愛子。ほっとした表情の優子。

確信した、こいつは康太のオープンバーションではないか。少なくとも、同類だ。

『迷え！その手を引く者などいない。神が下すその答えは不幸だった。』

俺の携帯が鳴った。雄二からだ

【昼休み終了後からDクラス戦が始まる。お前はまず回復試験を受けてくれ】

たしか俺の点数は・・・覚えてない。これは受けておいたほうがいいな

【了解】——送信つと

「誰からだったの？」

「雄二からだった」

「坂本ってFクラスの代表よね。何をたくらんでるの？」

鋭い・・・さすがだな

「教えない♪さとりにも変化したら？」

「こんなところで、できるわけないでしょうが」

そっぴいえば優子ってさとりにあつたことあつたっけ？

俺が酔つてたか、紫姉さんが勝手に会わしたか・・・まあいいか、どっちにしろ後で会うことになるだろうし

キンコーンカーンコーン

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴つた。

「じゃあ、教室に戻るからまた帰りにな」

「うん」

Aクラスを後にしてFクラスに戻る

Dクラス戦開始、俺は回復試験を受けている。

とりあえず、2 3教科終わったから戦争に参加しようかと思つたので外に出たら雄二がいた。

「雄二、俺も出るぞ」

「いや、今回お前は温存させてもらっ」

「そうか、なら回復試験をずっと受けておくけどいいか？」

「ああ、構わない」

そうして、試験を受け続けていた。

ピンポンパンポーン《連絡いたします》

ん、須川の声じゃないか。何をするんだ…

《船越先生、船越先生》

呼び出し相手は船越教諭。婚期のがして単位を盾に生徒に交際を迫るようになったらしい

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

………は？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

雄二、ここまでやるとはすげえな。明日の1面はこれだな

「須川あああああああつ！！」

明久の叫び声が聞こえた。……強く生きろよ、明久

『うおおおおおお』

何だ、もしかして戦争終わったのか？

雄二に連絡とってみる。

P r r r P r r r r

【おう、彩斗か。終わったぞ】

やはり、終わったらしい

「そうか。設備の交換はやるのか？」

【いや、しない】

そうになると、目的はあくまでAクラスってことが

「Dクラスの設備で満足するやつが出ないようにするためか」

【まあそんなとこだ】

「なら、俺は帰っていいな」

【ああ、明日はお前を出すからなちゃんと準備しておけよ】

「了解っと、じゃあな」

プツッ

帰ろうとしたが、まだ荷物を教室に置きっぱなしだったので取りに行く。

扉をあけると姫路がいた。手には封筒があるのが見えた

「姫路、何やってんだ？」

「はう！！？しゃ、射命丸君！！？」

「長いだろうから彩斗でいいよ。で、それは手紙・・・じゃないラブレターか」

「っ！！ち、違います」

「思いつきり「好きです」の言葉が見えたんだが・・・」

「はわわ」

慌てて紙を隠す姫路。となると相手は明久か。

「姫路、明久は鈍感だから自分からガンガンいかないと振り向いてくれないぞ」

「え、はい・・・」

「じゃあな、頑張れよ。あ、これメアドとケー番ね」

メアドとケー番の書かれた紙を姫路に渡して教室を去ろうとする

「あ、あの！」

その時、姫路に止められた。

「なんでここまでしてくれるのですかっ!？」

そう、他人のためにここまでするのは普通じゃない。でも――

「それは、付き合う前の俺と優子に似てるんだよ」

そう、あのときの俺たちに似ている。2人一緒にいるにぎくしゃくして、すれ違う感じ。すごく親近感が出てしまう

「え？Aクラスの木下さんって彩斗君の恋人なんですか？」

「ああ、あいつともいろいろあってなこの町1回離れてもお互い想い合っていたらしい」

「そう・・・なんですか・・・」

姫路があこがれの眼差しを向けてくる。

「だから、勇気振りしぼって想い伝えてみな。そのほうがスッキリするぞ。これは先輩からのアドバイスだ」

「はいっ!!--」

「明久を信じてやれ、どんな時でもな」

そうして教室を去る。

校舎を出る途中に明久が教室に戻るのが見えた。・・・面白くなり  
そうだ。

門のところで優子が待っていた。

「よう、待ってたのか」

「遅かったじゃない。何してたのよ」

「ちょっとな」

バカ正直に答えられないからはぐらかす

「そついや、FクラスってDクラスに試召戦争して勝ったんだっけ」

「そうだな」

「何がしたいのよ」

「教えたら面白くないだろ」

「教えなさいよぉ」

うつ、いきなり上目使い& a m p・涙目かよ・・・

「駄目だ。いずれわかる」

「ケチー」

明日は俺も出るのか・・・できれば勝ちたくなかったんだがな。

そんなことを考えつつ帰路についた。

『迷え！その手を引く者などいない。神が下すその答えは不幸だった』

家についたとたんケータイが鳴った。

【姫路 瑞希です。あの明日、明久君にお弁当を作ってあげるのですが・・・】

相手は姫路だった。弁当作るから一応レシピを見てほしいのこと。

.....なぜ、硫酸が・・・？

これ、王水できるんじゃない・・・

身の危険を感じたため初めはネットでレシピに書かれている通りにすることと送っておいた。

## 第10話俺と姫路とDクラス戦（後書き）

明久×姫路のフラグたってしまった・・・第10話投稿です  
ちよつとはしよりすぎた感があるけども・・・作者は限界値が驚く  
ほど低いです

Dクラス戦が終わりましたが、次はBクラス戦・・・

根元がフルボッコされそうwwwwww

・・・出せるかスターライトブレイカー

ではまた次回^-^

第11話俺と優子と死の料理？（前書き）

11/25誤字修正いたしました

## 第11話俺と優子と死の料理？

昨日のーコマ・・・

「勇気を出して・・・想いを伝える・・・よし、やってみましょうっ!!」

瑞希は決心するようにそうつぶやいた。

「たっだいまー」

そこに、明久が我が家のように声をかけて教室に入る。

「よ、吉井君!!?」

「あれ？姫路さん」

明久は教室に誰もいないと思っていたようだ。

「どどどどうしたんですか？」

慌ててしまう瑞希。

疑問に思う明久は瑞希の前の卓袱台に可愛い便箋と封筒を見つめる。

「あ、あのっ、これはっ」

必死に何かを言おうとする瑞希

「これはですね、そのっ」

「うんうん。わかってる。大丈夫だよ」

「えっ―それって・・・ふあっ」

卓袱台につまずいてしまい、隠そうとした手紙が明久の手のもとに渡ってしまった。

《あなたのことが好きです》

「……………」

「変わった不幸の手紙だね」

わけわからんことを言い出す明久。

「あ、あの、違うんですっ」

すぐに否定する瑞希

「吉井君。これは不幸の手紙じゃないですから」

「嘘だあああああああ！！！！！！」

某レナさんのように叫び声を出して暴れようとする明久。

それを瑞希がきゅっと手を握って止める

「落ち着いてください。そんなに暴れると怪我しちゃいますよ」

ようやく現実を受け入れたのか、静まる明久。

「その手紙、相手はウチのクラスの――」

相手が気になった明久は瑞希に聞いた。

「・・・はい。その相手は私の目の前にいる人です」

「・・・はい？」

状況の読み込めない明久に瑞希が続ける。

「吉井君！！私と付き合ってくださいっ」

「え・・・」

「吉井君のことがずっと好きなんですっ！！小学生のころからずっと・・・ずっと・・・」

困惑する明久が口を開いた。

「そんなに前から・・・でも、本当に僕なんかでいいの？」

「吉井君がいいんですっ。吉井君じゃないとダメなんですっ！！」

瑞希の真剣さを感じたのか考え込む明久。

「わかった。……………こちらこそよろしくね姫路さん」

「はい、でも、これからは瑞希って呼んでください。私も明久君って呼びますから」

「う、うん。み、瑞希」

照れながら言う明久に満足したような笑みを浮かべる瑞希。

「明久君。最初をお願い聞いて貰ってもいいですか？」

「な、何？何でもいいよっ」

「じゃあ、目を閉じてください」

「？わかったよ」

目を閉じた明久にそっと近づく瑞希。

そして……互いの距離が縮まっていき……

チュッ

ゼロになった。

「えっ……瑞希……？」

「これからもたーくさんしましょうね」

笑顔でそういう瑞希に微笑む明久。

——そんなやり取りがあった昨日……そして今日が始まる。

S i d e   A y a t o

昨日、姫路と明久に進展があったかどうかを楽しみにして学校へ向かう。

今日はテスト漬けだったから、俺は残り少しの教科やれば後は暇である。

……鉄人に頼んで模擬戦でもするかな

「おはよー」

教室の戸をあける

「おう、彩斗。おはよう」

「雄二か、おはよ」

雄二の手には英語の教科書・・・最後のあがきか

「Dクラスの設備については何も言われなかったのか？」

「ああ。きちんと説明したから問題ない」

どう納得させたかは不思議だが、さすがだな。

「それで、次はどこだ？」

「Bクラスだ」

「Bクラスか・・・確か代表は―――最悪だなこれは・・・」

俺は新聞記事ネタ帳「彩花帖」を見てつぶやく。

「ん、メモ帳出してどうしたんだ？」

「実は・・・盗聴が怖いな。まだ時間あるし場所変えるぞ」

「ああ」

俺と雄二は廊下に出る。俺はスキマを出して雄二を手招きする

「ここなら絶対聞かれることはないだろう」

「そうだな」

勝ち誇ったような笑みを浮かべる雄二

「それで、Bクラスの代表は誰だ？」

「・・・あの根本だ」

「まじか・・・これはちょっときつくなるな」

根本恭二、噂ではカンニングの常連だとか、球技大会で相手チーム  
に一服盛ったとか、喧嘩に刃物は当然装備とか  
デフォルト

「サンキュー彩斗。知らなかったらやばいことになりそうだった」

「ああ、Dクラスに勝ってしまったからな協力しないとな」

「でもいいのか？Aクラスには木下姉がいるんだろ？」

痛いところについてくるな・・・

「そうなんだが、これは俺の意識を変えることで何とかなった」

「そうか、なら今回は先陣を頼むからな。期待しているぞ」

「まかせろ」

そうして、俺たちは教室に戻った。

教室に戻り俺は姫路に話しかける。

「よう、姫路どうだった？」

「あ、彩斗君。昨日はありがとうございました。おかげで勇気出せました」

「そうか、なら・・・ちょーと取材させてもらってもいいですかあ？」

記者モードに入る俺。こんなおいしい話逃すはずがない

「え、ちょっと恥ずかしいです・・・」

そんなことを言いながらも素直な性格の姫路は答えてくれた。

これで明日の一面はこれだな・・・文々。新聞今学期第1号の大スクープだ

質問が終わった時、明久が全力で廊下に飛び出した。

姫路は首をかしげている。俺は「これからが大変だぞ」と姫路にいい、自分の席に戻る

「あーしんど」

とりあえず、4教科が終わった。

俺は対Bクラスだとわかったので殲滅力を上げるため全部受けなおすことにした。

「うむ、疲れたのう」

秀吉が答えた。なんでポニーテールなのは気にしない。

・・・こいつが似合うってことは優子も・・・

そんなことを考えつついつものメンバーが集まる。

「よし、昼飯を食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

幽々さんメニユーか？これは・・・

「ん？吉井たちは食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別にかまわないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらうわね」

「・・・・・・・・・・（コクコク）」

康太がうなずいているのは下心からだろう。優子に向けたら即処刑沙汰だが・・・

だが、ベストアングルの写真はよく取引する。

なんといつても昼休みだ。優子のところこう

「じゃ、僕もソルトウォーターあたりを――」

塩水かよ・・・もつとまともな食事しないと姫路が悲しむぞ。

「あ、あの。皆さん・・・」

立ち上がり、それぞれが移動しようとしたところで声をかけられた。

「うん？あ、瑞希も一緒に学食行く？」

「へえー。アンタ達いつの間に関係に・・・」

島田が食いついたので嫉妬心下げて納める。なんか使用数多いような気がするな・・・

「あ、いえ。えっと・・・お昼なんですけど、その昨日の約束で・・・」

姫路はもじもじしながら俺たちに言う。・・・2人きりだったら大胆なのにな

「おお、もしかや弁当かの？」

「はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞ」

と、後ろに隠していたバッグを出す。そういや、昨日のメールはこういうことだったのか

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？よ、よかったあゝ」

嬉しそうにほほ笑む姫路。俺はサイレンサー付きノンフラッシュカメラで激写する。

後で明久限定で売ろう

しかし、それを快く思っていないのかムスツとした表情の島田。

こいつはかなり面倒だな・・・

「それでは、せつかくのごちそうじゃし、こんな教室ではなくて屋

上に行くかのう」

「そうだな、優子も連れて行っていいか？」

「いいよ」

「なら、俺は迎えに行くから先行っておいてくれ」

「なら、俺は飲み物買ってくる。昨日、頑張ってくれた礼も兼ねてな」

と、雄二が珍しく提案する

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

島田が珍しく気遣いを見せた

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

そうして各自移動を始めた。

「翔子、優子いるか？」

「……あっち」

「そうか、ありがとな」

「……いつものお礼」

いつものってことはムツツリ商会か。ちなみに俺は諜報班だったりする。

俺は優子のもとに向かう

「彩斗、もう来たのね」

優子の机の上には勉強道具があった。

「昨日より、遅いぞ。それにしても熱心だな」

家では下着＋ジャージ生活だからな、優等生になりきってるにすぎない

「アンタは何もしくなくてもとれるでしょうけど私には無理なの」

「はは、そうかい。ああ、今日は屋上行くぞ。姫路が弁当作ってきたから集りに行く」

「そうなの、じゃあ早く行きましょ」

そう行つて優子がつくってきた弁当ももつて教室を出る

教室を出た瞬間俺は衝動に駆られて、優子に後ろから抱きつく。

「ひゃあ、び、びっくりするじゃない／＼／／／」

「だって、優子分が足りないもの」

優子分ないと俺は死ねる

「もう、しょうがないわね／＼／」

照れつつもそう言う優子。そして俺たちはそのまま屋上に向かった

屋上につくと康太が倒れていて、秀吉がガクガクふるえていて、姫路が明久にアーンをしていた。

「……姫路、何があった？」

「秀吉もそんなに怯えてどうしたのよ」

「あ、彩斗君。私が明久君にお弁当食べさせてあげようとしたらいきなり土屋君が襲ってきたので変わりに失敗したお料理あげました」

姫路の失敗料理「バイオ兵器

「……姫路、嬉しいのはわかるが、やりすぎだ」

「は、はい。すみません……」

シユンとなる姫路。そこに雄二が入ってきた。

「おう、待たせたな！ヘーこりや旨そうじゃないか。どれどれ？」

そう言って、自称“失敗”料理のほうを口に放り込む

「あ、雄二」

パク

ボタン——ガシャガシャン、ガタガタガタ

ジューズの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの！？」

康太と同じように震える雄二を見る。

雄二は倒れたままこちらをじっと見て目で訴えていた。

『毒を盛ったな』と。

『毒じゃない、姫路の失敗だ』『そうだよ、姫路さんの失敗だから・  
・・』

アイコンタクトで会話を終わらせる。

「あ、足が・・・攣ってな……」

姫路を傷つけないように嘘をつく。・・・哀れだな

（おい、明久。もしかしたら姫路はお前以外はあの料理を食べさせるかもしれないぞ）

（・・・・・・ジョークに聞こえないよ。彩斗）

小声で話す俺達

「あ、ごめんなさい。それは失敗なんです」

「失敗って見た目はきれいだけど？」

島田が言う。それはもつともなんだがな・・・

「姫路さん、何が入ってるの？」

優子が問うと姫路は答える

「えっと・・・酸味がほしかったので、硫酸を・・・」

「「「……………」」」

「姫路、昨日のメールは無視か？」

「いえ、あのメールは少し下仕込してから見たんです」

雄二、悪かった。心から謝ろう。あと、康太。お前は自業自得だ。

姫路は――ヤンデレになったのか・・・？

「では、明久君。あーん」

「あ、あーん」

パクッ

はたから見たら微笑ましく見えるが後ろにやばいのがいる。俺が抑

えられないくらいさつき出してるヤツが・・・

「よ〜し〜い〜。瑞希とすぐく仲が良くなったわね。ちょーつと話があるからこっち来ようか」

「駄目です。明久君は私と一緒にいるんです」

「放しなさい瑞希！こいつには一回お仕置きしないと・・・」

「えい！！（失敗料理投入）」

「え、モグモグ・・・あ、普通においし——」  
「ゴぼあっ！」

島田昏倒……

「優子、ああはならないでくれ」

「ええ、でも絶対とは言いきれないわよ」

「何でもするからあれだけは・・・」

島田は白目向いて倒れていた。姫路……恐るべし……今まで抑えてた分が全部出てるな

復活した皆で普通の食事を終わらし、試召戦争の打ちあわせがあるので優子にはかえってもらった。

「そう言えば坂本、次の目標だけど」

「ん、試召戦争のか？」

「うん」

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

確か、Dクラスとの交渉でBクラスのエアコン室外機に何かするみたいだな。

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

俺たちの目標はAクラスだ。……まあ正面からぶつかっても勝てないだろうな。

「正直言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

やはりな・・・

全体的に点数に差があるうえに翔子や優子、学年次席の久保利光とかいるからな

奇襲でも姫路か俺が対応できるだろう

しかし、それでもきつい戦いではある。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスってこと？」

それは俺にとっては願ったり叶ったりだが、ありえないだろう。

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっさと方法を言え。あまり引き延ばすな」

方法があるならさっさと行ってほしいものだ

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「一騎打ちか………Bクラスをどう使うんだ？」

Bクラスを使うのはわかるがどう使うかはいろいろパターンがあるからな……

「そうだ。試召戦争で下位クラスが負けた場合はどうなるか知っているな」

「え？も、もちろん！」

「……明久、わかってないな」

「（明久君。設備のランクを一つ落とされるのですよ）」

姫路が助け船を出す。

「設備のランクを落とされるんだよ」

「……まあいい。つまりBクラスならCクラスの設備になるってわけだ」

「そうだね。常識だね」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「ムツツリーニ、ペンチ「坂本君……お弁当の余りが……」……  
……もってこなくていいぞ」

「瑞希……ありがとう」

姫路マジ怖い。

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

代わりに姫路が答える。

「つまり、俺たちに負けたらFクラスの設備と入れ替えられるってわけだ」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉する」

「交渉……じゃなくて、脅迫だろう」

「そっいうな。Bクラスをやったら設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたならFクラス

だが、Aクラスに負けるだけならCクラスの設備で済むからな。それにBクラスの代表があいつだからな。まずうまくいくだろう」

「それをネタにしてAクラスと一騎打ちを持ち込むのか」

「そうだな」

学年トップのクラスといえど、2番手のクラスと戦った後すぐならばきついだろう。

Fクラスも連戦だが、嫉妬心たきつけたらすぐに動くからな。

「連戦になって体力きついのはなんとかなるが、一騎打ちは大丈夫なのか？姫路の存在はばれているぞ」

「その辺は考えがある。心配するな」

雄二は翔子と幼馴染だから何かあるんだろうな。（彩花帖調べ）

「とにかく。次はBクラス戦だ。細かいところはあとで教える」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

明久が答える。

「で、明久。今日のテストが終わったらBクラスに行って宣戦布告して来い」

あ、姫路が動こうとしている

「（姫路、ここで明久に行かせたら後で看病という名目で2人きりだぞ）」

「（そ、そうですね／＼／＼）」

あぶねえ………死人出るところだった

「やれやれ、それならじゃんけんで決めないか？」

姫路と話している間にジャンケンをするらしい。

「OK。乗った」

「負けたほうが行く、でいいな？」

コクリと明久がうなづく

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありで行こう」

「わかった。それなら僕はグーを出すよ」

「そうか、それならおれは————お前がグーを出さなかったらぶち殺す」

何でもありだな、この心理戦は……

「行くぞ、ジャンケン」

「わあああっ！」

パー（雄二）　　グー（明久）

「決まりだ、行って来い」

「絶対嫌だ！」

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配してるのか？」

「それもある！」

「それなら大丈夫だ。Bクラスは美少年好きが多いらしいからな」

「そっか、それなら大丈夫だね」

「だけとお前不細工だからな……」

雄二がそう言ったので姫路が動くかと思ったが、動かなかった。

「（姫路、俺言うのも変だが、あんなこと言われて大丈夫なのか？）  
」

「（明久君は私の中では一番なのでそれでいいんです）」

このこ重症だな……

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」「実質5度じゃな」「まあ気にするな、全員に好かれても面白くないだろう」

「二人なんて嫌いだ！彩斗は微妙すぎて反応できないよ！」

「とにかく、頼んだぞ」

雄二のその言葉で昼はお開きになった

午後、テストを受け終わって、明久がぼろぼろで帰ってきた。

「予想通りだ」「そもそも対策しとけよな」

「くきいー！殺す！殺し切るー！」

明久がこっちに向かってきたので雄二が迎え撃とうとしたが、俺はそれを抑えた。

「明久君っ酷い怪我じゃないですか！？手当するのでこっち来てください」

「え、うん。ありがとね瑞希」

「このくらいやって当然です」

仲良く2人の世界に入っていく・・・

「（彩斗、アレはどういうことだ？）」「

雄二が小声で話しかけてきた。

「（新聞のネタなのに言うわけないでしょう）」

「（そうか——）」

「先帰ってるからな。明日もテストだから姫路に教えてもらっとけよ」

「そうだね。瑞希お願いできる？」

「はいっ」

「……俺も部活行くか。」

「そうして、俺は教室を後にした。」

## 第11話俺と優子と死の料理？（後書き）

姫路が壊れた・・・第11話です

ほんと、なんでこうなった……

原作からすでにずれてるし……

木下文様、紅鎖様、感想ありがとうございます^^

今更感もありますgww

作者もテスト発表に入っちゃったので更新できる日とできな日が出  
てきます。

……おもにその日のやる気で

ではまた次回^^

## 第12話 FクラスとBクラスの試召戦争

文々。新聞

熱愛！！？夕方の教室での一コマ！！

先日、私が所属するFクラスがDクラスと試召戦争をし見事勝利した。

そうして、私が教室に戻ると何やら教室に2人の人影が・・・・・・・・不思議に思った私はしばらく様子を見ています

同じFクラスのYさんとHさんが何やら会話をしている模様・・・

その日は2人仲良く帰っていったので翌日Hさんに話を聞いてみることに

「A君と私ですか？その・・・恥ずかしいですけど・・・・お付き合ひさせてもらってますノノ」

A君は小学生のころから好きでしたので長年の思いが叶ってよかったです。え、キ・・・スですか？ええ、やつちやいましたノノそ、そろそろ先生が来ますよっ！！ノノ」

照れながらも取材に応じてくれたHさんには感謝いたします

これからも文々。新聞はお2人のことを応援していきたいと思えます。

S i d e   A y a t o

「さて、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立つ雄二が皆に言う

今日も午前中がテストであった。一応全部受けておいた。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入するが、殺る気は十分か？」

『おおーっ！』

なんでここまでモチベーション下がないかが疑問だな…

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。そのため、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線は姫路瑞樹と射命丸彩斗に指揮を取ってもらう。野郎ども、きっちり死んでこい！」

「が、頑張ります」

「ついてこれない奴は容赦なく置いていくからな」

『うおおーっ！』

姫路と一緒にだけあって土気は上がりっぱなしだ

渡り廊下は本気で取りに行くらしく、50人中35人投入するらしい。

・・・Bクラス程度ならこれで十分だろう。

キンコンカンコン

昼休み終了のベルが響き、Bクラス戦が始まる

「よし、行って来い！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

こちらは召喚範囲の広い数学の長谷川教諭と英語Wの山田教諭、物理の木村教諭を連れている

Bクラスは文系が多いから、理系で勝負に行く

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

Bクラスの連中はゆっくりと歩いてくる。人数は10人前後、様子見ってところだろう

『Bクラス、野中長男総合1943 VS Fクラス、近藤吉宗  
764』

『Bクラス、金田一裕子 数学 159 VS Fクラス、武藤啓太 69』

圧倒的な戦力差で第1陣が消えていく。

姫路が少し遅れているようなので前の3人だけ潰しておく。

「Fクラス、射命丸彩斗がBクラスの前の3人に物理勝負を申し込む」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚!!」

俺をデフォルメした召喚獣が現れる

袴に6振りの刀……眼帯はない

『Fクラス、射命丸彩斗 物理 420 VS Bクラス×3  
物理平均 150』

せつかくだからJET-Xでも使ってみる。

「前3人が戦死したぞ!!」

「なんだ、アイツ!!?なんでFクラスにいるんだ!!?」

3人を一瞬で消したら、姫路が戦っていた。

その召喚獣の腕には腕輪がある……

キユボつとその腕輪から光が出た

「きゃああーっ」

2人をしとめる姫路。さすがだな

「ご、ごめんなさい。これも勝負ですのでっ」

「岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ！そんな、こんなに早く5人も・・・」

「姫路瑞樹と射命丸とかいうやつ危険な相手だ！」

Bクラス側からそんな言葉が聞こえてくる

「野郎ども、今こそ攻め込め！」

「み、皆さん頑張ってくださいー」

姫路の指揮官らしくない言葉が出るが俺よりも効果は出るだろう

「やったるでー」

「姫路さん、射命丸サイコー」

株上昇中

「姫路腕輪使ったなら下がっつけ」

「あ、はい」

腕輪は点数を消耗してしまうからな、うかつには使えない

「中堅部隊と入れ替わりながら、後退しろ！戦死だけはするな！」

相手のそんな指示が聞こえてくる。ひとまずは作戦成功だ

そろそろ、引きごろだな…ヤツが仕掛けてくる。

「明久、教室に戻るぞ」

「ん、なんで？」

「Bクラス代表は根本だ。そろそろ仕掛けてくるころだ」

「根本ってあの、根本恭二？」

「ああ、雄二には伝えてあるが一応用心したほうがいい」

急いで教室へと向かった。

「……つわこりや酷い」

「……やられたな」

「まさかこつくるとはのう」

途中で秀吉と合流し、教室に引き返した俺たちが見たのは穴だらけ

の卓袱台、折れたシャーペンや消しゴムだった

「酷いね、これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響が出る嫌がらせじゃな」

「もっと大きく出ると思ったがこんな小学生程度のいたずらとはな・  
・・」

根本って器小さいな…

「あまり気にするな。想定していたのと比べてまだ可愛いものだ」

「雄二がそう言うならいいけど」

「そつえば、雄二。お前はどこに行っていたんだ？ずっと教室にいたらこうなっていないだろう」

「協定を結びたいと申し出があつてな。調印のために教室をあけていた」

「どんな協定だ？」

場合によつては裏がありえるからな

「ああ、4時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間試召戦争に関する行為を一切禁止する。つてな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「体力勝負で姫路がしんどいのはわかるが、俺はまだ置いておくのか？」

「そのほうがいいだろう。1日空けたほうが2人で殲滅できるからな」

「一気にせめて士気下げるのが目的か？」

「あいつらを教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだね。この調子だと難しそうだね」

「その時はクラス全体よりも姫路と彩斗の個人の戦闘力のほうが重要になる」

「そうか、幸い俺はまだ腕輪を使ってないからな、問題ないだろう」  
こっちには相手が俺の腕輪の能力がわからないという情報アドヴァンテージがある

「だから受けたのか。姫路を表に立たせるために」

「そういうことだ。この協定は俺たちにとってもかなり都合がいい」  
姫路がいるのは知れ渡っているが、俺の存在はあまり知られていない。

姫路の陰に隠れて目立たなければ致命打の出る不意打ちができるだろっ

「だが雄二、気を抜くなよ。まだあいつは仕掛けてくる」

「ああ、わかってる」

「明久。ワシらは前線に戻るぞい。向こうでも何かあるかもしれん」

「ん。雄二、あとよろしく」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしよう」

「俺はここで引っ込むからあとは任せたぞ」

「うん」

明久と秀吉は前線へと走っていった。

「雄二、これらだが、最近見た漫画の能力で直せるぞ」

壊れたシャーペンとかをさしながら言う。

「そうか、ならやってくれるか？」

「ああ」

（久々の）妖力全開――

ロストマジック  
失われた魔法『時のアーケ』……

時を戻して壊れたものを直す。

「ほう……さすがだな。お前もフェアリー。イル読んだのか」

「俺はいろいろな作品読むからな」

それでも使える能力があまり多くない……

「この弱点は完全な妖怪にならないと使えないとこだな」

「そんなものもあるのか……ともかく、助かったぜ」

しばらくすると、4時になり皆が教室に帰ってきた。……明久は瀕死だが。

「……何があつたんだ？」

「あ、彩斗君。明久君がまるで誰かに殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我して倒れていたんですよ」

島田の仕業だな。

「姫路、膝枕でもしてやれば明久喜ぶぞ」

「ふえ！！？そ、そうですか？」

そう言つて明久を膝枕する姫路。いやゝ素直だね。

うん。島田がいないと何故か平和な気分になる。……………何故だろうなあー

「……………ここはどこ？」

お、明久が目を覚ましたようだ

「あ、気がつきましたか？」

お、明久が赤くなった。パシャ、……………姫路に売ろう

「……………瑞希。もう少しこのままでいい？」

「は、はい。」

「明久の怪我とは違って平和な光景じゃの」

「そうだな」

実に微笑ましい。昔の自分たちを見ているようでもあるが

「それで試召戦争はどうなったの？」

「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？」

「一応計画通りに教室前に攻め込めたが、こちらの被害はかなり大きい」

確かに、廊下戦は圧勝したが、全力を注いだ結果だからな

「ハプニングもあつたが、今のところは順調ってどこか」

「まあな」

だが、相手は根本だからな、まだわからない

「……………（トントン）」

「康太か。何かあつたか？」

今日、康太は情報係に回ってもらっていた。相手の動きを把握するためにな

「ん？Cクラスの様子が怪しいだど？」

「……………（コクリ）」

Cクラスが試召戦争の準備を進めているらしい。

相手はもちろん……………Fクラスだろうな

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

いや、確かCクラスの代表は……………（彩花帖調べ中……………）

「んー、そつだなー」

雄二は時計を見る。4時半。まだ遅くはない

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込むぞと言って脅してやれば俺たちに攻め込むきもなくなるぞ」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもないしね」

……あつた!!

「ちよつとまで、Cクラスの代表は根本の彼女だ」

ちゃんと載っていた……さすがウチの新聞部。色恋沙汰には必死で情報を集めようとする。

「そうか……それなら根本はCクラスにいるだろうがここはあえてCクラスに行くか」

「そうか。わかった」

「ん？よくわからないけどわかったよ」

明久は理解してないようだが、無視する

「秀吉は念のため残ってくれ」

「ん？なんじゃ？ワシは行かなくてよいのか？」

「お前の顔を見られると万が一の場合の作戦に支障が出るんでな」

「よくわからんが、雄二がそういうのであれば従おう」

・・・・・・絶対優子絡みだろ

「じゃ、行こうか人数少なくて不安だけど」

雄二、姫路、明久、康太、俺というメンバーでCクラスに向かう

「吉井。あんたの返り血こびりついて洗うの大変だったんだけど。どうしてくれるのよ」

「それは吉井が悪いのか？」

廊下に出るとハンカチで手を拭っている島田とかばんを担いでいる須川がいた

「ちょうどよかった。2人ともCクラスまで付き合つてよ」

どうせ、襲われた時のことを考えているんだろうな、明久は

「んー、別にいいけど?」「ああ。俺も大丈夫だ」

まあ人数が多いほうがいいだろう...

「急がんとCクラスの代表が帰ってしまうぞい」

「そうだな」

こうして7人でCクラスに向かった

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は?」

Cクラスにはまだかなりの人数が残っていた。

「私だけど、何か用かしら？」

前に出てきたのは小山。バレー部のホープで根本の彼女……

「Fクラス代表として、ある情報筋から聞いたんだが……そこに隠れている根本に話が聞きたい。『なんで教師と一緒にここにいるんだ？』とな」

情報筋……もちろん我が新聞部です。ほかの部員に頼んでBクラス前を監視してもらっていた

「チイツ……バレていたか。野郎どもここで坂本を討ち取れ！」

そうして、隠れていた長谷川先生が出てくる

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を——」

「ちょっと待つてもらえますか？長谷川先生」

ここで争ってもいいが。それはCクラスの連戦が決定するので避けたい。

「はい。何でしょうか？」

「俺達Fクラスは根本が長谷川先生とここに入るのをみたという情報が本当かどうか確かめるために来ました。なのに根本は条約を破

っていたのですが。どうなのでしょうね？」

「……………そうですね。そういうことなら召喚を認めるわけにはいきませんね」

「わかりました。じゃあな、根本」

「……………クソッ」

去り際に根本のそんな声が聞こえた。

「なんとかあったが、これでCクラスも敵だな」

教室に戻り、残っている全員に雄二が言う。

「それで、どうするんだ？」

「このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だよ？」

俺は問題ないけどな…

「心配するな。向こうがそう来るなら、こっちだって考えがある」

雄二が活き活きとした顔で告げる。

「万が一の作戦か？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

嫌な予感しかない中、今日は解散となった。

「昨日行っていた作戦を実行する」

翌朝、雄二は俺たちにそう告げた

「作戦？でも、開戦時間はまだだよ？」

現在時刻8時半。開戦時刻は9時である

「Bクラス相手じゃない。Cクラス相手だ」

「なるほどな。それでどうするんだ？」

「秀吉にこいつを着てもらっ」

そう言っ雄二は鞆からウチの学校の女子の制服を取り出す。

「……………どうやって、手に入れたかは聞かないがな

「それは別にかまわんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

男として見てもらえないならそこは構ったほうがいいと思うぞ、秀吉。

それにしても優子にしか見えなくなるぞ…………

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらっ」

いい案だが…………秀吉は生きていられるのだろうか…………

「というわけで着替えてくれ」

「う、うむ……」

雄二から制服を受け取り、生着替えを始める

クラスの男子どもの目線がおかしい気がするが……

「……………！！（パシャパシャパシャパシャパシャ！）」

康太が指が擦り切れそうなほどの速さでシャッターを切る

「（康太。売ってもいいが値段はこちらで決めさせてもらっぞ。あと、半額は貰う）」

「（……………わかった）」

「よし、着替え終わったぞい」

やばい、優子にしか見えない……………

ギュッ

「あ、彩斗。放すのじゃっ」

おもわず優子と錯覚して抱きついてしまった

はふううう~~~~~

「彩斗、帰ってこい」

バシィッ！ハッ・・・・・・・・俺は何を・・・・？

「彩斗も復活したことだし、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

雄二が秀吉を連れて教室を出る

「俺も行く」「僕も」

俺と明久はそのあとをついて行つた

そのまましばらく歩きCクラスの前で止まる

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

Aクラスに俺たちいるとおかしいから離れて様子をうかがうことになる

「気がすすまんのう・・・」

乗り気でない秀吉。・・・・・・・・ばれたら関節がなあゝ

「そこをなんとか頼む」

「むう・・・・。仕方ないのう・・・・」

「悪いな。とにかくあいつらを挑発してAクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ。お前ならできるはずだ」

秀吉は演劇に関しては天才だからな問題ないだろう。

「はぁ…。あまり期待はせんでくれよ……」

ため息とともにCクラスに向かう秀吉。ホントに大丈夫なのか？今日のあいつは

「雄二、別の作戦立てたほうがいいんじゃないか？」

「多分大丈夫だろう」

怪しいな…

「静かにしろ、秀吉が教室に入るぞ」

ガラガラガラと教室の扉が開く音がする

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！』

……………やりすぎだ、秀吉。

「さすがだな、秀吉」

「うん。これ以上はない挑発だね……」

「秀吉は明日生きているんだろうか……」

『な、何よアンタ？』

小山が食いついたようだ

『話しかけないで！豚臭いわ！』

・・・もう、何でもありだな

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数がいいからって言い気になってるんじゃないわよ！何のようよ！』

やはり優子のほうが知名度高いみたいだな、秀吉も女装してるし…

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ港内にあるなんて我慢ならないの！貴方達なんて豚小屋で十分だわ！』

『なっ！言うにこと欠いて私たちにはFクラスがお似合いですって！？』

豚小屋「Fクラスってことかよ……」

『手が穢れてしまうから嫌だけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

日ごろの鬱憤が出てるな……

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私たちが薄汚い貴方達を始末してあげるから！』

そう言って秀吉は教室から出てきた。

「これでよかったかの？」

「ああ。素晴らしい仕事だった」

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

「どうしたの……？お経なんて唱えて」

明久がそんなことを言うてくるが、俺は必至で唱える。秀吉……  
・・頑張れよ

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

小山のヒステリックな叫び声が聞こえてくる。

旨く行ったようだが、目の前が不安でしかないのはなぜだ……

「作戦も旨く行ったことだし、俺たちはBクラス戦の準備を始めるぞ」

「ああ……」

教室に帰ると優子からスキマ流緊急連絡網が来た。

こういうときには便利だ。スキマは俺になれば使えるし。

（どうしたんだ？）

（今日の朝ね。Bクラスの人がアタシを襲ってきたのよ。もちろん  
返り討ちにしたいけど）

（そうか……根本の野郎ここまでやるとはな…すまないな、  
優子。巻き込んでしまった）

（気にしないからいいわよ。それより、頑張ってね）

（ああ）

……あのクス野郎……よくも人間の分際でこ  
こまでやってくれたな…

もう容赦はしねえ……

「ドアと壁を旨く使うんじや！戦線を拡大させる出ないぞ！」

時刻は9時になり、試召戦争がBクラス前から再開させる。

雄二曰く。『敵を教室内に閉じ込めるのこと』

そういうわけで、敵をなぎ倒してるんだが……姫路が少しおか  
しいな。

いや、明久と付き合い始めてなったおかしさじゃなくて……

どうやら、ヤツに何かやられたみたいだな

総司令の姫路が動かない、俺は戦いに専念したいということで秀吉に任せてある

「左出入口、押し戻されているぞ！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

「俺が行く、もう少し耐えろ！」

といつても劣勢には変わらない……ならアレやるしかないな。

立会人の竹中先生のもとに行つて彩花帖を開き耳元でつぶやく

「……ツラ、ずれてますよ」

「っ……！」

頭を押さえて周囲を見回す竹中先生。彩花帖には人の汚点などがたくさん仕込まれている。

「少々席をはずします！」

これでタイムタグができる。

「今のうちに回復しにいけ、古典の点数が残っている奴はこっちに回れ！」

これなら少しは持ちこたえる

「姫路、何かあったのか？」

「そ、その……手紙が……なくなつて……」

あー、アレか。

「姫路、アレは明久に想いを伝えるものだろう？伝わった今、氣にする必要あるのか？」

「っ！！そ、そうですねっ」

なんとか持ち直してくれたようだ

「右側入口、教科が現代国に変わった！」

「数学教師はどうした？」

「Bクラスに拉致された！」

文系に変えられるときついな。

「私が行きますっ！」

「俺も行く。ここからがpartyだ！！」

姫路が走りだして、いったん止まるがまた進みだす。

その先には卑怯者がいつぞやの封筒を持っていた。

「Fクラス射命丸彩斗がBクラスの根本……の取り巻き右半分に現代国勝負を申し込む！」

「同じく姫路瑞樹が残り半分に現代国勝負を申し込みます！」

「サモン試獣召喚！！」

『Fクラス射命丸彩斗 現代国 420 VS Bクラス×4 平均 170』

『Fクラス姫路瑞樹 現代国 403 VS Bクラス×4 平均 169』

キュボツ！！

姫路の召喚獣が腕輪を使って一気に4人倒す。

俺も使ってみるか……

スタイルチェンジ  
「容姿変更スコール！！」

その宣言の後、俺の召喚獣の武器は6爪からガンブレードへと変わり、

その武器を使う主人公の服を和服の上からきている

「さあ……行くぞっ！！」

召喚獣を敵の真ん中に突っ込ませる

「弾ける！！」

俺の召喚獣は一回りし、その回った部分に赤い球体を残す

ガンブレードの引き金を引くと、それが爆発し、敵4人を葬る

「さあ、後お前だけだ。根本」

「ひ、姫路っ！！こいつがどうなってもいいのか！！？」

そう言ってまたも封筒をちらつかせる

「そんなものなくてもいいんですっ。もう思いは伝わってますから——」

「だそうだぞ。じゃあそろそろ死んでもらおうかつ！！Fクラス射命丸が——」

「同じく姫路が——」

「Bクラス山本が受けます！！」

「同じく佐藤が受けます！！」

まだ近衛部隊残っていたか……

「はははっ！ここまで来たのは驚いたが、ここまでだ！！」

だが、俺達にはまだあいつがいる……

ダン、ダンッ！

朝から窓が開けっぱなしのBクラス。今は根本も教室から出ている

が、後ろはガラ空きである。

「・・・・・・・・Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ・・・・・・・・！」

「Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

『Fクラス土屋康太 保健体育 441 VS Bクラス根本  
恭二 保健体育 203』

俺と姫路が近衛部隊を引きつける形になり、丸裸の根元。逃げ場はない。

康太の召喚獣が小太刀で敵を一閃し、一撃で切り捨てる

ここで、Bクラス戦は終結した

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談行くか。な、負け組代表？」

「・・・・・・・・」

座り込んだ根本は派気をなくしている

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らにはステキな卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやってもいい」

雄二の発言に周囲の奴らが騒ぎ始める

「落ち着け。前にも言ったが、俺たちの目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「……そうだな」

「ここはあくまで通過点だ。Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

その言葉で皆は納得したようだ。Dクラス戦でも同じようなことだったからな

「……条件はなんだ？」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には三山好きになってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

2学期から入った俺でも目障りなのだから、相当なものだろう

だからこそ、Bクラスの連中は誰もフォローしない

「そこで、Bクラスに特別チャンスだ」

雄二は取引材料を提案する

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意志と準備があるとだけ伝えるんだ」

「・・・それだけでいいのか？」

疑うような目をする根本。そんなわけがないだろう。

「ああ」

「ただし、Bクラス代表がこれを着て言った通りにすればな」

俺は雄二の言葉につけ足して言う

そして、さっき秀吉が来ていた制服を鞆の中にスキマを開いてを取り出す。

これで姫路の手紙が帰ってくるし、こいつを底辺まで落とせる。

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを・・・  
」

『Bクラス全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

Bクラスの連中が騒ぎ立つ。ここまで嫌われていたんだな

「んじゃ、決定だな。ナイスアイデアだ。彩斗」

「ああ、じゃあちよつと来てもらおうか」

「くっ！放せ！」

根本の首をつかみ、廊下に連行する。

「さあてと、よくも優子に手を出してくれたな」

「知らないぞ！！俺はそんなこと……」

「いや、優子から直接聞いたがお前の指示だとはいてくれたよ」

「くっ」

苦虫をつぶすような表情の根本……どう殺るかなー

「そうだな……お前には一回死んでもらうかな」

妖力——全開——

「な、ば、化け物……！」

「化け物……？俺はお前のほうがよっぽど化け物に見えるがな」

そう言いつつ、スキマからひと振りの剣を取り出す。

俺特製の傷つけた相手が俺の定めた行動をするとトラウマが浮かぶ

ってヤツだ

「妖怪を甘く見たこと、一生後悔しろ……………」

「ひ、ギヤアアああアアアッ!!」

根本を切りつけて、刀をしまう。根本は気を失ったみたいだな

根本の制服に探りを入れて、姫路の封筒を取り出す

「康太。このことが知りたければ雄二と秀吉に相談しろ。俺からはまだ言わない」

盗聴しているであろう康太に向けて言う。…………教室に戻るか。

「悪いな。続けてくれ」

「…………彩斗、なんでそんなに返り血を浴びてるの？それにありえない叫び声まで聞こえたし」

「気にするな。それより、根本の着付けをやってくれないか？」

「私がやってあげるよ」

Bクラスの女子がそう提案してきた。

「なら頼むぞ。できるだけ可愛く頼むぞ」

「それは無理。土台が腐ってるから」

「そうか、じゃあよろしく」

酷いようだが、俺もそう思う。

「姫路、いらないだろうが一応返すぞ」

「あ、ありがとうございます。・・・これはもう処分しちゃいますね」

そう言ってその場で手紙を破っていく姫路。

「一応取っておくという選択もあったと思うけどいいのか？」

「はいっ。それに直接言っただろがいいですし・・・」

少し恥じらいながらそう言う姫路。

「あ、明久くん」

明久を見つけたのか小走りで向かってそのまま抱きつく姫路

「ちょっと、瑞希。こんなことでやらなくても・・・」

「いいじゃないですかあー。私も頑張ったんですよ」

「そうだね、でも少し場所を変えようか」

FFF団がいつの間にか登場していた。いつできたかは知らないが・・・一応諜報員であったりする

「瑞希、逃げるよ」

「え、ちよつと明久君!!」

明久は大胆にも姫路をお姫様だっこして逃げていく。

『殺せええええええええええ!!』

それを追う黒ずくめの集団……俺も帰るかな

『こ、この服、ヤケにスカート短いぞ!』

『いいからキリキリ歩け!』

『坂本め!よくも俺にこんなことを——』

『無駄口を叩くな!これから撮影会もあるんだぞ!』

『聞いてないぞ』

……これは新聞部に伝え方が面白そうだ。

俺は、部室へと足を向けた。

翌日。根本が一面を飾ったのは言つまでもない

## 第12話FクラスとBクラスの試召戦争（後書き）

無理矢理Bクラス戦を1つにまとめました・・・12話投稿です  
うーん、根元の扱い・・・こんなものかな、うん。妥協しよう  
最悪姫路の料理ぶち込めば……

ということ最近アクセスの方初めて確信しましたが・・・

PV23000!!ユニーク3500!!

ありがとうございます!!

これからも「バカと鴉天狗と召喚獣」をよろしくお願いします!!

第13話俺と優子と決戦！Aクラス戦！！（前書き）

11/28 微修正

### 第13話俺と優子と決戦！Aクラス戦！！

Side Ayato

優子の関節技に怯えながらもなんとか一晚乗り切った・・・

そして2日間の点数補充も終え、いよいよAクラス戦となった

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能と言われていたのにも関わらずここまで来れたのは、ほかでもない皆の協力があったることだ。感謝している」

珍しく雄二が素直に礼を言っている

「雄二、らしくないな」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」  
確かにここまで来れたのは俺たちだけじゃなく全員の協力があつてのことだ

「ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ！」

『おおーっ！』      『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

下がる予感がしないFクラスの土気。さすがだな……

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着付けたいと考えている」

『どういうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

机をたたき、皆を静まらせる

「やるのは当然、俺と翔子だ」

雄二と翔子って知り合いなのか……？

そう言えば以前翔子に取材したときに……ペラペラ

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ！？」

なんかカッターが飛んできたけど無視。

「次は耳だ」

……こいつら本当に友人関係なのか？

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば

勝ち目はないかもしれない」

ペラペラ・・・・・・・・これも違う。

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ ともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかった。今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない」

・・・・・・・・一度整理するかな・・・・・・・・彩花帖

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおーっ！』

にしても、相変わらずテンション高いなこのクラス・・・

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？ なんの教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

あ、あった。霧島翔子の欄が・・・・・・・・１０ページもある・・・・・・・・

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負でなく純粋な点数勝負とする」

やっと見つけた……後はタイミングを合わせて言えば……

「でも、同点だったら延長戦だよ？ そうしたら問題のレベル上がるだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かにそうじゃな」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでもそこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「ならどうするんだ？ 翔子の弱点なんてほとんどないだろう」

「ああ、そうだな」

小学生のころに何かあったのはわかるが、そこまで情報を仕入れてない

「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろタネ明かししても良いじゃろっ」

秀吉がしびれを切らしてはなった言葉にクラスの皆も同意している

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

長すぎだ。おかげで彩花帖の整理4分の1終わった

「俺がこのやり方採った理由は一つ。ある問題が出ればあいつは確実に間違えると知っているからだ」

小学生レベルで間違っ問題………？

「その問題は——『大化の改新』」

645年、中大兄皇子が中臣鎌足とともに蘇我氏を倒したってやつか

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルで出てくるかな」

「いや、そんな堀下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「何年に起きた、とかか？」

「ビンゴだ彩斗。その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

ホントにこんな問題であいつが間違えるのか………？

明久でも間違えない………と思ったら明久が口パクで

『鳴くよウグイス、大化の改新』と言っていた………

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

「いや、こいつ794年と思っていたぞ」

「彩斗っ！なんてことを言っんだ！！」

明久が何か言ってきたがスルー

「……さすがは明久だ。だが、翔子も間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばだ」

そーなのかー。っとそろそろ頃合いだな

「そついや、雄二って翔子と幼馴染だよな？」

「ああ。そうだ。でもなんでお前が——」「総員、狙え!!」なっ何故明久の号令で皆が急に上履きを構える!!!？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺の情報網に穴はねえ」

「俺がいったい何をしたと!？」

Fクラスの男子生徒はこういう時こそ力を発揮し、団結する

「遺言はそれだけか?……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

いつの間にか明久が隊長になってるし

「あの、明久君」

「ん?なに、瑞希」

「明久君は私より霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だけど……やっぱり瑞希が一番かな……」

明久の新スキル、バカップル発動。

「嬉しいです」

「ちょっと、瑞希。ここで抱きつかないで、あと美波、どうして僕たちのほうに向かって教卓なんてものを投げようとしているの……？」

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

唯一ともいえる常識人、秀吉が場を取り持つ

「秀吉……邪魔をするな」

「冷静になつて考えてみるがよい。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二以外に興味があるとは思えんじやろうが」

そついや翔子に前、取材したとき「好きな人は雄二」とか言ってたな

「むしろ興味があるとすれば……」

クラスの皆の視線が姫路に向く……昔、同性愛者という噂が翔子にはあつたな…今もだが

だが、本来視線を向けるべき相手は雄二である

「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

「瑞希、僕が絶対守るからねっ!!」

姫路を抱きしめる明久。もちろんのごとくこいつらは沸き立つが・・・今回はくぎを刺しておく

「皆、いつものように嫉妬に怒り狂うのはわかるが、噂が噂だ。こはFクラスの数少ない女子生徒を守るために今回は明久にゆだねてみないか？」

『・・・・・・・・今回だけだぞ』

そう言つて引きさがってくれた。案外扱いやすいな、このクラス

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さいころに間違えて嘘を教えていたんだ」

幼馴染というワードにまた動きかけるFクラスの連中

「アイツは一度覚えたことを忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

アイツも完全記憶能力者か・・・・・・・・？

「それを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は――」

『システムデスクだ!』

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

今回は雄二をはじめとした主要メンバーでAクラスに宣戦布告しに来た

「うーん、何が狙いなのか？」

それでもって現在交渉中なのは我が愛しの優子。悩む姿も可愛い

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「それにたかがゲームだぞ。命もかわらないんだからいいだろ」

「……いくら彩斗が言っても簡単には決められないわね」

さすがだな、読心は使えないはずだけどこいつは分身の術も使えたはずだ。

ここにいるのが分身で本体が隠れて読心能力（禁書目録出典のほう）使われたら終わりだしな……

一応結界を張っていいこう。それと、俺はNA。UTOも好きだ。めんどくて25巻で止まっているが……

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせれるのはありがたいけど、わざわざリスクを冒す必要もないかな」

「懸命だな」

さあ、ここからが本番だ

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

雄二は悪役顔して訊く

「時間はとられたけど、それだけだったわよ？何の問題もないし」

秀吉の挑発にまんまと乗ったCクラスは昨日Aクラスに攻め込み、半日で決着がついた

「Bクラスとやりあう気はないか？」

「Bクラスって……昨日来ていたあの……？」

「ああ、アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされてないようだがさて、どうなる事やら」

「でも、BクラスはFクラスと試召戦争下から、三か月間準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずよね？」

試召戦争の決まりの一つ、準備期間。

戦争に敗北したクラスは三カ月の間、宣戦布告はできない。

自分から出来ないだけで、申し込まれたら戦争しなければならない

これは負けたクラスがすぐ再選を申し込み、戦争が泥沼化しないようにするための取り決めだ

「知っているだろ？実情はどうであれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規約には何の問題もない。…… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「……………それって脅迫？助けて彩斗」

「今回は敵だ、優子」

「人聞きが悪い。ただのお願いだ」

雄二が悪役になったな。そういう仮面もあると便利だと思うが

「うーん。わかったよ。何をたくらんでるか知らないけど、代表が負けるわけないもの」

あっさり返事をしてきたな……………まあアレのクラスよりはましだろ

「だって、あんなかつこうした代表がいるクラスと戦争なんていやだもん……………」

根本の女装で思わぬ収穫だな

「でも、こっちからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、お互いに5人ずつ選んで一騎打ち5回で3回勝ったほうの勝ちって言うのなら受けていいよ。あと、個人的なことだけど、私と彩斗の試合も入れてね」

「なるほど。こっちから姫路が彩斗が出てくるの可能性を警戒してるんだな」

「うん。姫路さんはなんとかなくても、彩斗が本気を出したら高橋先生を超えるかもしれないからね」

確かこいつには紫姉さんが（勝手に）くれたオートで問題の答えが浮かんでくる能力と

時を操る能力の組み合わせを話したな……

でも、高得点者のはずの姫路が軽く見られているな……

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉は鵜呑みにできない」

これは戦争だからねと付け足す。さすが俺の嫁候補

「そうか。それなら条件を呑んでもいい」

「ホント？嬉しいな♪」

やべ……可愛い……パシャ……秘蔵の一枚、ゲットだぜ！！

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせてもらう。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」

そうなるのとこつちのアドバンテージがかなり高くなるけど……  
……どう出るんだ？

「え？うーん……」

また悩む優子……パシャパシャパシャ……コレクション  
に追加だな

「（彩斗、後で売ってほしい……）」

「（康太、これだけは譲れない）」

康太が売ってほしいと来たが、これだけは駄目だな……

「……受けてもいい」

「うわっ！」

明久がびっくりしてるな、相変わらず気配がない

「……雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？代表。いいの？」

「……うん」

「……その代わり。条件がある」

「条件？」

「……………うん」

うなずいて、たまたま雄二の後ろにいた姫路をじっくりと観察した

「……………負けたほうはなんでもひとつ言うことを聞く」

翔子がそう言った瞬間、明久は姫路の前に立つ

「……………（カチャカチャ）」

康太、それはまだ早い……………って言うより、必要ない

「面白そうだな……………優子、俺たちも負けたほうが一つ言うことを聞くってことでどうだ？」

「べ、別にいいわよ？」

何故疑問形……………？

「じゃ、こうしよう？勝負内容は5つのうち三つはそっちが、残り二つはこちらが決めるってことにしてくれない？」

「交渉成立だな」

「そうだね。（瑞希は僕が守るからね）」

「（なんだかよくわからないけど、ありがとございます）」

「……………勝負はいつ？」

「十時からでいいか？」

「……………わかった」

「よし、いったん教室に戻るぞ」

「ほかの皆に報告しないといけないからな」

そうして、俺たちは教室に帰っていった

「では、両名共準備はいいですか？」

場所は変わりAクラス。試召戦争の立ち会いはAクラス担任の高橋先生

「ああ」「……………問題ない」

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

いきなり優子か、なら俺しかいないじゃないか

「いきなりとはせつかちだな」

「いいじゃない。ところで秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんってしってる？」

「はて、誰じゃ？」

Cクラス……小山……ハッ

「じゃーいいや。その代わりちょっとこっち来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

「秀吉……生きて帰ってこい」

心からのご冥福を祈る……

『姉上、何の用——どうしてワシの腕をつかむ？』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人たちを豚呼ばわりしていることになってるのかなあ？』

『はっはっはっ。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して

——あ、姉上っ！ちがつ、その関節はそっちには曲がらなっ……

……』

……優子が帰ってきた、そりやもうすがすがしい笑顔で

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。さあ始めましょ」

「そうだな、ホントにお前と戦う日が来るとはな……」

秀吉のことは今は忘れよう……

「そうね。確かになかったわね」

弾幕ごっこも俺が教える一方だったしな

「ホントはAクラスを落とすのに気が引けただけな………お前と戦えるってことが何より楽しみだっ」

「ふふふ……さあ勝てるかな？」

「教科はどうしますか？」

「数学で」

「ちよっと、アタシの得意教科じゃない!!」

「俺はどの教科も変わらないからこれでいいだろ」

「では召喚を開始してください」

「サモン「試獣召喚」」

いつものように袴+6爪装備の召喚獣が出てくる

対する優子の召喚獣は西洋風の鎧と槍だった。

『Fクラス 射命丸彩斗 数学440 VS Aクラス 木下優子  
数学 449』

対Aクラス用に点数上げてみたが、それでも上回ったか……

「始めから飛ばすぞっ!!」

ここで、俺の腕輪について説明しておこう。

俺の腕輪の能力は本体の能力を召喚獣で使えるってことだ

用は、妖怪化もできるってこと、腕輪のせいにしてしまえば自分の正体もばれない

Bクラス戦のアレは優子の能力が適正で自分で使えたということだ。

フルシンクロ  
「精神同調!!」

俺の感覚が召喚獣とほぼ同じになる。

ロック。NEXEで出てきたものである、この場合本体と召喚獣の感覚をリンクさせる

「行くぞ、優子」

『WAR DANCE』

「って速い!!」

『PHANTOM DIVE!!』

右手で下から振り上げ、そのまま上から振り下ろすが、ガードされてあまりダメージにならない

「まだだ、DEATH FANG!!」

続けて攻撃を仕掛けるが、うまく当たらない

「っと、焦りすぎじゃない？彩斗。なら、こっちからも行かせてもらうよっ」

『スタイルチェンジ  
容姿変更真田幸村』

優子が腕輪を使う。おそらくアイツの能力と同じようなものだろう  
優子の召喚獣の武器が西洋の槍から2本の先が3つにわかれている  
槍に変わる

「洒落たことしてくれるじゃないか」

よりによって物語上の好敵手とはな……

「槍使うからこれがベストなのよ」

「なるほどな……だが、それはお前だけのものじゃない……」

「

『スタイルチェンジ  
容姿変更クラウド』

俺の召喚獣の武器がバスターソードに変わり、黒いロングコートが  
着用される

「さあ、ここからだっ！！」

「負けないよ！！」

俺の召喚獣が斬りかかるが、難なく防ぐ優子の召喚獣。

そんな攻防がしばらくの間続き、2人とも徐々に点数を減らしていた

『Fクラス 射命丸彩斗 数学11 VS Aクラス 木下優子  
数学 9』

「やるな……」 「アンタもね……」

俺はシンクロのためフィードバックも来ている。そろそろ人間では限界に近い

「ねえ次で終わらさない？」

「ああ。俺も限界だしな」

「なら——行くわよっ!!」

『スタイルチェンジ  
容姿変更なのは』

白い悪魔の装備になる優子の召喚獣

「来いっ!!」

『パーフェクトシンクロ  
完全同調』

俺の召喚獣は一本の刀

「スタアアアライトオオオオ」

やっぱりこれか・・・ならばっ!!

「風竜――」

俺の最大の技で受けて立つ!!

「ブレイカアアアアア!!」

「一閃!!」

橙の光と風の竜がぶつかり合う。

押し負けそうになり、必死に耐えていると・・・すぐそこに優子の召喚獣が迫っていた。

「くっ・・・」

『無限一刀流発動!!』

とっさに無限一刀を発動させて迎え撃つ。

「届けえええええっ!!」

「当たれええええっ!!」

お互いが叫びあい、召喚獣同士が交差する。

優子の召喚獣には刀が腕に刺さっていて、俺の召喚獣には胸に槍が

刺さっていた

「優子、俺の負けだ……………」

『Fクラス 射命丸彩斗 数学0 VS Aクラス 木下優子 数学3』

『うおおおおおおおお』

周りが叫び立つ中、俺はフィードバックから来る痛みと疲労で意識を失う

目を覚ましたら頭には柔らかい感触……………

目の前には優子の心配そうな顔があった

「……………優子、心配かけたな」

「別に気にしなくてもいいわよ。（彩斗の寝顔写真手に入っただし）」

俺はどのくらい長く寝ていたんだろうか？

「試合戦争はどうなってる？」

「さっき3戦目が終わってこれから4戦目よ」

「そうか……………」

優子の膝枕から名残惜しくも離れ、雄二のほうへ向かう

「雄二、負けちまってすまねえな」

「ん、彩斗か。気にしなくていいぞ。俺たちもいいものを見せてもらったしな。それと、もう大丈夫なのか？」

「ああ。迷惑かけたな」

「その言葉はあっちの彼女に言ってやれ」

そう言っつて優子のほうを指さす

「そうだな。で、今どうなってるんだ？」

「ああ、お前のあと、明久が普通に負けて、姫路が久保に勝って1-2つてとこだ」

「そうか」

「では4人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

高橋先生のコールで康太が立ち上がった

今まで教科選択権はまだ1回、ここでこれが生きてくる。

康太は総合点数のうち8割が保健だからな

「じゃあボクが行こうかな」

対するAクラスは愛子が来るようだ

「1年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

見たことないやつも多いのだろうか、自己紹介されてもピンとこないようだ

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね」

康太の実力を知らないのか、愛子は余裕っぽいな

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？……………キミと違って、実技で、ね」

問題発言により騒ぎ立つFクラス陣。……………実技をサッカー、野球とか運動のほうで誰一人捉えないってのも不思議だな

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ……………僕には間に合っているよ」

「そうです！私がいるんですから必要ありません！」

姫路、お前もFクラスに汚染されてきたな……………

「そろそろ召喚してください」

「はい試獣<sup>サモン</sup>召喚つと」

「……………試獣<sup>サモン</sup>召喚」

康太の召喚獣は小太刀に忍者装束、愛子のほうはセーラー服に斧を装備していた

「実践派と理論は、どっちが強いを見せてあげるよ」

言い終わると同時に愛子の召喚獣は腕輪を光らせながら動いた。

斧に雷撃をまわせている

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」

今にも斧が当たると思った時……………

「……………加速」

康太の召喚獣の腕輪が輝き、超高速で動き出す。

すっかり姿が見えてるのは俺と優子くらいじゃないだろうか？

「……………え？」

愛子の戸惑った顔

「……………加速、終了」

ぼそりと康太がつぶやく

そして、愛子の召喚獣から血が噴き出した

|       |      |      |     |    |      |
|-------|------|------|-----|----|------|
| 『Fクラス | 土屋康太 | 保健体育 | 572 | VS | Aクラス |
| 藤愛子   | 保健体育 | 446  | 』   |    | 工    |

さすがだな……………500点越えとは

「これで2対2です。最後の一人、どうぞ」

「……………はい」

Aクラスからはもちろん翔子

「俺の出番だな」

Fクラスは雄二。こいつしかない

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

雄二の発言でAクラスが揺れる

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくては いけませんね。少しこのまま待っていてください」

高橋先生が教室を出ていく。

俺は自然と雄二のそこへ向かう

「雄二、後は任せたよ」

明久が雄二の手を握る

「ああ。任された」

「……………（ビツ）」

康太が歩み寄りピースを雄二に向ける

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フツ）」

康太は口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻った。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ。明久のことか。気にするな。これからも幸せにな」

「はいっ」

「雄二、勝ってこいよ」

俺は一言だけ伝える

「ああ。お前にもいろいろ助けられた。後はまかせとけて」

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

戻ってきた高橋先生が2人に声をかける

「……はい」

「じゃ、行ってくるか」

これですべてが決まる……

「皆さんはここでモニターを見ていてください」

『では、問題を配ります。制限時間は50分。満点は100点です』

『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『……はい』

『わかってるさ』

『では、始めてください』

これで、あの問題が出ていなかったら俺たちの負けだ

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい》

．．．．．

．．．．．

.....

.....

（ ） 年大化の改新

「あ．．．．！」

「出たな．．．．」

「うん、これで僕たちの卓袱台が」

『システムデスクに！』

「最下層に位置した僕たちの歴史的勝利だ！」

『うおおおお！』

《日本史限定テスト 100点満点》

《Aクラス霧島翔子97点 VS Fクラス坂本雄二 53点》

俺たちの卓袱台が………ミカン箱になった

「3対2でAクラスの勝利です」

高橋先生の宣言が容赦なく俺たちに突き刺さる

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！歯をくいしばれ！」

「吉井君、落ち着いてください！坂本君にはこれまでがんばってくれたんですから私の（失敗）料理をあげるんですっ！」

姫路、お前が落ち着け

「だいたい53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとか考えられるのにこの点数だと——」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしようが！」

「瑞希に教えてもらってからそれはわからない！」

「それでも坂本君は責めちゃだめですっ！お礼に料理を……」

「くっ！何故止めるんだ瑞希に美波！この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

「それと姫路のは処刑を越して死刑だ」

姫路の将来が本気で心配になってきたな……明久、頑張れよ

「……でも、危なかった。雄二が初戦小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

図星かい

「……ところで約束」

「あ、アタシのもね」

戦いに熱中しすぎて忘れたな……でも大体分かるんだけどな

「……！！（カチャカチャカチャ！）」

康太、こういうときは行動力あるよな

「わかつている。何でも言え」

こうなると雄二は潔いな

「・・・・・・・・それじゃ――」

明久が姫路の前に出る

翔子は小さく息を吸って

「・・・・・・・・雄二、私と付き合って」

おおー言ったか。やっぱりそう来たか

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「・・・・・・・・私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

ほう・・・・・・・・記者魂が燃えてくる話だ

「その話はなんでもことわっただろ？ほかの男と付き合う気はないのか？」

「・・・・・・・・私には雄二しかないない。ほかの人なんて、興味ない」

あの噂は翔子が雄二が好きだから雄二の周り異性が気になったからか

「拒否権は？」

「……………ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに――」

翔子は雄二の首根っこをつかみ、教室を出て行った

……………今度は俺の番か

「で、優子はどうするんだ？」

「えーっと……………その……………」

こういうときになるほど優子って引ッ込むんだよなあー

「じゃあ、お互い同時に言ってみるか……………」

「……………うん」

「せーの」

こいつ言っていない言葉なんてあと一つしかない……………

だから精一杯この言葉を……………

「結婚しよう（しましよう）優子（彩斗）」

「……………」

やばい、すごく恥ずかしい……………

「といつても今すぐは無理だからとりあえず婚約で止めとくか」

「そうね」

「さて、Fクラスの皆、お遊びの時間はここまでだ」

ふと、扉のほうから鉄人こと西村先生の声が・・・

「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補修についての説明をしようと思つてな」

・・・まさかな

「おめでとうお前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一念、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ！！？』

クラスの男子から叫び声上がる。なんせ、相手は鉄人だものな

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな。いくら『学力がすべてでない』と言つても人生を渡っていく上で強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって。ないがしろにしているものじゃない」

正論言われてるから誰も言い返せない

「吉井。お前と坂本はとくに念入りに監視してやる。なにせ、開校

以来の《観察処分者》とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！何としても監視の目をかいくぐって今までより楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「…………お前には悔いを改めるという発想はないのか？」

あつたら明久じゃなくなると俺は思う

「とりあえず明日から授業とは別に補修の時間を2時間設けてやる」

…………明日からか…………なら今日は何もないな

「なら、明久君。今日は私と映画を見に行きましょう」

「いいよ。あ、彩斗達もどう？」

「それはありがたいが、俺たちも言っているのか？姫路」

「はい。いいですよ」

「なら、ご一緒させてもらいましょ」

「瑞希！アキは今日ウチと「えいつ！」…………ん、モグモグ…………ゴパア」

島田撃沈。これは毎度の流れになってきたな…

「優子、婚約初めての作業だ。明久も準備はいいか？」

「うん」

俺たちの後ろにはFクラスの連中が……

『もう我慢できねえええええ』

と叫びだした。俺は優子を明久は瑞希をお姫様だっこして逃げだす

「あ、明久君／＼／＼」 「彩斗、恥ずかしいわよ／＼／＼」

『射命丸も吉井も坂本も彼女作りやがって……………』

『クロス！クロス！クロス！』

『諸君、男とはなんだ？』

『愛を捨て、哀に生きるもの！！』

『よろしい、ならばあの異端者を追ええええええ』

『うおおおおお！！』

俺と明久の逃走劇が始まった。

逃げながら優子が話しかける

「彩斗、お父さんとお母さんにはいつ話すの？」

「今日すぐにだ」

「Ok貰えるかしら・・・」

「あのおじさんとおばさんなら大丈夫だろう」

「そうね」

「それと週末には幻想郷に行くぞ、婚約発表も兼ねてな」

「うん・・・幻想郷かぁーどんどこだろう」

優子が期待に胸を膨らませている中、俺は奴らから逃げながら家に帰った。

### 第13話俺と優子と決戦！Aクラス戦！！（後書き）

Aクラス戦も1話にまとめた・・・第13話投稿です  
今回はいろいろな作品がクロスしまくってますね

ネタは・・・わかりやすいのが多いはずwwwwww  
作者がわかる範囲であればリクエストも募集いたします^^  
ようやく1巻が終わりましたがどうでしたか？

次回は清涼祭に・・・入らず1話オリジナル（？）です  
では、また次回に^^

## 第14話俺と優子と婚約発表!!?

Side Ayato

Aクラス戦が終わってその週末……

俺はおじさんとおばさん……すなわち優子の父と母にもう結婚の意思があると伝えたら

二人揃って「もうしちゃえばいいのに」とのお言葉を……

何故か素直に喜べない

優子のほうは挨拶は済ませたけど、俺のほうはまだである。

そう——優子を幻想郷に連れて行き、まず紫姉さんにあってもらうことになる

以前から幻想郷行きは確定していたが、恋人紹介が婚約発表になってしまった……

まあ大差ないだろう

ということで現在スキマ移動中である。

時期はちょうど白玉楼の宴会が行われる。そこで言えばいちいちか所ずつ回らなくていい

「ねえ彩斗。この目玉どうにかならないの？ 気味悪いんだけど」

「無理だ。そういう仕様だと受け止めるしかない」

紫姉さんもなんでこんな目玉だらけに……

「そうそう、優子。これ付けてちゃんと羽だしとけよ。そうじゃないとあと後面倒だから」

そう言っつて鴉天狗の烏帽子を渡す。これがないと妖怪の山で同胞に襲われることになる。

俺のことを毛嫌いしてるやつもいるけどな

二人揃って羽を出し、烏帽子をかぶって完全に天狗にしか見えない格好になると

出口が見えてきた。

「そろそろ着くぞ」

「うん」

そして、スキマから出て大きめの一軒家が目の前に現れた。

「こんにちわー」

「はい。どちら様でしょうか？」

出てきたのは九本の尾がある女性。紫姉さんの式である藍さんだった

「あ、藍さんお久しぶりです。紫姉さん起きてます?」

「おお、彩斗か。久しぶりだな紫様はまだ寝てらっしゃる。そろそろ起きるころだと思っが…」

八雲 藍さん、俺が昔紫姉さんにお世話になった時に一緒にいた人で遊んでもらったりした

「なら、起こしますね」

「ああ、助かるよ。ところで後ろの天狗は誰だ?」

「あー。その話は紫姉さんが起きてからでいいです?」

「構わんぞ」

そつして紫姉さんの部屋に……

「さてと、起こすか。あ、優子耳ふさいで後ろ向いてて」

「あ、うん」

まず、境界の能力で睡眠を浅くしてつと……

スキマから厚底鍋とお玉を取り出して……

「いくぞ!秘義「死者の目覚め」!」

カンカンカンカンカンカンッ!!

お玉で鍋を叩く。これでどんな奴でも起きる………とゲームで言ってた

「うううううう………頭がぁ痛い」

あ、起きた

「紫姉さん。おはよ」

「ううう……おはよう。彩斗」

こめかみを押さえている紫姉さん

「で、いきなり何のようよ？」

ご機嫌がよろしくないようだ。だから淡々と用件を言う

「幻想郷の皆に合わせたい人がいてな。それで初めに紫姉さんの所に来たんだ」

「それって後ろの彼女？」

「そうそう」

「わかったわ。藍達を呼んでくるわ」

そう言つて部屋を出ていく紫姉さん。そこで今まで黙っていた優子が口を開いた

「彩斗……あの人たちの妖力どんだけあるのよ……」

「そりゃ俺よりもあるさ。なんていったってこの幻想郷を作ったんだからな」

「そ、そうなんだ……」

「まあ、お前も低いほうではないさ望むならもっと妖力注ぐけど？」

口の端を上げながら言う。

「そ、それじゃお願いしようかしら／＼／＼／＼／」

「お任せあれ」

目を閉じた優子に少しずつ近づき、深いキスをする

「ん、ふぁ……んぷっ……」

妖力流していて大変なこっちは対照的に若干楽しんでらっしゃる優子さん

しばらくして離れると優子の頬は紅潮していた。マジカワユス……

そこにスーッと襖の開く音が……

「彩斗、待たせたわね……ってどうやらお楽しみ中だったようね。失礼したわ」

とにやけながら去っていく紫姉さん……

「「う、誤解だあゝ（です）」」

二人揃って絶叫した…………

そして、なんとか紫姉さん呼び戻し、改めて話をする事になった

「まず、こいつの紹介から、紫姉さんはスキマで見えていると思うけど、俺の幼馴染の木下優子」

「き、木下優子です……………」

駄目だ、完全に緊張してる…………

「私は、八雲紫よ」「紫様の式の八雲藍だ」

お互い自己紹介しあう

「ふゝん、妖力もそこそこでなかなかいい子じゃない」

紫姉さんがそう言う。

「彩斗、その子はもとは人間だろう？」

藍さんがそう言う……………なんでわかるかは別として

「はい、紫姉さんが許可したんで妖力流しました」

「そうか……………ならいいが」

ここからが本番だ……………

「それで、俺達このたび婚約することになりました」

「……………はい？」

「え、彩斗？婚約ってホントに？」

「もちろん。正式に」

紫さんは珍しく慌てている

「……………何故結婚じゃないんだ？」

藍さんがそう言う

「外の世界じゃ結婚は男は18からんです。俺はまだ16だから婚約止まりってことです」

「それは、外の世界で、だろう。幻想郷ではもう結婚できるぞ」

「あ……………」

盲点だった……………

「彩斗、それって……………」

優子が見つめてくる

「ああ。俺達、結婚できるぞ……まだ幻想郷ないだけだな」

ははは……まさかこうなるとは……

俺は優子と向き合って……

「「イエーーーーーイ」」

盛大にハイタッチした

「ということで、改めて。俺たち結婚します」

「ええ、おめでとう。でも優子って言ったっけ？ホントに覚悟はあるの？自分の両親よりも数十倍以上長く生きることになって人としては生きれないのよ？」

紫姉さんが祝福とともに最終警告を出す

優子は強い眼差しをして言いきった。

「アタシは彩斗さえいれば大丈夫です」

嬉しいこと言ってくれるじゃないか。

「そう、ならいいわ。よかったわね彩斗。こんなに愛されてて」

「自慢の嫁だ」

そう言い切ると優子が「もう……」と顔を紅くして言った。

「それで、今日の宴会で披露宴的なことしたいんですけどなるべく人集めてもらえますか？」

「ええ、いいわ。まかせておきなさい」

「ありがとうございます」

「じゃ、俺たちは文姉のどこに向かいます」

そう言つて去ろうとしたとき

「そういや、幽々子が彩斗が帰ってきたら白玉楼に来てほしいと伝えてくれて言つてたわね」

「幽々さんが？・・・どっちにしろ文姉のあとで行くつもりだったんでその時でいいか」

「大丈夫だと思うわよ。そこまで急ぎでなかったようだし」

「そうか・・・」

そうして俺たちは妖怪の山に向かった。

妖怪の山、我が家の前にスキマを開いて出ると丁度文姉にあった。

「あら、彩斗。帰ってきたの」

「ああ。ちょっと用事があったな」

「ふうん。あ、もしかして後ろ子がいつも言ってる優子ちゃん？」

「ああ。そうだ」

「木下優子です」

「射命丸文です。彩斗の腹違いの姉で幻想郷の新聞屋をやってます」

「へえ……なら、彩斗のあれは血筋ね……」

あれとは記者モードだろう

「で、何か用があるんじゃない？」

「ああ。俺達このたび結婚します」

「へー、おめでとう……ってえええええええつ！！」

文姉絶叫。いくらなんでも驚きすぎだ

「文姉、落ち着け」

あきれる俺と苦笑いの優子……

「ゴメンゴメン。……彩斗はもう結婚かぁー」

「ははは、先越して悪かったな」

「うーん、ちょっと悔しいかもね」

そう苦笑いする文姉。

「じゃ、披露宴は今日の宴会の時にやるからよろしくな」

「わかった。お幸せにね」

そう言って妖怪の山を後にして、白玉楼へと向かう

「兄様~~~~お久しぶりですー」

「グフツ・・・妖夢、久しぶり」

白玉楼についたとたん、妖夢から鳩尾アタック食らった

「・・・・・・・・彩斗？どういふことか説明してもらえるわね」

いつの間にか俺の後ろに鬼が・・・・・・・・いや般若が・・・・・・・・

「あー、これはだな。俺がここで修行していたときにある日突然こいつが「義妹にしてください」って言いだしてな、まあ断る理由もないし許可したんだ」

「・・・・・・・・なら大丈夫ね」

納得したのか、引きさがる優子

「兄様、あの方は誰？」

「後で幽々さんと一緒に説明する。あ、紫姉さんが言ってたけど俺に用って?」

「そうそう。ある日突然この白玉楼に変な刀が置いてあったのよ。私には使えなくて紫様に相談したら兄様に聞いてって」

「そうか、ひとまずは幽々さんとお前に話だな」

そうして妖夢のあとをついていく。

「幽々子様ー兄様が来ましたよー」

妖夢が幽々さんの部屋をあけてそう言う。

「お久しぶりです幽々さん」

「久しぶりね、彩斗。後ろの子は昔言ってた彼女?」

「ええ、そうです」

「初めまして、木下優子です」

優子が自己紹介する。だんだん慣れてきたみたいだ・・・

「私はこの白玉楼の主、西行寺幽々子よ」

「私は白玉楼の庭師をしている魂魄妖夢です」

「で、なんでまた宴会の前にここに來たの？」

幽々さんがそう言う。

「それは、俺達このたび結婚しますんで今日の宴会で披露宴をやってもらおうと思って來ました」

「け、け、け……結婚っ!!?」

「そう、よかったわね、おめでとう」

驚愕する妖夢に対して冷静なままの幽々さん

「兄様へ結婚するの？」

「ああ」

いまだ食い下がってくる妖夢

「……なら、優子さんが兄様にふさわしいか私が試します!!」

いきなり戦闘態勢に入った妖夢。こいつも暴走しだすと手がつけられない

「彩斗、アレ殺っちゃっていい？」

「……好きにしろ、とりあえず外でやれ」

優子の眼の色がなかった……もうどうにでもなれ

「いきますよ優子さん!!」

なんだかんだで外に出た妖夢がそう言っつて優子に襲いかかる

「変化、スタアアアライトオオオオオオオ・・・」

いきなりかよ、飛ばしすぎだ

「ブレイカアアアアアア!!」

「え、きゃああああああ」

妖夢撃沈。わずか1秒・・・

「強いわねあの子」

「ええ。たまに負けそうになりますよ」

やりきったという顔をしている優子と気絶している妖夢を見ながら話す。優子は怒らせないようにしよう・・・

「で、幽々さん。妖夢が言っつた変な刀っつてどれですか？」

「ああ。アレね。ちょっと待っつて」

幽々さんは室内へと戻っつていった

「おつかれ、優子。・・・でもやりすぎだ」

「だっつて・・・」

「だってじゃない。非殺傷設定とかなかったらあいつ死んでるかもしれないなかったんだぞ。ここを殺人現場にする気か」

「ううう．．．ゴメンねえ．．．彩斗」

「可愛いから許す」

涙目＋上目使いは無理だ。

「お楽しみの途中悪いけど刀持ってきたわよ」

「．．．．．」

押し黙る俺達．．．．．

「一応俺が使ってみようか」

「ええ」

刀を受け取ると言葉が響いてきた

「（あなたは．．．．．うん。決めた。あなたが私の職人ね）」

「（職人．．．？もしかしてお前は武器か？）」

「（うん）」

武器と職人の関係．．．．．ソウル。ーターである

「（そうか、ならアレもやってみるか）」

「（いいよ）」

魂の共鳴！！

その宣言をすると刀が何本にも分裂した

「（これは・・・無限一刀流？）」

「（うん、あなたが一番得意にしているみたいだからね）」

「（…………なるほどな。それでお前の名前は？）」

「（ないよ。だからあなたが決めて）」

名前がない……………死武專にも入れなかった孤児か？

「（ならそうだな……………剣<sup>けん</sup>なんてどうだ？）」

刀だから剣。そのまんまだ

「（悪くないね。じゃ、あなたの名前は？）」

「（俺は射命丸彩斗）」

「（いい名前だね。これからよろしくね彩斗）」

「（よろしくな。デスサイズにできるかは難しいかもしれないけどな）」

「（ううん。私はパートナーが決まっただけで十分」

よっぽどパートナーがほしかったんだな

「彩斗、どうしたの？ ぼーっとしちゃって」

気がついたら優子が俺の顔を覗き込んできた

「ん、優子か。なんでもない／＼」

下から覗きこんできたからその・・・胸が・・・

「そう、ならいいけど」

そうだ、優子には最低限紹介しないと・・・

「そうそう。優子、新しい家族（？）だ」

優子がキョトンとした。パシャ・・・・・・・・可愛い・・・

「剣、人間体になってもいいぞ」

武器状態の剣が人間体になる

「初めまして、剣です」

長い黒髪に恋姫の関羽のような服を着ている

「えーとどっから出てきたの？」

「さっきの刀が私です」

「「「・・・・・・・・・・・・はい？」」」

3人から同じ反応が出た。

「優子、ソウ。イーターだ」

「？ああ。そう言うことね」

「彩斗どういうこと？」

優子はわかるが幽々さんたちはわからないみたいだ

「別の世界から来た人ですよ。武器に変化できる能力があります」

「ああ、そう言うことね」

ということとで自己紹介開始

「私は木下優子。彩斗の妻よ」

「私は西行寺幽々子。ここ白玉楼の主よ」

「私は魂魄妖夢。白玉楼の庭師をやってます」

「優子ちゃんに幽々子さん妖夢ちゃんね。よろしくね」

それぞれ自己紹介を終わらせる

「……………で彩斗、優子ちゃんが妻ってどっいっしょとっ」

剣がそう聞いてきた

「ああ。俺達結婚するんだ」

「おめでとー。まだ若いのにねー」

「ありがとな……………」

そんな中、ようやく宴会の時間になる…………

続々と幻想郷の住人が集まってくる

俺は優子と別室になり正式な袴に着替えた。

「彩斗、そろそろ出るよ」

「わかった」

文姉に言われて、僕は特設された舞台に出る

「皆さん、今日はこの白玉楼に集まって感謝するわ」

普通ならざわつくのだが、今日は静かめである。

「今日は花見と同時に結婚の宴を開催するわ」

その言葉でざわめく皆。

「では、新郎、射命丸彩斗に出てきてもらいましょう」

僕は舞台に出た。

そこには鬼やら吸血鬼とか天狗とかもうなんかいろいろいた

「続いて新婦、木下優子に出てきてもらいましょう」

舞台に出てきたのは着物で奇麗に着飾った優子であった。

そんな姿に、見とれてしまう………

「どうしたのよ？彩斗」

少し首をかしげる仕草がとても似合っており、可愛い………

「な、何でもねえ／＼」

今回ばかりは目をそらしてしまった

「では、誓いの言葉を」

幽々さんにそう言われ、僕は言葉をつなぐ

「射命丸彩斗は木下優子を永遠の妻とすることを誓います」

「アタシ、木下優子は射命丸彩斗を永遠の妻とすることを誓います」

「では、誓いの接吻を」

やっぱやらないといけないのか……………

「変なことしないでよね」

優子がそんなことを言ってきた。失礼な・・・場所くらいはわきまえるぞ

「そっちこそ」

そして優子は目を瞑り、俺は優子に近づいていく

チュッ

軽いものだが、幸せ感が自分の中で漂う

そして沸き立つ会場

「さあ、二人の祝福とともに春の宴会を始めます」

ようやく始まってそれぞれ好き勝手に行動している

俺は優子と指定席で少しずつ酒を飲んでいた

「優子、酒のほうは大丈夫か？」

「うん。なんとか行けそう」

初めての酒だもんな。気をつけないと・・・貞操とか

いやまで、優子ならささげてもいいんじゃない？

そう考え耽っていると慧音さんが妹紅さんと一緒にこっちに来た

「彩斗、おめでとう」

「彩斗、おめでとうね」

2人からの言葉が胸にしみる

「ありがとう、慧音さんに妹紅さん」

「しかし、あの子供がもうこんなになっただけ・・・」

「妖怪だけど早いねえ」

この2人も幼いころやあの3年間にお世話になっている

「まあ俺は特殊ですからね」

「はは、そうだったなでは、またな」

「お幸せにね」

そう言って去っていく2人。

その後この調子で守矢家、マーガトロイド、幽香さん、地底メンバー、命蓮寺メンバー

山の皆さん、竹林の皆さん、天人つてのもきた

能力はさとりとイナバさんの能力が新たな適性となった。……  
何が違うんだろうか

そうそう、にとりが新しいカメラくれた。これで優子をさらに可愛く撮れる♪

「残ってるので来そうなのは霊夢と紅魔館メンバーと萃香か……」

「彩斗、さすがに疲れたわ」

「もうちょっとだ、頑張れるか？」

「うん」

連続で人が来てお互いに疲労がたまってきた

「彩斗、おめでとう……。ってどうやらお疲れのようね」

「咲夜さん、ありがとう」

咲夜さんの隣にはレミリアさんと美鈴さんがいる……。アレ？後ろに見かけない顔が……

「レミリアさん、後ろにいるのは誰ですか？」

「ああ、そう言えばお前は知らなかったな。私の妹のフランドールだ。ちょっとわけありで今まで外に出れなかったんだが……」

「へえー俺は射命丸彩斗。よろしくな」

「木下優子です。よろしく」

「うん。よろしく」

にしても、レミリアさんに妹がいたのか……

「それにしてもお前が結婚とは……これだから生きているのは面白い」

カリスマモード(?)のレミリアが言う

「俺も2年後くらいだと思ってたんですけどね」

「それでも祝福するには変わらない、咲夜。アレを」

「畏まりました。お嬢様」

といって咲夜さんはワインボトルを持ち出す

「長年温めておいた秘蔵のワインだ。これを送ろう」

「いいんですか？」

レミリアさんが贈り物って珍しいな

「ああ。二人でゆっくり飲むといい」

ワインを渡すとレミリアさんは去っていった。

「……………いい人達だね彩斗」

「そうなんだけど……………まあいいか」

なんか引つかかるな……………

あとレミリアさんと美鈴さんに適性反応出た。なんかもう……………あれだな

「ふふふ……………元気してるかい？彩斗」

音もなく現れたのは萃香さん

「萃香さん……………お久しぶりです」

「へえ…いい嫁さんじゃない。ささ、一杯やろつよ」

「あ、どうも」 「すみません」

ゴクゴクゴクツプハー

「はいもう一杯」

「あやや、どうも」 「すみません」

ゴクゴクゴクツプハー

「ささ、飲んで飲んで」

「あやや、どうも」 「すみません」

ゴクゴクゴクツプハー

「コラア！！誰でも酒を進めてんじゃないよ！！」

さっきあった地底の鬼、勇儀さんが萃香さんを引っ張っていった

「……………なんだったんだろう」

「……………アタシに聞かれても困る」

そりやそうだ……………あーやばい。酒回ってきた……………鬼の酒は強いからな

「彩兄さん。もうへばったのか？情けないぜ」

「ホントに私を追い詰めたの？」

最後というべきか霊夢と魔理沙がきた。

「鬼の酒になれてねえんだよ。アレはきつい」

「ははは、また萃香のやろーか」

「ああ。勇儀さんに連れて行かれたけどな」

「でも、彩兄さんが結婚とはね……………」

「相手は幻想郷ないの誰かかと思っていたけどまさか外の人間から妖怪になったヤツとは驚いたぜ」

幻想郷内だと妖夢で決定していたな……

「まあいいじゃねえか。俺はこいつが気に入ってるし、こいつも結構強いんだぞ」

「へえ……どのくらい？」

疑り深い目で霊夢が言う

「妖夢を速攻で蹴散らした」

「マジかよ……そいつは一回やってみたいぜ」

妖夢って結構強いほうだったのか……

「……彩兄さんその西洋酒はどうしたの？」

霊夢がワインボトルを指さして言う

「レミリアさんからもらった。二人で飲めって」

「あのレミリアがそんなことを……」

魔理沙がそう言うが、普段のレミリアさんをあまり知らない俺にとっては比較しようがない

「それ——まだ開けないの？」

霊夢がそれ飲ませてっていう目をしてくる

「そうだな。……………優子。このワインあけるか？」

「うーん……………むにゃむにゃ……………」

寝てるし……………カメラで撮っていこう。連射で……………パ  
シャ×100

……………にとり。やりすぎじゃないか？

「悪いな。優子が寝てしまったからまだ開けない」

「そう……………残念ね」

「また機会があつたら一緒に飲むか。じゃ、俺は優子と一緒に引つ  
込むから」

「うん。またね」

「今度来た時は弾幕ごっこしようぜ」

「ああ。次は夏だろうけどな」

霊夢と魔理沙と別れて俺は白玉楼の中に優子を連れていった。

以前俺が使っていた部屋は今も妖夢が使っているためその隣の部屋  
に布団を敷いて

優子を寝かす

「お———つと」

酔いがかなり回っており、バランスを取れずに優子のほうに倒れてしまう

倒れた目の前には着物がはだけた優子の姿があり自分の中の欲望みたいなのが込み上げてくる

「……………やめだ。せめて添い寝にしよう」

俺は感情を抑えて立ち上がろうとしたら手をつかまれた。

「……………なんで離れるかしら？」

「……………お前は俺に襲われたいのか？」

「……………彩斗なら……………別に……………構わないわよ／／／／／／／／」

マジですか……………酒が入っているといっても記憶が飛ぶほどでもない

「……………夫婦なんだしこのくらいのことやらないうねっ／／／／」

照れ隠しのように言葉をつなぐ

そして……………ダメ押しの一言

「ねえ．．．．．アタシじゃ駄目なの？」

「そんなわけない。でも本当にいいのか？」

「うん。初めては彩斗に挙げる」

「そう．．．．．だな。俺たちは夫婦だもんな」

自分でもそうきめつけるように考える。優子は認めてくれているが保身を作っている

そうして――お互いに肌を重ねあつた．．．．．

翌朝．．．．．

宴会の次の日は皆朝が遅い。

二人が寝る布団には血が付いているが、誰も気づかない。一部の者を覗いて．．．．．

「……………」

宴会のかたづけを霊夢に手伝わされていた妖夢は黙って布団を取り換え――

その場を去った。幸せそうに抱き合って眠る二人の間に他の者は入

り込めないとしても

言いつつに.....

## 第14話俺と優子と婚約発表!!?(後書き)

寒さで凍える右手を必死で動かした・・・第14話投稿です。

今回は15禁要素が多いですが・・・まあ気にせずに^^

今思えばバカテストやってなかったですね。

気が向いたらどこかで一気に載せます・・・そう気が向いたら・・・

・・・  
ここ3話分ほどかなり長めでしたが大丈夫でしたか？

誤字とかかなり多くなってきているのでご指摘お願いします  
ではまた次回ノ次はバカテストをはさむか清涼祭編です

## バカテストi n ー 卷 (前書き)

1 1 / 3 0 修正しました。

## バカテストi n ー 卷

化学

問 以下の問いに答えなさい

『調理のために火にかける鍋を制作する際、重量が重いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題点をマグネシウムの代わりに用いるべきの金属合金例を一つ上げなさい』

姫路瑞樹の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目というひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても

射命丸彩斗の答え

『あたまがいたい』

教師のコメント

大丈夫ですか？そう言えば試験当日何故かお酒の匂いがしましたけど……

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい

『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（２）悪いことがあったうえにさらに悪いことが起きる喩え』

姫路瑞樹の答え

『（１）弘法も筆の誤り』 『（２）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』

（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね

土屋康太の答え

『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね

吉井明久の答え

『（２）泣きつ面蹴ったり』

君は鬼ですか

射命丸彩斗の答え

『（１）天狗の空流れ』

『（２）泣きつ面にS』

教師のコメント

わかりにくいです。（２）はどういう光景でしょうか？

バカテスト英語

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is bookshelf that my grandmother had used regularly」

姫路瑞樹の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

吉井明久の答え

「 ● ♪ ×

」

教師のコメント

できれば地球上の言語で

射命丸彩斗の答え

「・・・・・・・・・・・・・・・・ばあちゃん元気かな」

教師のコメント

感慨にふけていますが、不正解です。夏休みあたりに里帰りでも  
してみてもうでしょうか？

バカテスト数学

問 以下の問いに答えなさい

『 (1)  $4 \sin X + \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一  
証言に存在する  $X$  の値を一つ答えてください。 (2)  $\sin(A +$   
 $B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$  の中から選りなさい。  
 $?$   $\sin A + \cos B$   $?$   $\sin A - \cos B$   $?$   $\sin A \cos B$   
 $?$   $\sin A \cos B + \cos A \sin B$  』

姫路瑞樹の答え

『 (1)  $X = \pi / 6$  (2) 4 』

教師のコメント

そうですね。角度を『 $^\circ$ 』ではなく『 $\pi$ 』で書いてありますし、完  
壁です

土屋康太の答え

『（１）×』およそ３』

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません

吉井明久の答え

『（２）　およそ３』

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです

バカテスト物理

以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい  
『光は波であつて、（　）である』

姫路瑞樹の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答はいつも先生の度肝を抜きます

射命丸彩斗の答え

『かめはめ波』

教師のコメント

先生もドラゴンボールは好きです

バカテスト科学

以下の問いに答えなさい

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞樹の答え

『 $C_6H_6$ 』

教師のコメント

簡単でしたね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は科学をなめてませんか？

吉井明久の答え

『 $B-E-N-Z-E-N$ 』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように

射命丸彩斗の答え

『 $C_6H_6$ （いい感じの面白い答えが思いつきません）』

教師のコメント

真面目にやってください。

バカテスト生物

以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞樹の答え

『？脂質　？炭水化物　？たんぱく質　？ビタミン　？ミネラル』

教師のコメント

さすがは姫路さん。優秀ですね

吉井明久の答え

『？砂糖　？塩　？水道水　？雨水　？湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです

射命丸彩斗の答え

『？脂質　？炭水化物　？たんぱく質　？ビタミン　？優子』

木下優子の答え

『？脂質　？炭水化物　？たんぱく質　？ビタミン　？彩斗』

教師のコメント

君たちが仲がいいということはよくわかりました

バカテスト日本史

以下の問いに答えなさい

『645年中大兄皇子は（ ）とともに蘇我氏を倒した。これを大化の改新という』

（ ）の中に正しい人物名を入れてください』

姫路瑞樹、射命丸彩斗の答え

『中臣鎌足』

教師のコメント

正解です。とくに言うことはありません

土屋康太の答え

『藤原鎌足』

教師のコメント

まともなミスで驚きました。藤原氏が栄えたのはもっと後の時代です  
ね

吉井明久の答え

『生ごみの塊』

教師のコメント

もはや人ですらないです。でも発音が似ているところがなんとも言  
えません。

## バカテストi n ー 卷 (後書き)

気分が乗ったのでバカテストです

清涼祭の間だけはちゃんと合わせていきたい・・・

ということでは明後日からテストです

時間ができるとみるかなくなると見るか……

## 第15話俺と優子と清涼祭その1

学園祭の出し物を決める為のアンケートのご協力ください

『あなたが今ほしいものは何ですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトや明久君との思いで』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物がい  
いかもしれませんか。吉井君との関係も校内新聞で見ました。頑張  
ってくださいね

土屋康太の答え

『Hな本（取り消し線有）成人向けの写真集』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょいか？

吉井明久の答え

『カロリーー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます

射命丸彩斗の答え

『優子との思い出と初めての清涼祭の思い出』

教師のコメント

そういえば、君は去年の2学期に転入したのでしたね。初めてでわからないこともあるかもしれませんが頑張ってください。あと木下さんとの関係についてですが、節度をちゃんと守ってくださいね

新緑の目が芽吹き始めた季節となった

文月学園では『清涼祭』の準備が進められていた。

S i d e   A y a t o

他のクラスが清涼祭の準備を始めている中、俺達Fクラスは何もしていないかった

「・・・・・・にとりの野郎、また変な機能つけやがって」

クラスの大半の奴が外で野球をしているが、俺は教室に残り、

カメラの整備をしていた。

「・・・・・・ノンフラッシュサイレンサー5秒で10000枚連続撮りなんてどこで使うんだよ」

カメラが一回壊れたのでにとりに整備を頼んだら毎回こっぴどいふうで改造されて帰ってくる。

「ん、他の皆はどうした？」

カメラの整備していたらFクラス担任の西村先生、通称鉄人が教室に来た

「みんな外にいました」

「そうか、あと射命丸。新聞部はカメラ保持が認められているから  
といって授業中使っていたら次から没収だ」

「はい」

なんだかんだでカメラ保持は認められている。……部長が  
妖怪学園長に直訴したらしいし

しばらくすると鉄人が外にいた全員を連行してきた

「さて、そろそろ春の学園祭『清涼祭』の出し物を決めなくちゃい  
けない時期が来たんだが————とりあえず、議事進行並びに  
実行委員として誰かを任命する。そいつに全権ゆだねる」

野球から帰ってきたFクラス代表の雄二はいきなり全権放棄しやが  
った

雄二はクラスメイトを見渡して

「んじゃ、学園祭実行委員は島田でいいか？」

実行委員をなんともテキトーに指名した

「え？ウチがやるの？うーん……ウチは召喚大会に出るからち  
よっと困るかな」

「雄二、実行委員なら瑞希が——やらないほうがいいね」

「そうだな。少しはバカが治ってきてるじゃないか」

いや、それは違うぞ。明久は姫路の性格を理解しただけだ、雄二

「え？何ですか？」

「それは……瑞希だと全員の意見を丁寧に聞いているうちに日が暮れちゃうから」

確かにそうだな。少数意見を切り捨てようとしないだろう

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

……いつから明久呼び方変わったっけ、島田は。

「え？そうなの？」

「あんなもの見せに出るとはお前らモノ好きだな」

文月学園は世論に左右されるからな。こういうときに点を稼いでおくんだろう

……紫姉さんに言えば世論なんて崩れ去るのにな。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。なんでも、お父さんを見返したいって言うてきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家でいろいろ言われたんだって『Fクラスのことをバカにされたんです！許せません！』って怒ってるの」

「瑞希が起こるなんて珍しいね」

嫉妬モード（要はヤンデレ化）はよくなるが……

「だって明久君のいるFクラスの皆のことを何もわかってない癖にFクラスって言う理由だけでバカにするんですよ？許せませんっ」

「姫路、それは明久がバカにされなければ他はどうでもいいとでも言っているようにも聞こえるぞ」

「え？そ、そうですか？／＼／」

駄目だ、あまりにも俺たちと一緒にいた時間が長くて自分たちを鏡にしたような状態になってしまってる……。簡単にとバカップルだ。俺と優子に関してもバカップルなことは否定しない

「だから、Fクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻を明かそうってワケね」

「それはいいんだが、なんで島田なんだ？てっきり明久かと思ったけど」

「今回は明久君に頼らないって決めたんですっ。いつもいつも明久君に助けてもらってるから…」

これは成長とみていいのか？

「瑞希・・・・・・・・そんなこと気にしないでいいのに・・・・・・・・」

「明久君、たまには私を頼ってください」

「瑞希・・・・・・・・」「明久君・・・・・・・・」

どこのラブコメしてんだ。いいムードだけでも・・・・・・・・

『吉井コロス。吉井コロス。吉井コロス』

Fクラスの行動力（嫉妬心）が活発になったきたな・・・

「よし、さつき吉井コロスといった奴、全員首だせ。俺が直々に処刑してやるう」

そう言つて刀（真剣）を取り出す

『すみませんでしたあああああああ』

ホントこいつら扱いやすいな

「明久、進めていいか？」

「あ、ごめん雄二。あと彩斗も始末ありがと。で、美波が実行委員になるって話だったよね？」

「だから、ウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

「なら、サポート役を選んだらいいだろ？」

俺は男子どものほうを見ながら言う。声には出してないが、期待と欲望が入り混じった目をしている

「んゝ．．．そのサポート役次第でやってもいいけど」

「そうか。では皆に候補を挙げてもらってその中から決めよう」

『俺がやる』

『俺がやる』

『俺がやる』

『いや、俺が．．．』

そう言つて雄二、明久、俺、秀吉（戸籍上）以外の男子全員手を挙げた。

．．．．．オチは見えているけどな

だからここは生贄をささげようか。

「（おい、明久。ここで手をあげたら姫路に男らしいところ見せるぞ）」

「（いや、もうオチ見えてるし）」

バカ（明久）でも気付いていやがったか。だがここまでだ

「（ホントにそれでいいのか？ならばこの写真は姫路にあげようか）」

俺が持っていたのは明久が幼稚園の頃の女装写真

「（なんで彩斗がそれを持ってるのさ！！？）」

「（俺の情報網に穴はねえ）」

「（そう言う問題じゃないよね！！？）」

はぁー、こいつは文句ばかり言っ

「（仕方がない、これは康太にあげて高値で売ってもらうか）」

「（それだけは~~~~~）」

「（なら、手を挙げる。友達を信じれないのか？）」

「（.....わかったよ）」

この間も『俺がやる』コールは続いている

「僕がやる！！！」

『どっぞどっぞ~~~~~』

「彩斗！！やっぱりこうなったじゃないか！！！」

「だからお前はB A K Aなんだ」

「でも、明久君カッコいいですっ」

「まあ瑞希が言うなら……」

姫路の一言で請け負った明久。

よし作戦成功「グッ」「グッ」

クラス全員が返してくる。実はクラスメイトは全員グルでした。ハイ

「じゃ、後は任せたぞ。ふあゝ」

雄二はホントにやる気がないようだ

「ウチは議事進行やるから、アキは板書お願いね」

「ん。了解」

ぼろぼろの黒板の前に明久が立つ。チョークあったのか……

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる？」

「はい、土屋」

「……（スクツ）写真館」

「……………土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

その通りだ。

【候補？ 写真館 『秘密の覗き部屋』】

……………このネーミングセンスには脱帽だな。ちゃんと的を得てる

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶———といたいけど、さすがに使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶？それってどういうの？」

「普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ」

……………男の割合考えてるのか？こいつ。着れるのは姫路と島田、性別無視で秀吉

ただぞ。……………俺の変化なしなら

『斬新ではあるな』

『憧れる女子也多そうだ』

『でも、ウェディングドレスって動きにくくないか？』

『それに、男は嫌がらないか？人生の墓場、とか言うくらいだしな』  
そんな声が飛び交うなか明久が板書をする

【候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』】

・・・・・・・・・・・・・・・・斬新なネーミングセンスだ

「さて、他に意見は——はい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

またコスプレか・・・・・・・・って確かこいつは中華料理オタクのはず  
(彩花帖調べ)

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていつの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は——」

長くなりそうだ、時間早くしよう。

「——以上だ」

ようやく終わったか。明久が板書をしようとしていた。

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパアン』】

中華と洋風どっちだよ・・・・・・・・そして和風は無視か。それでも曰  
本人か。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

鉄人が教室に入り言う。そして黒板に板書されたものに目をやった

「……………補習の時間を倍にしたほうが良いかもしれんな」

「西村先生、これは明久のネーミングセンスの問題です。補習では美術的なセンスは何ともならないでしょう」

『そうです！これは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

ここでも明久が生贄にされた。

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！」

鉄人が一括して静まりかえる教室。

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だといっているんだ！」

アンタ、それでも教師なのか？

「まったくお前たちは……。少しはまじめにやって稼ぎで設備を向上させようとは思わないのか？」

『そつか！その手があったか！』

『何も試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな!』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ』

「み、みなさんっ頑張りましょう」

鉄人の一言で活気つく教室。その中に姫路が入ってるのは意外だった。

『出し物はどうする? 利潤の多い喫茶店がいいんじゃないか?』

『いや、初期投資の少ない写真館のほうが』

『けど、運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

意見が飛び交い始める。全員が主張して收拾がつけられなくなってしまった

『中華喫茶ならはずれないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だとその特徴のなさは致命傷じゃないか?』

『ウエディング喫茶はどうだ?』

『初期投資が大きすぎる。たった2日間の清涼祭じゃ儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

見事にまとまりがなく活気ついてくれたな………

「はいはい！静かにして！」

島田が注意するも無視される

『お化け屋敷のほうが受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きトウモロコシを売ろう』

どどんばらばらになっていく………

さすがにヤバいから納めるか………

スキマオープン、サクサクサクサク

意見を言っている男子生徒全員の前に刀（切れ味最高）を落とす

「テメエらもうちつと島田の言うこともきけや、一応実行委員だろ  
う」

『承知いたしましたあああ』

刀を落とされた全員土下座を始める。このクラスならオリンピックク狙える運動神経があるんじゃないかと思えてくるな

「じゃ、この三つの中から一つを選んで手を上げること！いいわね

「！」

静ませたクラスに決を採りに行く島田。意外とリーダーシップがあるようだ

「それじゃ、写真館に賛成の人！——次ウェディング喫茶——最後中華喫茶！」

そして、挙手された人数を集計する・

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

中華オタク（仮）の須川が立つ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（スクツ）」

「康太、お前も料理できるのか？」

「・・・・・・・・紳士のたしなみ」

ダウトだ。どうせチャイナドレスの見たさで通っていたんだろう

まあ康太なら大丈夫だろう

「まず厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まって」

いつ、明久はホール班のトップになったんだ？

「それじゃ、私は明久君のいるほうで」

「うーん。僕は両方やるかもしれないから、瑞希はホールお願いできる？ 数少ない女の子だし」

「わかりました、でも少しは厨房にもいかせてくださいね」

自然にホール班にいった姫路。

だが、明久の本音は姫路の機嫌が悪くなった時——主に明久  
関連——に発動する

デスクツキングの防止だろう……

『明久、ある意味よくやった』

『明久、グツジョブじゃ』

『……………（コクコク！）』

その破壊力を知っている秀吉、康太、俺が明久にアイコンタクトを送る

「……………アキ。ウチは厨房にしようかな？」

島田が嫉妬モードに移行しつつある……………ここは下げないとデスクツキングが……………

「うん。適任だと思う」

あっさり地雷踏みやがって何やってんだコイツ。

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、それは宝の持ち腐れだ。お前は戸籍と見た目の性別が違うんだからな。そこは自覚しろ」

「そうだよ、秀吉。男でもそこまで可愛いんだからもちろんホールに・・・・・・・・・・みぎやあああっ！み、美波様！折れます！腰骨が！」

「美波ちゃん・・・・・・・・何やってクレティルンデスカ？」

姫路がトリップしちゃった・・・・・・・・どうしょ

「ヒッ・・・・・・・・ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

そして、島田のトラウマに触ったようだ・・・・・・・・

「・・・・・・・・美波もホールでいい？」

「・・・・・・・・うん。そうする」

こんな力オスな状態で大丈夫なのか？

それでも清涼祭の幕はあける・・・・

## 第15話俺と優子と清涼祭その1（後書き）

すごく時間が空きました。第15話投稿です。  
いやー、実はテスト勉強が・・・「違っだろ」おろ、彩斗じゃないか

彩「久々に来たぞ。紫姉さんからの命だけど」

それはご苦労なこった

彩「それはそうと、お前更新サボってオンラインゲームやってただろっ」

HAHAHA・・・ナンノコトヤラ

彩「『なんでばれたあ!!?』・・・かそれは紫姉さんが見張ってたからだ」

そっぴゃお前心読めるんだっとな。

彩「それに、ある日は風呂に入っただけのまま寝て、起きて時間確認したら朝の4時だったらしいじゃないか」

ああ、あれは俺もびっくりしたぞ。

てか、それは関係なくね？

彩「気にするな。じゃあな」

いや、気にするなって――行っちゃった。

これは仕返しに女装でもさせるかな・・・

ではまた次回ノ

## 第16話俺と優子と清涼祭その2

Side Ayato

HRが終わって放課後、優子が「先に帰っておいて」と連絡がきたから秀吉と下校することにした

本当に2人は似ているから秀吉は優子がいなくときの代わりとして重宝している

「…………最近彩斗からは姉上の代わりとして扱われているのは気のせいじゃろうか？」

「そんなことない…………（はずだ）」

「そうかの…………」

危ない、バレルとこだった。優子も秀吉もこういうところはなんか鋭いんだよな

しばらく歩いていると島田と明久が何やら話しこんでいた

「誰が雄二なんかと！だったら僕は断然秀吉のほうがいいよ！」

偶然通りかかった俺たちにそんな言葉が聞こえてくる

……………よし、たまたま録音されてた。姫路に送ろう。

「……あ、明久？」

秀吉の動きが止まり、顔を赤らめていく

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなこと言われても、ワシらにはいろいろと障害があると思うのじゃ。その、ホラ。年の差とか……」

性別の間違いだろう……まあそれはほつといて、姫路に電話つと

「……おう、姫路か？ちよつと面白いものが手に入つてな。どうだ聞いてみるか？」

「……そうか、じゃあ……そうだな体育館裏で待ち合わせだじゃあな」

「ひ、秀吉違うんだ！ものすごい誤解だよ！僕には瑞希がいるんだよ！あと彩斗、何その怪しげな会話は！瑞希になに言ったの！！？」

騒がしいな……一人で何言ってるんだコイツは。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？あ、うん。そう言うことになるかな」

「なんとかできないの？このままじゃ、喫茶店が失敗に終わるような……」

そこまでして雄二を引っ張り出そうとするなら……何かありそうだな。

変化さとり（服の中に第3の目）

ほー、そーなのか！

確かにこれは深刻だな。

「島田、さつさとホントのこと言ったらどうだ？何かあるのが見え見えなんだが」

「う、うん。わかった。本人から口止めされてたけどね……」

一呼吸おいて続ける

「実は瑞希が転校するかもしれないの」

「ほえ？」

明久が間拔けな声を出す

「む。マズイ。明久が処理落ちしておるぞ」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから」

「仕方ないな。起きろバカ」

「PHANTOM DIVE」

右手の3爪を上から振り下ろす

もちろん峰打ちだ

「いったああああああ！！！」

よし起きた。

「彩斗、やりすぎじゃなかるうか？」

「気にするな。昨日BASAR。3のプレイ動画に感化されたわけじゃない」

家康が意外とカッコいいBAS。RA3

「美波！瑞希が転校ってどういうこと！！？」

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれない」

理由は・・・Fクラス環境だろうな。あそこは体弱いやつにとつては地獄のようなものだからな

「理由がFクラス的环境ってことなら学園長に言ったら少しはよくなるかもな」

なんたつて紫姉さんの部下みたいなものだし

「え、そうなの？」

「ああ、ここの学園長とは少し知り合いでな」

「そう、よかった」

安堵して一息つく島田。

「だが、設備は稼ぎじゃないと無理だぞ」

「やっぱそうなるよね。どうにか坂本を引き出せないの?」

「ということだ明久、後は任せた」

これからはお前の仕事だしな

「ちょっと、なんでここで僕に振るの?」

「そりゃ・・・瑞希の彼氏だから」

「いやー／＼／＼」

ここで惚気るな…おつと人のことは言えないな

「まあ、なんとか雄二をたきつけてみるよ。Fクラスのメンバーが減るのもいやだし」

そう言つて、ケータイを取り出して電話をかける明久。

「雄二はなんて?」

「えっと、『見つかつちまった』とか『鞆を頼む』とか言つてた」

それを聞いたとき、雄二（逃走者）VS翔子という構図が成り立つ

ハンター

た。

「大方翔子から逃げてるんだろ。こうなったらアレ使うか」

「彩斗、アレって？」

えー・・・あつた、あつた

「『訪ね人グングニル』」

「・・・・・・」

皆さん沈黙・・・

「グングニルって確か神話に出てくる槍じゃったか？」

「せーかい。さすが秀吉」

「なんでお主が持つてるのじゃ？」

「紫姉さんからもらった」

「・・・」

秀吉まで黙ってしまった。

まあ、いいや、使おう

「そーらよつと」

槍を地面に突き刺す

「雄二はどの方向だア？」

ギイイイイ・・・バタン

「よし、明久、あっちだ」

「・・・うん」

なんか釈然としないけど俺たちは走りだした。

・・・・・・体育館の女子更衣室に

## 第16話俺と優子と清涼祭その2（後書き）

長い間放置してました・・・第16話投稿です

いあー、モンハンが楽しくて・・・恋姫にはまって・・・B A  
S A R A 3の動画見えて…

そんなわけで、恋姫の方のあらすじを考えてみました。

ある呪いを受けて、何度も転生してしまった主人公。

日本の戦国時代が舞台の世界で黒幕を倒したのだが、

転生のとき助けてもらった管理者にある依頼を頼まれた。

管理者の知り合いが管理している外史と呼ばれるところに言ってほしいとのこと

主人公は最後の世界として楽しむことにする。

しかし、それが本当に最後である波乱の幕開けであった――

こんなんでしょうか？

反響によっては執筆開始します

P・S・真恋姫原作は1√のPSP(R15?)買おうか、3√のPC版(R18)を買おうか迷ってる。ちなみに作者は呉派、理由は、蜀〓ぬるすぎて作者には合わないww(演義は蜀派)

魏〓独裁っぽくてなんか・・・ちょっと・・・うん・・・嫌いじゃないけど・・・

呉が残ったwwwwというわけです。

でも3国やってみたい・・・

ということでやさしい方、助言求めますw

誤字、脱字は日にちがたつにつれて多くなるのでご指摘お願いします  
す^-^-

第17話俺と優子と清涼祭3〜学園長は妖怪ババア長〜って言ったら咲夜さんに

Side Ayato

「明久、先行け！俺は人が来ないよう見張っておく」

「わかった！！」

そうして明久は突っ込んでいく……女子更衣室に。

さて、スキマ経由で様子をうかがうかな

『やあ雄二。偶然だね』

『………どういう偶然があれば女子更衣室で鉢合わせるのか教えてくれ』

もつともである

『やだな、ただの偶然だよ』

『嘘をつけ。こんな場所で偶然ないわけが』

あ、優子発見………って更衣室に入ってしまった。やべえ……

「えーっと……あれ？Fクラスの問題児コンビ？ここ、女子更衣室だよな？」

「やあ木下さん。奇遇だね」

「秀吉の姉さんか。奇遇じゃないか」

「あ、うん。奇遇だね。・・・じゃあ覚悟は決まった？」

「マズイ、逃げるぞ明久！！」

「スタアアアアライトオオオオオオオ」

「了解。って雄二早く！！あんなの受けたら死んじゃうよ！！」

これはヤバイ・・・・・・・・

「優子ストップだあああ」

スキマから勢いよく出て、優子にハグ

「ブレイ・・・・って彩斗、何してるの？」

「いや普通に考えろよ。こんなところでそんなもんぶっ飛ばしたらここ崩壊するだろ」

「いや、そうだけさあ・・・」

泣く優子。その時俺は優子の今の状態に気がついた。

上：体操服（半そで、腕露出）下：ブルマ（まだ短パンじゃないらしい。足大量露出）

よって今の状況・・・・・・・・

「お持ちかえり  
いいいいいい  
いいいいいい  
いいいいいい  
いいいいいい  
いいいいいい  
いいいいいい  
いいいいいい  
いいいいいい  
いいいいいい」

力いっぱい優子を抱きしめる

「ちょっと、彩斗！ー！う、いんなと！うで」

優子かああ  
いいよおお  
おおおお

「はーいーいーいー」

ん、なんか言ってるけどいいや。

今の優子の恰好をノンフラッシュサイレンサー10000枚撮りつと

あ、使い道あったな。コレ

さて、優子を堪能したところで雄二達と合流することにしよう。

「よう雄二、どこ向かってるんだ？」

「彩斗か、丁度いい。学園長のとこに行くからついてこい」

学園長……アイツのどこかまア俺も用事あったしな……

「りよーかい」

賞品のとして隠し

『…………こそ…………勝手に…………如月ハイランドに…………』

新校舎にある学園長室ではどうやら会談が行われているようだった

「どうした？明久」

「いや、中で何か話しているようだけど」

「そうか。つまり中に学園長がいるってことだな無駄足にならなくて何よりだ。入るぞ」

むちゃくちゃだなこいつら…………反論しないが

「失礼しまーす！」

ドアをノックして俺と明久と雄二は突撃した

「本当に失礼なガキどもだねえ普通は返事を待つもんだよ」

中にいたのは学園長と…………あのメガネは教頭か。

最近不穏な動きが多いんだよね…………紫姉さんも気をつけろって  
いってたし

「やれやれ、取り込み中だというのにとんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。…………まさか、あなたの差し金ですか？」

「バカを言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうか、学園長は隠し事がお得意のようですから」

アンタが言っつなよ……………

「さっきから言ってるような隠し事なんてないね。アンタの見当違いだよ」

「……………そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」

そういつて、部屋に隅に目を送り、そのまま出ていく。

おー、あそこに盗聴機かー

「んで、ガキども。アンタらは何のようだい？」

「今日は学園長に話があつて来ました」

そういつて交渉を進めていく雄二。

……………なんか途中でクソババアとかババアとか連呼してるが気にしないでいいだろう。

そついや、優子をあのまま放置してきたけど大丈夫かな…………

たまに夜変貌するからな…………アイツは

あーBASA。A3買いてえ・・・・・・・・金がねえ・・・・・・・・（作者の本音

・・・・・・・・

「おい、彩斗帰るぞ」

雄二がそう話しかけてきた。

「ん、話は終わったのか。じゃ、俺はちょっと残るから先帰っててくれ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった」

雄二達が部屋から出るのを確信して俺は教頭が目線をやった隅にく。

「・・・・・・・・なにしてんだい？」

「いや、俺からの話の前にこいつを壊しておくことにしたんだよ」

俺の手には盗聴機。そしてそれを握りつぶす。

「そんなものが・・・・・・・・いつのまに・・・・・・・・」

「犯人は教頭だろうな。紫姉さんからも忠告が来ている」

「確かに教頭は怪しい動きをしてるんだけどねえ・・・・・・・・決定打に

なるものがないのも事実さね」

「……………そうか」

やはりまだ何か足りないのか……………まあそんな時は俺がなんとかするか

「だが、覚えておけ。俺は学園を監視するものだ。変なことをしたら即潰すからな」

そして――

「同時に新聞記者だ。こんなスクープ逃すはずないだろう」

こんないい情報逃すはずがねえ

「そこんとこ、覚えておけよ」

そういつて、学園長室を去った。

優子を迎えに行くとなぜか涙目で隅っこに座っていた。

「……………お持ちかえり♪」

しっかりと連れて帰りました。

第17話俺と優子と清涼祭3〜学園長は妖怪ババア長〜って言ったら咲夜さんに

久々に2日連続投稿♪第17話投稿です

さて、先日話題に上った恋姫ですが……………

どの√かはまだ迷ってますwwwwwwww

呉√か、公孫賛√か、魏（荀イクo r秋蘭が対象）√か……………

ほか、度肝を抜くような√はないのか……………

それはともかく、今回はなんか会話文多め& a m p・省略しまくり  
だったわけですが。

かかった時間が1時間半という手抜きさwwww

はっきり言つとあとがき考える方が難しいです。ハイ

ではまた次回ノ

第18話俺と優子と清涼祭4―清涼祭開幕！！俺たちの武器は刀と能力と無数の

S i d e   A y a t o

P r r r r r r r r r r

「もしもどちらさんですか？」

「ああ、彩斗アタシよ」

「ん、何の用だ優子」

「彩斗とアタシの名前で召喚大会申し込んでおいたから」

「W h y ? 何故？」

「断ったら紫さんと幽香さんと4人で鬼ごっこね。もちろん逃げるのは彩斗1人」

何その無理ゲ。紫さんのスキマで捕獲。優子の完璧な拘束。幽香さんはサド↓死亡フラグ乙orz

だから――

「・・・・・・・・・・・・・・・・承りました」

俺はこうするしかなかった・・・・・・・・命のためにもな・・・・・・・・

学校につき、教室に入るといつもの小汚い教室はきれいに装飾されていた。

「あ、彩斗。おはよー」

「おはー。きれいになってるじゃねえか、明久」

「そうだね。このテーブルは秀吉がつくつたらしいよ」

「へーそーなのかー」

俺はテーブルクロスをめくる。そこにはいつもの段ボールがたんまりあった。

「・・・・・・・・めくられたら終わりだな」

「大丈夫だよ。こんなとこまで見る人はいないだろうし、見てもその人の胸の中にしまっておいてもらえるさ」

「そうですね。わざわざクロスをはがしてまでアピールするような人はいませんよ」

・ 明久と姫路がそういう。それがいるんだよなー。今回ばかりは・・・

内心そんなことを思っていると康太がふと現れた。

「・・・・・・・・・・飲茶も完璧」

「おわっ」

「相変わらず気配消すのうまいな。それもつと極めてみるよ」

「・・・・・・・・・・機会があれば」

乗り気（？）なのは良いんだが、残念なことに幻想郷には隠密系がいないんだった。

恋姫で言う周泰とか、BASARAの佐助みたいなのがいればな・・

「ムツツリーニ、厨房のほうもオーケー？」

「・・・・・・・・・・味見用」

そう言ってティーセットと胡麻団子が乗っている木のお盆を差し出す

「わぁ・・・・・・・・・・おいしそう・・・・・・・・・・」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「・・・・・・・・・・（コクリ）」

「では遠慮なくいただきますかの」

姫路、島田、秀吉の3人が胡麻団子に手を伸ばす

「お、おいしいですー！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし！」

「甘すぎないところもいいのう」

大絶賛であつた。

「お茶も美味しいです。幸せ……………」

「本当ね……………」

姫路の目がトロンと垂れる。顔が真っ赤になる明久。そしてその光景を撮る俺。

「（姫路、明久のさっきの表情の写真、1枚300円で限定販売……………どうだ？）」

「（10ダース買います！！）」

「（まいどー）」

今日もまた俺の懐があつたかくなつた。気が向いたら教室再建費に寄付でしようか。

「それじゃ、僕も貰おうかな」

明久も貰うのか……………

「それなら俺も貰っておこう」

明久と俺が胡麻団子をとる

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎない味わいがとってもいいね」

「そうだな。うまいな」

「それ。私がつくったオリジナルですよ」

そーか、姫路がつくったオリジナル・・・ん、オリジナル！！？

「姫路・・・まさか薬品とか入れてないよな？」

「ふふっそんなわけですよ。明久君にそんなもの食べさせるわけじゃないじゃないですか」

とってもいい笑顔で言い切りました。進歩だな

「あ、雄二おかえり」

「ん？なんだ、うまそうじゃないか。どれどれ？」

雄二が戻ってきて胡麻団子を口に放り込む。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎない味わいがとっても——んゴパツ」

雄二の口から普通じゃありえない音が聞こえた。

「姫路。これはどういうことだ？」

「明久君が坂本君といつも仲がいいのでそのお礼みたいなものです」

目が完全に虚ろになって言い切りました。怖い……………」

康太と秀吉なんか隅っこで震えているぞ……………」

そして、俺は思った――

「姫路、学園祭終わったら会わせたいやつがいる……………」

「ふえ？誰ですか？」

こいつはパルスイのとこ行ったほうがいいと……………」

「六万だと？バカ言え。普通渡し賃は六問と決まって――はっ！  
？」

どうやら、雄二が復活したようだ。三途の川行つたのなら小町が不正請求したのか？

「雄二、足がつつたんだよね？」

「足がつつた？バカい……………」そうだ足がつつたんだ」

雄二はある人物を見て、訂正した。

姫路（ヤンデレ化）に勝るものなし……………」

「明久君も変なことしちゃいけませんよーふふふ……………」

「サー、イエッサー!!」

反射的に敬礼する明久。この瞬間この2人の権力関係がはっきりしたな。

「ところで、雄二はどこに行っておったのじゃ？」

秀吉がさりげなく流れをそらす。

「ああ。ちょっと話し合いにな・・・」

おそらく学園長の件だろう。盗聴機は昨日のうちにすべて撤去した上に紫姉さんが結界張ったからもうないはずだ。話が漏れることについては安心だな

「そうですか。それはお疲れさまでした」

全く疑いを持たない姫路が言葉を贈る。こういう人材もたまには必要だとおもう。

「いや、気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

「ばつちりじゃ」

「・・・お茶も飲茶も大丈夫」

姫路の暴走料理がなければ・・・な

「よし、少しの間喫茶店は秀吉とムッツリーニと彩斗に任せる。俺と明久は召喚大会の1回戦を終わらしてくる」

ん、召喚大会……あつ

「雄二、俺も召喚大会出ることになってた」

「そうか、なら秀吉とムツツリー二だけで頼む」

そう言つて2人の肩をたたく。

「あれ？アンタ達も召喚大会に出るの？」

島田が俺たち3人に聞いてきた。

「うん。いろいろあつてね」

「俺は朝に優子からラブコールという名の脅しの電話が来た……」

「

「彩斗……お前も苦労してんだな……」

「雄二、お前ほどじゃない。単に昨日モフモフしすぎたから話せなかったんだろうな」

でも、アレはよかったな……月1度……いや、週1度やりたい！！

「もしかして、賞品が目的とか……？」

賞品……何のことだ？

「（雄二、賞品ってなんだ？）」

「（お前知らなかったのか。召喚大会の賞品として、如月ハイラン  
ドブレオーブンチケットと白銀の腕輪っていう召喚獣専用の腕輪が  
あるだ）」

「（そーなのかー）」

知らなかったな。でも腕輪のほうは何故か嫌な予感しかないが・  
・・

「誰と行くつもり？」

気がつけば島田が明久を睨んでいた。

「もちろん行くなら瑞希だけど・・・・・」

ガッツポーズの姫路とうなだれる島田・・・・姫路、キャラ変わ  
りすぎだ。

「っと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「うん、わかったよ」

そう言って教室を後にした2人。

「さて、俺も行くか」

優子は現地集合とか言ってたっけな

「えー。それでは召喚大会の1回戦を始めます」

校庭の特設ステージにて大会が行われる。

「3回戦までは一般公開でないので、リラックスして全力を出してください」

立ち会いは数学の木内先生。勝負科目は数学だ

「相手は・・・Cクラスか」

「余裕でしょ？」

「まあそうだな」

所詮、相手はモブだ。

「では召喚してください」

「サモン試獣召喚!!」

相手の召喚獣は西洋の一般兵みたいな装備だ。鎧に片方は剣を、もう一方は槍を持っている

『CクラスモブA&B 数学 125&133』

表示もモブかよ……

「すぐ終わりそうね」

「ああ。それと遊園地行きたいならいつでも連れて行ってやるぞ」

「ば、バレてたの／＼／＼」

「お前は俺の嫁さんだろうが、そのくらいわからなくてどうする」

さつきまでは賞品自体知らなかったがな……

「さて、俺らも召喚だ」

「「<sup>サモン</sup>試獣召喚!!」」

おなじみのデフォルメされている召喚獣が出てくる。

俺のは普段着の袴に六爪。優子は西洋の高価そうな鎧に立派なランスだ

『Fクラス射命丸彩斗&Aクラス木下優子 数学 420&466』

俺は意図的に固定しているが優子の点数は前より上がっていた

「また上がったのか……」

「まあね」

さて、いこうか――

ん、上から紙が落ちてきた・・・？

『彩斗へ

最近東方っぽさがないから今回は弾幕ごっこ風に相手倒しちゃってね」

B

Y作者』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「彩斗、どうしたの？」

「これみる」

「・・・・・・・・まあこれでやりましょ」

しびしびそうすることになった。

「さて、終わらすか」

「さっさと帰りましょ」

「独眼「DEATH FANG」

「模写「マスタースパーク」

俺の召喚獣は妖力弾を出してそれを切り上げで前に飛ばしている。  
高速で

優子のはマスパ連射してます。．．．．鬼畜だ

ダダダダダダダダダダッ

相手に全弾被弾した。

『CクラスモブA&B 数学 0&0』

「勝者、木下、射命丸ペア!!」

「やった♪」

「よかったな」

パシィ

とハイタッチ。

召喚大会の1回戦は難なく突破した

「それと優子、次からはc o o 1にいこうぜ」

「ん、どうしたのよ？」

「明らかな格下にマスパ連打はやりすぎだ」

「．．．．．倒したからいいのよ」

「はあ．．．」

先が思いやられる・・・と思いながら教室に戻った。

第18話俺と優子と清涼祭4―清涼祭開幕!!俺たちの武器は刀と能力と無数の

改めて理解した・・・作者は字の分が苦手だ。第18話投稿ですゝ  
感想に東方世界観の背景を入れた方がゝみたいなお言葉をいただいたので

東方つばさを出してみました。

東方〃弹幕ごっこ。これで間違いないはず・・・  
独断と偏見なのであしからず。

さて、作者の計画中の恋姫の方ですが・・・

原作が入らないと動けません。

原作未プレイで書いているかたいましたら  
どうやってるのか教えてくださいゝゝゝゝ  
ではまた次回ノ

P・S・作者はハーレムが好きでない

第1? 話俺と優子と清涼祭5・文月の光(かがく)と闇(オカルト)

優子と別れ、教室へ向かった。

不意に妖怪の本質を出してみようかと思ったので・・・俺は変化を使つて文姉に変装することにした。

「彩斗・・・つてお主誰じゃ？彩斗によく似ておるが」

早速秀吉が話しかけてきた。

「俺だ、彩斗だよ。ちよつと皆を驚かそうと思って変化してみた。実際客引きにもなるだろ」

「・・・変化つて言うことは、お主は誰に化けておるのかの？」

「実の姉」

「・・・まあいいであろう」

秀吉が何故か目をそらしたように見えたが・・・なんでだろ？

「それより、ちよつと厄介なことになったのじゃ」

ふむ・・・Fクラスに厄介事なんて日常的に存在しているけど、今回はアレか。

「・・・営業妨害か」

「そうじゃ、よくわかったのう」

まあ、盗聴機が学園長室にある時点で大体分かるけどねえ・・・

営業妨害させてるヤツがいるはずだが、やってるやつには精神的に死んでもらうか・・・

「なら、かゝるく対処しますか」

しかし、どこまでやっていいんだ？

気絶から再起不能まであるんだが・・・

「む、あの連中じゃな」

秀吉のさすほうにはクロスで隠していた段ボールをわざわざめくる三年生の二人組がいた。

「マジできたねえ机だな！　これで食い物扱っていいのかよー！」

確かに酷くわざとらしい営業妨害だ。だが・・・

こういうときにこの容姿は使える。

行くぜ優子直伝！？・・・迷技（笑）涙目＋上目使い！！

「お客様・・・私たちがFクラスと知っていて・・・そんなことを・・・必死で準備したのに・・・グスッ」

これなら効果抜群！！・・・のはずだ。

『そうだ！そうだ！』

『料理も美味しいじゃないか！！』

『あいつら味覚死んでんじゃね？』

案の定周りから支援が来た。一部言ってることが普通じゃないが・

「わ、わかった。だから泣くなよ！！」

三年生二人が立ち上がってそう言うてくる。ただしここでは終わらない。

「グスッ・・・なら・・・死んでください」

といって三年生の片割れの懷に刃物（市販のおもちや）で刺す動作で潜り込む。

「っ！！」

「常川っ！！」

二人組は驚愕の顔をしていた。ざまあ

「なーんて、偽物です」

そう言って手に持ってるものを明らかにする。

『ハハハハッ！！』

『嬢ちゃんいいぞー！！』

「どもども」

周りから声が上がったのでそれにこたえる。

「それでは皆様。引き続き清涼祭をお楽しみください」

俺は教室中に響くように言う。

「あと、先輩方、ちよーっとO H A N A S H Iがあるんですが？」

「おい・・・どうするんだよ、夏川」

「しらねえよ・・・お前がなんとかしろ常川」

どうやらこの先輩方は夏川と常川って言うらしい。

「さっさと付いてこい・・・死にてえか？」

おっと、本性が出てしまった。まあ付いてくるなら少々いいや。

「さて、先輩方。誰の命令でこんなことを？」

近くの空き教室で二人に問う。変化状態で。

「しらねえよ・・・」

はぐらかすので強制的に読み取らせていただくことにした。

「ふうん・・・教頭ですか・・・」

俺は一時的に能力の境界を操り、さとの能力を使う。

これはやりすぎたら昔無理やりくつつけた二つの力が暴走してしまうから再々使えないけど

「なっ・・・」

顔に出やすいやつらだ。はぐらかした意味ないし。

「凶星ですねえ・・・」

本来ならルーミアの飯か剣に魂食わせるの二択だが表で殺傷沙汰は遠慮しておきたいので軽い精神攻撃にしますか・・・

「常夏コンビとやら、今回は見逃しますけど・・・次やったら」

一拍

「死んだほうがましって言うくらいの拷問でもしましょうか」

二人の顔が青くなっていく。

「例えば・・・質問一個答えなかったら指一本とか？」

さらには震えだした。

「まあお二人が告白してくれたら、楽なんですけどね」

そう言っただけは教室の扉に向かって歩きはじめた。

「そうそう・・・最後に一つ。・・・学園の間に近づくな、呑まれるぞ」

そして空き教室を去った。

空き教室を出た俺はまっすぐ自分の教室に帰らず、人気のないところに行った。

ひとまず、一旦変化を解く。

「紫姉さん・・・おい、紫姉さん・・・・・・・・クソ年増ア」

どこに反応したかわからないがスキマから紫姉さんが現れた。

「彩斗・・・いい度胸ね・・・」

額に青筋あるし・・・

「なら一回で出てくれ、・・・でこれはどういふことになってる?」

どうせ見ていたのだろう。と思って紫姉さんにさっきの連中について聞く

「犯人はあなたが読んだの通りよ。どうやらここを潰したいみたいね」

「なるほど・・・確かに怪しい動きをしていたな・・・」

俺は学園長室での出来事を思い出しながら言う。

「とはいっても、尻尾さえつかめたらカオルちゃんが後はやってくれるから・・・」

カオルちゃんて・・・学園長のことが。確かにやってくれそうだが

「仮にこうが強行手段に出たら・・・全力でつぶしていいのか？」

「学園の外部の人間なら構わないわ。けどさっきの生徒みたいに操られているのなら、止める程度でお願いするわ」

「ということは大人は多少どうなってもいい・・・ということか」

「ええ、じゃあ頼んだわよ。ここも私の楽園のようなもんだから」

「りょーかい」

そう言って紫姉さんはスキマへと戻っていった。

俺も教室に戻るとしよう。

「彩斗。次の——って文さん？」

一応仕事する時間あるかもしれないと思って再度変化して戻ってきたら優子が話しかけてきた。

「いや、俺だ、彩斗だ。……ちよつと俺のここだけステルス頼める？」

「? いいわよ」

優子がステルス——要はダミーチェック——をかけたのを確認して変化を解いた。

「あら、ホントに彩斗だった」

信じてもらえてなかった……ショックだ。

「そついや、そろそろ二回戦？」

「ええ、今回もさつさと倒すわよ」

「マスパは禁止な」

「ぶう〜」

顔を膨らませて言うてくる。・・・可愛いじゃないか。だがダメだ。

「はいはい、スペカはありにするから・・・一番低いやつのみ」

俺が妥協案をだして俺たちは会場に向かった。

「それでは二回戦を始めてください」

「「「<sup>サモン</sup>試獣召喚!!」「」」」

『BクラスモブC & a m p ; D 英語W 185点 & a m p ; 170点』

『Aクラス木下優子 & a m p ; Fクラス射命丸彩斗 英語W 360点 & a m p ; 400点』

Cクラスよりは点数高いけど・・・問題ない。

「一瞬で決めるぞ」

「任せて!」

『霊符：白色の雪景色』

俺が放ったスペルは相手に向かうにつれスピードが速くなる霊力弾を放つ。

『突風：トルネド』

優子のは・・・FFですか・・・無数の竜巻召喚しやがってます。えげつない。

「ぎゃあああああ」

『BクラスモブC&amp;D 英語W 0点&amp;0点』

何というか・・・圧倒的だった。さすがモブ。弱いな

「彩斗、イエーイ」

ものすつごい笑顔でハイタッチを求めてきた。

「イエーイ」

パシンと乾いた音がする。

いやいや、優子よ。俺は一番軽いやつだったが・・・アレは無理だろ・・・

「優子」

「なに？」

「お前の辞書に手加減というものは？」

「あると思ってるの？」

「ですよー」

「でも、この虐殺劇は続くようです。」

第1?話俺と優子と清涼祭5・文月の光(かがく)と闇(オカルト)(後書き)

皆様お久しぶりです。紅月です。第1?話投稿です

しばらく放置して申し訳ないです><

これからは適度な速度で更新できるよう頑張ります。

実は・・・放置しすぎて彩斗君のキャラ忘r(ry

まあそういう一面だと思ってくださいw

でわ、また次回ノ

第20話俺と優子と清涼祭6・人は反省するもの……しない奴はまるきり切

教室に戻ると何故だか客足は減っていた。

「なんでこんなに客足減ってた？」

「お、彩斗帰ってきたのじゃな。大会はどうであった？」

なんつーか、毎回秀吉が迎えているような……

「優子が竜巻起こして勝ってきた」

「姉上……もう人外認定していいんじゃないだろうか？」

「アイツが人外なら俺はどうなるんだよ……」

秀吉と話しながら教室に入るとなんかちっちゃい子がいた。それを雄二が対応していた。

「あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ」

ん、人探しか？

「お兄ちゃん？名前はなんていうんだ？」

「あう……わからないですけど……バカなお兄ちゃんでした！」

「そうか」

雄二は周りを見渡していた。

『沢山いるんだが』

ごもつとも。

『あの・・・そうじゃなくて・・・すつごくバカなお兄ちゃんだつたんですっ!』

なんだ・・・明久か

『『吉井だな』』

「全く失礼な！僕に小さな女の子の知りあいなんて――」

「あつバカなお兄ちゃんだっ!」

ちびっこは明久に抱きついた。

「えーと・・・キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな年の知りあいはいないよ？」

明久はちびっこを引き離してそう言った。

「え？お兄ちゃん・・・知らないって、ひどい・・・」

おおっ、周りが一気に殺気立った。

「バカなお兄ちゃんのバカあつ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月。一生懸命いろんな人に聞いてきたのに!」

「明久——じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかの？」

「そうそう、バカなお兄ちゃん何だから、きちんと説明してあげないといけないよ？」

上から雄二、秀吉、俺の順で話す。後、明久はこのやり取りだけで何回バカと言われたのだろう・・・

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに——」

シュツ↑何かが明久に近づいた音

ブウウン↑同一のものが殴りかかった音のようだけど・・・ソニツクブーム！！？

「ぐふっ！！？」↑お察しの通り明久の悲鳴。

「あゝきゝひゝさゝくううううん」

そこには悪魔・・・いや死神・・・否、魔王がいた。

「ひ、姫路に・・・島田。どうやら勝ったようだな」

そら見ろ、あの雄二さえ引いてるぞ。

「美波ちゃん。関節技ってこうですかあ？」

「う、うん。あつてと思う・・・」

やべ、これ死ぬんじゃない・・・

「ちょっと待って！結婚の約束なんて、僕は全然――」

「ふええええんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのに――っ！」

「彩斗君、日本刀十本ください。すぐをお願いします」

「イエス、マムッ！！！」

「彩斗！なんでそんなもの持ってるの！！？」

明久黙れ。従わないと・・・殺られる・・・

「ではあくまず一本目えっ」

「瑞希ストップ！！ホントに死んじゃうよ！！」

明久は逃げられない・・・終わったようだ。

「あ、お姉ちゃん、遊びに来たよ！」

するとちびっこがそう言って処刑？を妨げた。そのうちに俺と秀吉は姫路を取り押さえる。

「ああっあの時のぬいぐるみの子か!!」

明久はようやく思い出したようだ。

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ!」

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった?」

「うんうん。それはよかった」

どうやら向こうはかたついたようだっ。

さて、こっちは・・・

「姫路!目を覚ませ!」

秘蔵の対姫路戦術必須品明久寝起き(半目)写真をみせる。

「ふふふ・・・明久君にはこれを――ハッ・・・私は・・・」

なんとか呼び戻せたようだ・・・グッジョブ。明久(の写真)

「とりあえず、小学生がいるんだ。それは家でやれ」

「・・・そうですね。ふふふ・・・」

アレ・・・オレナニカマチガッタノカ?

そう考え耽っていると、ちびっこが姫路にも話しかけたので俺たちは蚊帳の外となった。

「ところで、秀吉。結局アレは誰なんだ？」

「どうやら、島田の妹らしいぞい」

へえ・・・そーなのかー

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

雄二が客の少なさに気がついたようだ。

「そう言えば葉月、ここに来る途中でいろいろな話を聞いたよ？」

「ん？どんな話だ？」

雄二がかがみこんで目線を合わせる。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かないほうがいいって」

ほう・・・そうか。十中八九奴らだな。

「あのクソ野郎ども・・・マジで死にてえ見たいだな・・・」

紫姉さん、奴らを惨殺する許可を・・・

（ダメよ）

はい、無理でした。てか即答もらうとは・・・

「彩斗、どういうことだ？」

雄二以下数名が事情説明を求めていた。そう言えば知らせていなかったな。

「ああ、どうやら三年が営業妨害してるようだ。殺傷沙汰は俺側からしても避けたいから脅しはかけたて引き取ってもらったんだがな・  
・・」

「珍しいな。お前が手を出さないとは」

「その意見にはいろいろ言いたいことがあるが、今回は特別だ。外から来た人に血を見せるわけにもいかねえしな」

学園の人物だけだと・・・Fクラスでは日常的に血が出ている・・・おもにFFF団のおかげで

「そうか・・・なら、探してシバキ飛ばすか」

「結局そうなるのか・・・てか奴らはどんだけ暇な奴なんだよ・・・」

あんだけ震えたのに学習しないとは・・・バカなの？まるきゅーなの？

「ちょっと僕を置いて話を——」

「バカは黙ってる」

雄二と俺の声がシンクロした。このまま飛翔しそうだ。

「ひとまず、二・Fに不利益な噂が流れている。その噂がどこまで流れているか様子を見に行く必要があるってとこだな」

「ああ、ということで秀吉、俺と雄二・・・明久と島田姉妹と姫路は一時抜けることになりそうだが・・・大丈夫か？」

「任せておくのじゃ。ついでに昼も済ませてくると良い」

「そうだな・・・悪いな、秀吉」

「それでちびっ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えつとですね・・・短いスカートをはいた綺麗なお姉さんがいっぱいいるお店——」

「なんだって！？雄二、それはすぐに向かわないと！後で瑞希に穿いて貰うために（小声）」

「そうだな明久！我がFクラスの成功のために低いアングル（これまた小声）綿密に調査しないと！」

そう言つて奴らはダッシュで出ていった。

「アキ、最後なんて言ったのかしら？」

「明久君・・・それくらいいつでもやりますのに・・・」

「綺麗なお姉ちゃんってバカなお兄ちゃんのなんなのですか？」

・ ・ ・ 姫路、あの音を正確に聞き取るとは ・ ・ ・ 人外認定受けるぞ ・ ・ ・

そんなことを思いながら俺たちは後を追った。

「明久、ここはやめよう」

「此処まで来て何を言ってるのさ！早く中に入るよ」

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

俺たちの目的地はとうやらAクラスだったようだ。

優子がいるからちょうどいいや。

・ Aクラス出し物は【メイド喫茶、ご主人様とお呼び！】であるが ・ ・

どっちが立場上なんだろうか ・ ・ ・ 気になる。

ともかく、雄二の大好きな翔子がいるところだ。

・ 女子たちも追いついてなんだか雄二を陥れようとしているような ・ ・

「 ・ ・ ・ ・ ・ !! (パシャパシャパシャ)」

そしてシャッターを斬りまくるコイツ。

「康太。今度連続撮り可能なカメラ使ってみるか？十枚から千超えるものまである。使い心地がよければそのまま使ってもらって構わない。代金としてはさつき撮った優子の写真を全部だ。他のところには売るなよ」

「・・・・・・・・・・乗った」

交渉成立だ。

「ところで、お前厨房は？」

「・・・・・・・・・・敵情視察として（無理やり）抜けてきた」

「・・・・・・・・・・そうか」

さすが康太、というべきなのだろうか・・・

「あれ、ムツツリー二じゃない。何してるの？」

ようやく明久達が存在に気がついたようだ。

「・・・・・・・・・・人違い」

ここでしらばっくれるのかよ・・・

「いや、もうばれただから。ダメじゃない。盗撮なんてしたら撮られてる女の子が可哀想だと——」

「・・・一枚二百円」

「後で話がある——可哀想だと思わないの？」

明久が成長した・・・？以前ならここで注文してたはずだ。なるほど・・・後ろの魔人か。

「・・・そろそろ当番だから戻る」

康太が教室のほうへ帰っていった。

「さてと、ここで立っているのもアレだからさっさと中に入るとしようか」

正直立っているのは意外と疲れるので俺はそう提案を出した。

「そうですね。入りましょうか」

「明久、雄二を確保しておけ。逃がすなよ」

「了解。ホラ、雄二、逃げない逃げない」

「放せえええええっ！！」

雄二が叫びだしているが・・・そこまで嫌なのか？

「それじゃ、入るわよ」

島田が一番で入っていった。

続いて姫路、明久、ちびっこ、俺とはいる。

「・・・おかえりなさいませ、お嬢様にご主人様」

そこには翔子がいた。なんだか雰囲気がどことなく咲夜さんに似ているような・・・

「おかえりなさいませ、旦那様」

おおっ、なんか一名、いろいろカミングアウトしてるぞ。

だが、メイド服の優子はいろいろすごかった。

「チツ・・・」

逃げられないと悟ったのか雄二が舌打ちしながら入ってくる。

「・・・おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

こちらもカミングアウトしていた。

「霧島さん、その調子ですよ」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな」

ちびっこ、その無垢な精神を失わないでほしい。後、姫路・・・お前は何を吹き込んだんだ？

「お席にご案内します」

翔子が先導を始めたのでついていく。・・・なんだかドラクエ見た  
いだ。

「・・・では、メニューをどうぞ」

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー!」

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

「俺は『さくさくワッフル』と『コーヒー』で」

「んじゃ、俺は――」

「・・・ご注文を繰り返します」

遮るような翔子の声。

「・・・『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を一つ、『さ  
くさくワッフル』を一つ、『コーヒー』を一つ、『メイドとの婚姻  
届』が一つ、以上でよろしいですか?」

「全然よろしくねえぞっ!?!」

「あ、可能だったら優子を連れてきてほしい」

言い忘れるところだった・・・危ない。

「・・・わかりました。では食器をご用意致します」

皆の前に食器が置かれ、雄二の所だけ食器ではない実印と朱肉が置かれる。

「しよ、翔子！コレ本当にウチの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ！！？」

「・・・では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

翔子はお辞儀をしてキッチンっぽいところに歩いていった

「あら、彩斗来ていたの？」

翔子と入れ違い程度の差で優子がやってきた。

「ああ、ちょうどよかった。ちょっとじっとしてろよ」

そう言って立ち上がり、優子を後ろからホールドしてそのまま席に戻る

「ちょっと／＼／＼彩斗ってば／＼／」

「気にしない、気にしない」

最近忙しくて不足気味の優子分が～～～

「それでちびっこの言っていた場所はここであってるのか？」

優子を後ろから抱き締めた状態で問いかける。

「うんっ！ここで嫌な感じのお兄さん二人がびくびくしながらおっ気な声でお話してたの！」

ビビりながら大声で話すとか・・・器用だな。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『お、おう。二人だ。ち、中央付近の席は空いているか？』

話の途中で常夏が入ってきた。確かにどこかビビってるな。

「あ、あの人たちだよ。さっきから大きな声で『中華喫茶は汚い』って言ってたの」

『そ、それにしてもこの店はいいよな！』

『そ、そ、そうだな。さっきいった二丁Fの中華喫茶はひどかったからな！』

やっぱりどこかビビってる。

「優子よー。あのまるきゅーどもは始めてくるのか？」

「あふう・・・さっき出て行っただのにまた入って来てるわ。話の内容も同じね」

息が耳にあたったのか変な声が出ているがスルーだ。

「ということだ、雄二。どう動く?」

「そうだな・・・翔子、メイド服を貸してくれ」

「・・・わかった」

といって脱ぎ始めて・・・ってちよまてよ!

「翔子、余りを持ってきてくれ。頼むから・・・」

俺はそう懇願した。だって腕がサブミッションの餌食に・・・

ちなみに今も罵声は(もちろんビビリこみ笑)は続いている。

そして明久が限界に近いようだ・・・

「明久、今は抑えろ。後で潰す時間は用意する」

「くっ・・・わかったよ」

「島田に姫路、後木下姉も櫛とか他の身だしなみ用の物があれば貸してくれないか?」

「はぁ・・・わかりました」

姫路がポケットから小さなポーチを取り出した。

「雄二、これ」

ちょうど翔子が戻ってきてメイド服を渡す。

「おう。すまないな」

「・・・貸し一つ」

「だ、そうだ。彩斗」

「わかった。後で温泉（地霊殿）旅行のペアチケットをあげよう」

「・・・ありがとう。彩斗にはいつもお世話になっている」

「ちょっと待て！それはいろいろやばいぞ！！」

雄二の抗議も声もスル―だ。

「・・・で、誰が着るんだ？」

「決まってるじゃないか」

俺が雄二に問うと自信ありげにかえしてきた

「もちろん明久だ」

「いやああああっ！」

「大丈夫です、明久君はきつと似合いますから」

姫路にホールドされ、教室を連れだされた明久。ご愁傷様だな。

「彩斗は行かないの？」

「ん、今回はパスだ。ほら、あーん」

「あーん」

もきゅもきゅと音を立てて食べる優子を堪能しながら明久達の帰りを待つことにした。

帰還した明久は完全に女装しこなしていた。

そして常夏のところに向かった。

「お客様」

「なんだ？——へえ。こんな子もいたんだな」

「結構可愛いな」

舐めまわすような視線が出ているが・・・対象が男だと知ったらどうなるのだろう。

「足元の掃除をしますので少々よろしいでしょうか？」

そう言つて、常夏の片割れの腰に抱きつく明久。

「くたばれえええっ！」

「うばああー！」

そのまま盛大にバックドロップを決めました。

「こ、この人、今私の胸を触りました！」

めちゃくちゃ言い方だが、グッジョブだ。これで公的に殴れる。

「ちょっと待て。バックドロップするためにそっちが——ぐはあああつ！」

「この公衆の前で痴漢とは・・・いい度胸だな」

そこに俺と雄二が救済役っぽく登場する。

「何を見ていたんだ？明らかに被害者はこっちだろ！」

「黙れ！ゲス野郎。こいつはこのウェイトレスの胸を触ったのは周知の事実だ」

周りの人たちはこいつらにうんざりしていたのか関わることを避けている。

「とりあえず——こんなものでも見てみるか？」

そう言っただけで幻覚を見せる。ひぐらしのトップレベルにえぐいところを自身で体験してもらおう。

「「ぎやあああああああつー！」「」

二人は悲鳴を上げて気を失った。そりゃ、体から（ピー）が出てきたりしてるとこだしな

「雄二、始末は任せた」

雄二には後片付けを頼むことにした。

「わかった。しかし、お前何やったんだ？」

「ひぐらしを体験してもらったんだが・・・やるか？」

そう言うと、露骨に嫌そうな顔をされた。

「遠慮しておく。さて、行くぞアキちゃん」

「了解。でもその呼び方は遠慮願いたい！」

先に出ていく明久と雄二。

遅れて出る俺たちは会計を自然にまかされた。

「お会計は野口英世を一枚か、坂本雄二を一名のどちらかになります」

「坂本雄二を一名で、後樋口さんを雄二と翔子の二人の新婚記念に」

「・・・ありがとうございます」

雄二の値段は翔子の中で千円らしい。

さて、教室に戻って仕事しますか。

「そう言えば彩斗君。明久く——アキちゃんの写真ありますか？」

「一枚三百円」

「十ダース買います」

「毎度あり」

・・・雄二の写真も撮っておくかな。

第20話俺と優子と清涼祭6 - 人は反省するもの・・・しない奴はまるきゅー切

常夏をぼこしてストレス発散^^v第20話投稿です。

いやー・・・ホントいいサンドバックですねーww

心がすっきりしますw

話は変わって。

そろそろ十万PV突破しそうなんで、

さすがに何かやろうと思いました。

とりあえず、主人公の能力について整理しておくにもいいころだと・・・

389

特別企画は清涼祭終了後となる予定です。

では、また次回ノ

最近NARUTOを読んだから影響出るかも・・・？w

第21話俺と優子と清涼祭？ - 燃え上がれ、記者魂 -

3回戦は不戦勝だった。

相手が俺たちの名前を見た瞬間棄権したからだ。

失礼な気もするが・・・楽だからいいや。

「おー秀吉・・・って何故チャイナ服？」

教室に帰ると秀吉がチャイナ服でいた。

「宣伝のために仕方なく着たのじゃ」

よく見ると姫路と島田姉妹も着替えていた。

そして康太が疲れ果てていた。

「康太、何やつたんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・企業秘密」

「なるほど・・・高速裁縫か。さすがだな」

「っ！！？・・・・・・・・何故わかった？」

おっと・・・無意識に読んじまったようだ。

言い訳を考えないと・・・

「・・・顔に書いてあったぞ」

「・・・・・・・・！！（ブンブンブン）」

必死で否定しているようだが俺の目的は達成されたので放っておく。

・・・俺もそろそろ仕事するか

「彩斗、こっちの建て直し手伝ってくれんかの？」

商売道具を取りに行こうとしたら秀吉からの救援要請が来た。

「すまねえな・・・俺には別の仕事があつてな」

「・・・？彩斗、何があるんじゃ？」

俺は荷物の中から・・・光り輝く我が相棒——カメラを取り出す。

「どうも。清く正しい文々。新聞（IN文月）です。早速ですが、Fクラスのホールで一番人気の高い木下秀吉さん。取材お願いします」

秀吉が完全に引いているが気にしない。

「まずは・・・その可愛さの秘訣は？」

「ワシは男じゃー！！」

まだわかってないのかねーこの子は・・・

「貴方は戸籍上男性。世間一般論で女性でしょう?。」

「むむむ・・・で、でもワシは男じゃ!!」

「・・・まあいいでしょう。では、女装の上手な秀吉さん。その秘訣は?」

「日々の役者としての努力かの」

「なるほど。努力の結晶ですか・・・いい話ですね」

「・・・そろそろホールに戻らないといけないのじゃが」

むう・・・これじゃあ、一人二 四回しか質問できないな。

「では、最後に。前月の月間女装が似合う男子生徒の部門で一位でしたが・・・感想は?」

「そんなもののいつの間にあつたのじゃ!!?」

「なるほど・・・驚くほど嬉しいと」

「でっち上げじゃ!!」

「では、今回はこの辺で〜」

疾風の如く消えさる・・・

次は二・Eにでも行ってみよう。

「・・・なるほど。そうですね」

所変わって二・E、テキトーにモブ（男子生徒）を捕まえて取材している。

「そろそろいいですか？」

「ああ、最後に一つ・・・マグマ中林をどう思いますか？」

「マグマ中林・・・？ああ～～」

どうやら誰をさすか伝わったようだ。

「死んでほしいですね。・・・というか存在消したいです」

「なるほど」。はい、ご協力ありがとうございました」

結論、Eクラスは代表ゴミ。

さて、次は二・Dか。

「おお、二・D代表の平賀君。取材お願いします」

「ん・・・僕でよければいいよ」

いい人だ。コレ。

「では、まず出し物は何ですか？」

「見ての通り、普通の喫茶店だよ」

確かに・・・どこにでもありそうな喫茶店だ。

「次に・・・手ごたえはどうですか？」

「うん・・・なかなかじゃないかな？」

「なるほど」。自信あり、と。では、最後に・・・清水美春についてどう思いますか？」

「・・・正直もうすこし自重してほしいね。個人の好みをどうこう言うつもりはないけど」

「なるほど・・・御時間ありがとうございました」

「どういたしまして」

結論、清水は（明久に）隠れた問題児。

次は二-Cだ。

P r r r r、P r r r r r

おおっ・・・電話がなっている。

「もしもし？」

「彩斗？次の試合そろそろだから準備しておいてね」

もう試合か・・・

「あゝぎりぎりまで取材したいからまた電話たのむ」

「はぁ・・・わかったわ」

ブツ・・・

・・・試合めんど。

あゝゝゝうん、あれで行こう。ピ、ポ、パ、P r r r r P r r r r

「もしもし、姫路？俺だ、彩斗だ。実はな・・・今から言う奴を殺つてほしいんだが・・・報酬？話が早い。まず、目標だが・・・そう、Bクラスの奴だ。何？ちょうどFクラスに来ているだと？・・・なら話は早い。そいつらを殺れ。報酬は・・・明久写真集in清涼祭。でどうだ？・・・よし、頼んだぞ」

ブツ・・・ツーツー

最後に少しだけ悲鳴が聞こえたが・・・気のせいだろう。

さて、Cクラスに行こうか。

Cクラスでもモブ（男子）を捕まえて取材をしている。

「なるほど・・・では最後に、ヒステリック小山についてどう思いますか？」

「死ね、あの短気ババア」

「・・・ご協力ありがとうございました」

結論、Cクラス代表・・・権限ZERO

次はBクラスか。

Bクラスもまたまたモブ（女子生徒）に取材している。

「なるほど」。出店自体は成功している・・・っと。では最後に・・・クス根本についてどう思いますか？」

「外道、人類の汚点、女の敵、死ねばいいのに、ついでにその彼女も」

「・・・ご協力ありがとうございました」

結論、Bクラス代表・・・処刑半ば決定。追記、Cクラスと結託できるはず。

さて、次は二・Aか。

「あやや・・・翔子さんちようどいいところに。取材いいですか？」

「・・・かまわない」

「ありがとうございます。では、まず・・・出店のほうはどうですか？」

「・・・売上上々」

「なるほど……。次に、翔子さんは美しいと評判ですが、その秘訣は？」

「……雄二への愛」

「なるほど……。素晴らしいものですね。では最後に……。先月、百合が似合う女子生徒第一位でしたが……。感想は？」

「……不本意。私が好きなのは雄二だけ」

「それほどまで一途なのも、ある意味才能ですね。ご協力ありがとうございました。温泉チケットは混浴にしておきますね」

「……ありがとう。私も彩斗を応援する」

結論、翔子はいいい人。少しヤンデレ気味なだけ。

次は二・Fにもう一回行くか。

というよりは初めの取材は清涼祭関係ないし……

そうしてAクラスを去ろうとしたら優子に呼び止められた。

「彩斗、ちょうど探してたのよ」

「あやや、なんでしょう？」

「……相変わらず記者モードは頭に来るわね」

失敬な。

「そんなことより、先生から伝言。次の試合不戦勝なの。なんでも食中毒らしいわ」

姫路ナイスだ。と心の中でサムズアップ。

「……………そういうことから。確かに伝えたわよ」

「ええ、わかりました」

「……………それじゃ仕事に戻るわ」

終始イライラしかけていたようだが……………今はスルーしておく。

さて、Fクラスに行こうか。

「姫路さん、取材いいですか？」

「えっ！？あ、はい。いいですよ」

「……………取材の前に一言、理性を失って暴走したら先ほどの報酬はなしの方向で」

「……………わかりました」

これで大丈夫だ。安心できる。

「では、まず清涼祭を楽しんでますか？」

「はい。何もかもが新鮮ですが、明久君のメイド服がもう一回みたいですね」

「・・・なるほど。後で脅は・・・頼んでみますね。次に・・・召喚大会にでているようですが・・・商品である如月グランドパークプレミアムチケットが手に入ったらどうするおつもりで？」

「もちろん、明久君と行きます。そしてそのままホテルに泊まって・・・フフフフフフ」

やべ、トリップしてしまいかけてる。

「姫路さーん、姫路さーん。・・・報酬のほうはなしですかねえ」

「はいっ！どんどんお願いします！」

切り替え早え・・・

「では、最後に・・・もし、仮に明久さんが浮気したらどうします？」

「フフフ・・・オカシナ質問ヲ。明久クンガソナコトスル訳ガナイジャナイデスカ」

「・・・仮に、の話ですよ」

仮にという部分を強調させていった。

「ソウデスネ・・・ソナ明久君ハオシオキデスネ。規制事実デモ作ッテシマイマシヨウカ・・・」

「・・・浮気したのが島田さんだったら？」

「二人デ明久君ヲ襲イマス」

「そうですか・・・何というか、凄まじいですね。・・・ご協力ありがとうございました」

結論、姫路は本物のヤンデレ。後、明久が島田 & a m p ・姫路を行くなら私、射命丸彩斗は応援いたします。

・・・そろそろ準決勝だな。会場に向かうか・・・

第21話俺と優子と清涼祭？ - 燃え上がれ、記者魂 - (後書き)

今回は会話文多いです。23話投稿です。

またネット回線が死んでました。

一応復活しましたが・・・いつ死ぬのやら・x・

テスト近いけど・・・勉強にやる気が起きないorz

ではまた次回ノ

追記：東方10話くらい温まったら出そつかなと思ってまふ。

**第22話俺と優子と清涼祭8 - 荒れ狂う殺撃の宴 - (前書き)**

今回は過激なシーンを含みます。  
耐性のない方はご注意ください。

## 第22話俺と優子と清涼祭8 - 荒れ狂う殺撃の宴 -

準決勝開始時刻が近くなったので、俺は優子と合流して会場へ向かった。

「・・・で相手はアンタらか」

「俺達で悪かったなっ!!」

相手は常夏という名の根元（ㇿクス）。

「彩斗・・・さっさと終わらせようよ」

ほら見る。優子が怯えているじゃないか

「まあ、チヨイ待て・・・先輩方、何でアイツに協力したんですかねえ？」

俺は常夏にしか聞こえないように話す。

向こうは話すことを渋っているようだが、すでに筒抜けだ。

「・・・推薦、ねえ」

「っ！またか!!」

また考えを読まれたからかモヒカンが叫ぶ。

「確かに魅力的ではありますが・・・奴が裏切られたときはどうす

るつもりで？」

「そ、そんなわけが・・・」

「ない。とでもいいきれるのですか？」

沈黙する二人。反論はできないようだ。

「まあどちらにしる明日の一面は『教頭の陰謀――暴かれる真実――』  
としましょうか。もちろん貴方達も記事にしますけど」

「・・・・・・・・・・」

二人が話さなくなったので、俺は会話をやめることにした。

「では、準決勝を始めます」

「「「試獣召喚っ！（サモン）」」」」

四体の召喚獣が現れる。

「あれ、彩斗。召喚獣の武器変わってるね」

俺の武器はいつもの六爪ではなく一本の太刀だった。

「俺のはもともと召喚時に武器変更してたからな。点数にもよるが  
ある程度武器が使い分けられる」

「へえーそうだったんだ」

そして遅れて点数が表示される。

『Fクラス射命丸彩斗&amp;Aクラス木下優子  
000点&amp;329点』保健体育 1

『Aクラス常村勇作&Aクラス夏川俊平  
03点&amp;189点』保健体育 2

「なっ！！なんでそんな点数が！！？」

「一般公開って言うから本気を出してみたんだよ」

姫路のためって言うのもあるけどな・・・

「さて、行くか。時よ、止まれ！」

時間を止めて相手の後ろまで行く。

「そして時は動き出す」

時間を動かして俺は二体に攻撃する。

「何でここにいるんだ！？」

常夏はわけがわからないといった感じで戸惑っていた。

その隙に俺は優子の後ろへと下がる。

「Aクラスの先輩でもたまには漫画を読みますよねえ」

俺の召喚獣の足元に円とその中に三角形が描かれる。

「ああ、週刊漫画とかはよく読むが・・・それがどうした？」

「それならこの能力もわかるかと思ってね」

そして召喚獣の体が黒くなる

「ま、まさか・・・あれなのか！！？」

「次はこうだったか？“儀式の準備は整った！！”」

俺は召喚獣の太刀を自分の前に持つきて刃を召喚獣のほうにむける。

「やらせるかつ！その円から引つ張り出せばいいんだからよ！」

ボウズのほうが俺に向かってきた。

やはり、知ってる能力だから対処法をすぐに仕掛けてきたか。

しかし、その攻撃は弾かれる。

「アタシを忘れてもらったら困るよ」

優子がボウズの攻撃を止めていた。

「さあ・・・二人同時に死んでもらうぞ！！」

俺は太刀を自分の召喚獣の心臓に突き刺した

『Fクラス射命丸彩斗& amp; ;Aクラス木下優子 保健体育 1  
00点& amp; ;329点』

『Aクラス常村勇作& amp; ;Aクラス夏川俊平 保健体育 0  
点& amp; ;0点』

相手が複数の場合はダメージが分割される設定があることを考えて  
自分の900点を削った。

それでも十分致命的なようだが・・・

「勝者、射命丸、木下ペア」

「お前らの陰謀は・・・ここで終わりだ」

そう言って俺達は去った。

試合後、優子がFクラスに来るといったから一緒に向かっていた。

「おう・・・また秀吉か。明久はまだか？」

「またってなんじゃ？明久たちはまだのようじゃな」

「じゃ、ちょっとトイレ行ってくる」

俺はトイレへと向かった。

「結構混んでたな・・・思ったより時間がかかった」

俺は急いで教室に戻った。

教室には明久達が戻っていた。しかし、その顔は妙に深刻だった。

「どうしたんだ？皆揃って不吉な顔をして」

俺が少し軽快に話しかけると雄二が答えた

「ああ、実はな・・・ウェイトレスがさらわれた」

「チッ、とうとう手を出しやがったか・・・」

「お前もわかっていたのか？」

「普通わかるだろ、その一人を除いて」

そう言っただけ俺は明久のほうを見る

「え？僕の顔に何か付いてる？」

「・・・バカは放っておこう。それでムツツリーニ、誰がやられたんだ？」

雄二がFクラスの情報網こと康太に状況を聞く。

「・・・さらわれたのはウチのウェイトレス三人＋島田妹と

「たまたまその場にいた木下姉」

「はっはっは？ 康太、優子がさらわれただって？ 冗談はよせ」

「・・・・・・・・すべて真実」

俺は理解できなかった。

何故力を持ったアイツがさらわれた。

力を使えば人間如きに・・・

そこで俺は思い出した。

優子は・・・人前であまり力を使いたがらないことを。

だから・・・非常時でも姫路や島田姉妹がいることで力を使わなかった。

そして・・・俺の中から何かが噴き出した。

「ひやはははははっ！！アイツもドジだなア！こんな時に力を使わないなんてよオ！！！」

「彩斗！お前・・・何を！！？」

雄二が真剣な顔つきで話しかけるが気にならない。

背中からも漆黒の翼が出てきているのも気にならない。

「それで・・・康太。優子の居場所はどこだア？」

「・・・近くのカラオケボックス」

「O〱K〱。読ませてもらった。じゃア俺は行ってくるが・・・お前らはどうする？」

俺は明久達に問いかけた。

「もちろん行くよっ！！」

明久はすぐに答えた。

「よし・・・全員そこから動くなよ」

俺はそういう飛ばし、全員の下にスキマを開けた。

「三名様御あんな〜いつてかア！！」

そうしてカラオケボックスの前に来た俺たち。

「テメエら全員人質だけを連れて行け」

「いや、僕もやるよ！」

明久がそう言うが・・・俺は却下する

「言い方を変えてやろう。まきこまれなくなかったら逃げろ」

「そうね・・・彼の言う通りにしなさい」

そこで四人以外の声が響いた。

「今頃来やがったか・・・スキマア」

「彩斗のほうも・・・完全に暴走してるわね。これじゃ手がつけられないわ」

出てきたのは八雲紫。どうやら俺を止める気だったらしいな

「そもそも・・・アンタ誰だ？彩斗と親しいらしいが・・・」

雄二が疑問をぶつけてくる。

「そうね・・・貴方なら妖怪。で通じるかしら？」

「なるほど・・・そういうことか」

雄二は察したようだ。

「え？どういうこと？」

そしてバカが一人。

「詳しいことは後だ。要するに・・・妖怪とは人食いの化け物だつてことだア。最も、科学のおかげで倒せるけどな」

「それはわかったけど、何で僕たちが巻きこまれるの？」

「・・・彩斗。この子大丈夫？」

紫がそう聞いてきた。

「・・・能力使ってイメージを植え付ろ」

そこまでしてようやくバカは理解した。

「まア・・・そういうわけだア。・・・優子を頼んだぞ。紫」

「わかったわ」

俺は扉をぶつ飛ばした。

「よオ・・・クズども」

「なんだデメエ・・・」

チンピラAがガンを飛ばしてきた

「そろそろ人質を返してもらおうかアと思ってな。ということでは返してもらっからなア」

「なんだとデメエ!!」

無視して話を続けると別の奴が叫んだ

「うるせえな・・・さっさと始めるか。ザ・ワールド！」

俺は時を止めて人質を回収して明久達の前に持っていく。

時を動かした後、チンピラどもは人質がないことに戸惑っていた。

「紫、非難は任せた」

そう言っただけ俺はチンピラに向きなおる。

「テメエ・・・どんな手品使ったかしらねえが、よっぽど殺られた  
みたいだな」

「ハア？何言っただけア？死ぬのはテメエらだろ？」

「生意気言いやがって！！死ねえ！」

チンピラがナイフを出して俺に刺しに来るが、簡単によける。

「ん・・・これは・・・ああ、こうするのか」

俺は目の前に広がるどくろのマークを掴んだ。

「きゅっとしてドカーン・・・だったか？」

すると、チンピラがいきなり口から血を吐いて倒れた。

「ひやははははっ！！さっきのは心臓かア？これは愉しいなア」

「ヤスオ！！テメエ・・・よくもっ！！」

チンピラが束になってくる。少し面倒だ。

「ひやははっ狂符「殺撃狂武剣」!!」

俺は剣をスキマから取り出し、それをむちゃくちゃに振り回す

「ひやはははは。逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる!!」

剣が通った後には弾幕が展開される。

「もう終わりかア？」

気がついたら動いているのはわずか三人だった。

他は死んでるのか、生きているのかすらわからない。気にしようと  
も思わない。

「さあ〜て最後の奴はどこまであがくんだア？」

「やめてくれっ!!命だけは!!」

自分だけ生きようと命乞いをするが・・・それすらも愉快に思えて  
くる。

「はははははは。そんなこと知るかよ」

そう言っただけ俺は頭をきゅっとしてドカーンとする。

「そつだ。これでもできるらしいなア」

俺は恐怖で動けない奴の傷口に手を当てる。

「さアゝて、人間の血を逆にしたらどうなるんだア？」

チンピラは何もしゃべらなかつた。

そのまま能力を行使する。

チンピラは全身から血を噴き出した。

「ひやはははははあ・・・ふう、そろそろ飽きてきたな。消えろ」

俺は最後の奴の首を同時に刎ねる。

そうして・・・高まつた気分が抑えられていく。

「・・・随分暴走したな」

ハイになっていた間の記憶もあるが何故か罪悪感とかがない。

これは妖怪の本脳のおかげだろうか。

「しかし・・・何でこうなったんだ？」

素朴な疑問を口にする。

「貴方・・・気が付いてないの？」

紫姉さんが出てきてそう言う。

「全く。ん〜でも、フランみたいだったな」

俺は吸血鬼の妹を思い浮かべる

「そう言えば・・・貴方はあの結末を知らなかったわね」

「どの結末だ？」

「フランと遊んだ時よ」

「アレはフランが落ち着いて終わったんじゃないのか？」

幻想郷に戻って二年目の出来事のはず・・・

「・・・覚えてないのね。では話しましょうか」

紫姉さんは語り始めた。

「その後、貴方はフランの狂気を取り込んでいたのよ。どうやったのかはわからないわ。無意識に何らかの能力を使っていたのでしょうね」

「そうか・・・」

しかし、自分にそういう能力はあったのか？

その問いはすぐに出てきた。

「・・・ゲットアビリティプログラムか」

ゲットアビリティプログラム。相手の能力を自分のものにしてしまう能力だ。

おそらく“狂気”という能力として認識したのだろう。

「今回は感情でそれが暴走したのよ。それだけは理解して頂戴」

「・・・わかった」

俺は弱々しく返事をした。

「まあ、そのうち狂気を操れるようになってもらっわ。いちいち暴走して大量虐殺してもらっては困るもの。ほらっ、お嫁さんが待ってるわよ」

紫姉さんがそう言うときスキマから優子が出てきた。

「彩斗~~~~っ!! って血の匂いしかない・・・」

「それはそうだろ。返り血浴びまくったからな」

優子はそのまま抱きつくが、血の匂いに嫌そうな顔をする。

「まあいいや。ねえ彩斗。ちゅーしよ」

何やらいつもより甘えてくるが・・・まあ怖かったのだろうと思って気にしないことにした。

「んっ・・・彩斗・・・大好き」

「俺もだ。それよりも・・・早く戻ろう。後で二人でゆっくりした  
らいいからな」

「うん」

俺はスキマを開いて学園へ向かった。

第22話俺と優子と清涼祭8・荒れ狂う殺撃の宴・（後書き）

暴走しますた。22話投稿です。

バカテスで残虐タグつけることになるとはね・・・

それになんか、ストーリーの進行を急ぎすぎた感が・・・・・・・・。

次回はそのまま続けるか、フラン戦の一部を入れるか・・・迷ってます^^；

フラン戦を期待って方。いれば感想の方でお願いします！

第23話俺と優子と清涼祭8 - 狂気の原因 - (前書き)

簡略化した結果がこれだよ！

## 第23話俺と優子と清涼祭8 - 狂気の原因 -

「ちーす、みんな無事か？」

俺はスキマを堂々と開いて学園に入った。

そこには明久と雄二しかいなかった。

「あら？貴方達しかいないのね」

後ろにいた優子がそう言った。

「ああ、今日は早めに帰らせた。あと、そろそろババアが来るころだ」

雄二がそう言った。ってかババア呼んだのか。

「ついでに、お前にも話してもらうぞ。彩斗」

やはりそうなるか・・・

「話すつもりなんだけど・・・面倒だから一度に全員聞いて貰おうと思ったんだよね。しかたがない。康太だけでも来てもらおう」

俺はスキマで康太をご案内した。一応俺の正体を知っているかもしれない奴だからな。

相変わらず無口だった。

とりあえず、着替え中じゃなくてよかった。うん。

「え・・・？何が起こったの？」

代表して明久が疑問をぶつけてきた。対して雄二は動じなかった。

そう言えば雄二は知っていたな。

「それ含めて話すからまずは学園長を待て」

「そうそう、何で学園長がここに来るの？」

「俺が呼び出した。この一連の妨害はババアに原因があるはずだからな」

「あのババア！僕らに何か隠していたのか！！？」

いまさら叫びだす明久。もうちつと察せよ。

まあ、ババアから見たら余計な情報は与えないほうがよかったんだろうが・・・

「やれやれ。わざわざ来てやったのに随分な御挨拶だね。ガキども」

声と同時にババア登場。

「出たな。悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にアタシが黒幕扱いされることになったんだい？」

そんなこんなで会話を進めていくババア＋雄二＋バカ。

辺りを見渡すと暇そうな優子。いまいち状況が理解できていない康太。

そして・・・隅っこに姫路＋翔子がいた。

おそらくバカと雄二を待っているんだろうが・・・

「そこでだ。彩斗。アレはどういうことだ？」

いきなり話を振られた。今どのへんだ？

「えーと、今何の話してるんだ？」

「教頭が黒幕のとこだ。それで何でお前が暴走したか。ってとこだ」

雄二が懇切丁寧に話してくれた。

「あゝ、まず初めに。俺は人間じゃねえ」

「えー！？どういうこと！？」

予想道理の反応をありがとう。明久君。

「じゃあ人間じゃなかったらなんなんなの？」

引き続き質問をする明久。

「半妖だな。一応。その気になれば妖怪にも人間にもなれる。今現在人間だ」

「それで、さっきの変な穴は？」

変な穴・・・？ああ、スキマか。

「アレは能力だ。妖怪なら大抵が持っていて、人間が偶に持っている。ちなみに俺の能力は『自分の適性にあった能力を写し取る程度の能力』だ。要は、大抵のものは使えるってわけ」

「何ソレ強い」

明久よ・・・それは言わない約束だ。

「話がかなりそれだな。それで、あの暴走の原因は狂気だ」

「狂気・・・だと？」

雄二が何か呆れてる・・・

「そう、狂気。俺は文字通り狂ってたわけ」

「それはどうしてだ？」

「直接的には優子がさらわれたから。間接的には紫姉さんが何かやっただろう。あ、紫姉さんってのはあの時の金髪の人」

皆、ああーって感じの顔をしているな。ババアはそれとなく震えているが・・・

「で、紫姉さんがやったことは……たぶん記憶の封印」

「封印か？消すのじゃなくて」

「あの人のめんどいところはそこなんだよね、雄二。俺もだんだん思  
いだしてきた。今から二年前、俺は吸血鬼の館……紅魔館にいつ  
たんだ」

俺は自分も過去に帰るように回想を始めた。

俺は、その館の主、レミリア・スカーレットに仕向けられて地下に  
幽閉されている

レミリアの妹、フランドール・スカーレットと会った。

フランとは会った瞬間に戦闘が始まった。

俺は自分の使える様々な能力を使って迎撃した。

その時のフランは狂気を体全身に宿していてな、

殺し合いを遊びとを感じるようになっていたんだ。

俺はなんとかその狂気を取り除けなかと考えた。そしてある能力  
にたどり着いた。

その力で俺はフランの狂気を取り出したんだが……今度は俺の中  
で狂気が暴れ始めた。

コワセ・・・コロセ・・・

って感じでな。

狂気を抑えるために俺は『一方通行』という能力を封じ込める力に使った。

そのあとのことは覚えてない。気絶したんだろうな。

「・・・って感じで回想終わりだ。何か質問は？」

「狂気を取りだしたある能力ってなんだ？」

雄二がそう言った。

「そこには触れてほしくないんだが・・・この際話しておこう。それは、ゲットアビリティプログラムだ」

「っ！それってあのゲットアビリティプログラム？」

明久が反応した。やっぱり知っていたのか。

「明久の思っている通りだ。紫姉さんは無意識とか言っていたけど、まあ記憶封印したことを限りなく悟られないようにしたんだろうな」

「なるほどな・・・」

雄二がそうつぶやいた。

「残るは、僕たちがどうやって優勝するかだね」

「いや、無理に優勝する必要はないぞ」

雄二がそう言った。

「決勝戦の相手はこいつらだ」

そう言っただけと優子（ねてるし・・・）を指さした。

「そういうことだ。というわけで、問題なし。教頭は俺のほうで始末しとくぞババア。学園に悪影響な奴は消すのが紫姉さんの方針だからな。ではかいさーん」

そうやって無理やり解散させた。なんか聞こえるが知らん。早く帰りたいんだ。

そんなわけで俺は寝ている優子をおぶって帰路についた。

・・・そう言えば、終始康太が空気だったな。

## 第23話俺と優子と清涼祭8 - 狂気の原因 - (後書き)

皆様お久しぶりです。紅月です。

かれこれ2カ月近く放置・ω・

とりあえず最新作です。

うん、短い。適当だ。手抜きだ。

しかし、今の限界であるかもしれないorz

おそらく展開は早くても意味不明な文章はないはず・・・

意味不明な単語はあっても・・・

わからない単語があつたら感想にてお願いします。

ではまた次回ノ

次回はいよいよ決勝戦・・・+αいくかも？

第24話俺と優子と清涼祭―二日目開始!― (前書き)

どうしてこうなった・x・

## 第24話俺と優子と清涼祭―二日目開始!―

「ヒマカツ!」

清涼祭二日目、学校へ登校した俺は雄二と明久を見つけ指をさしてそう言った。

「いや、いまさら相棒ネタとかわからないわよ」

後ろについてきた優子の冷静なツッコミ。

「・・・僕としたことがっ!!」

「もういいから・・・」

とうとう呆れられました。

「二人とも朝から元気だね・・・ふあ~~~~」

大きなあくびとともにそう言う明久。

「そう言えば珍しく早いな。何やってたんだ?遅刻常習犯」

「否定はしないけど、最近は減ってきてるはずだよ。まあ、朝からテストを受けてたんだ・・・」

おお~~~~本気だな。

雄二が半分寝てるのがいろいろ台無しだが・・・

「それで、明久。誰に教えてもらったんだ？」

「瑞希に夜通し——危ないっ!!」

明久がどこもなく飛んできた黒い物体を避けた。

まあ、察しがつくとは思うが・・・何があったかを言うと、

康太が手裏剣投げた。

うん、銃刀法もクソもねえな。てか、手裏剣って剣に入るのか？漢字にも入ってるし。

しかし、遠距離ということから銃って判定も——まあいいや。

「康太。昨日のことがあったんだ。大目に見てやれ」

さらわれてトラウマついてるかもね。主に俺の発狂モードで・・・

「それで、不審者は？」

「・・・・・・いなかった。今のところ異常なし」

「ワシのほうも見当たらなかったぞい」

急に秀吉が会話に入ってきた・・・っていたのかよ。

「あれ？そう言えば・・・何で秀吉と秀吉のお姉さんは別々で来るの？」

ああ・・・それは・・・

「アタシが彩斗の家（幻想郷のほう）に住んでるからよ」

優子がそう言った瞬間・・・

何か黒くて回転するものが飛んできたから・・・

カキイイイイン・・・

おもわず打ち返しちまったじゃないか。

「・・・・・・・・危なかった」

「やはりお前か。俺には通じないぞ」

（悪魔でも先ほどの反射です。一方さんのほうじゃないよ!!）

「おはようアキ・・・って坂本、大丈夫なの？」

そんなタイミングで島田登場。そう言えば雄二が寝てるのを忘れていた。

「そうだな・・・そろそろ起こすか。じゃ、秀吉。頼んだ」

「わかったのじゃ」

さすがだ。いつも教室で一緒なのは伊達じゃない。

秀吉は雄二のほうへ歩いて行き、耳元で何かつぶやいた。

「ぎゃああああ！！俺はそんなことをいった覚えはない！！」

「うるせえ」

俺はスキマからのハンマーで殴ると、ドカ～～ンと言う、明らかにギャグ的效果音が響いた。

「おはよう。雄二君。ちなみにドッキリ大成功」

もちろん例の看板も持っている。

「大成功じゃねえ！！変に目が覚めちまったじゃねえか。このまま寝ちまおうと思ってたのによ。仕方がないから店手伝つか・・・」

そんなこんなで清涼祭二日目・・・開始。

「彩斗～～～～・・・じゃなかった。彩～～「はい。なんでしょう？優子さん」・・・どういうこと？」

さて、時間は進むのが早く、もう試合開始に近い時間となったようです。

まあ・・・変化してウェイトレスしてたら・・・

霊夢、魔理沙、文姉、紫姉さん＋式×2、たまたま休暇で暇そうだったのを拉致られた文姉の部下の桜さんが来客なさりました。

無論、文姉とO H A N A S H Iは避けませんでしたけど・・・

・

まあ、こんな状況だと普通は驚くんだよ。「ちええええええん」

それなのにウチのクラスの連中は・・・「らんしゃまああああああ  
あ」

『巫女さんキターーーー』 『魔女つ子キターーーー』 『金髪美人キターーーー』 『ようじょ・・・ハアハア・・・』

みたいなヤツしかいねえ「ちえええええん」・・・んだ。きちんと  
O H A N A S H Iはしたん「らんしゃまあああああ」・・・  
だけど。

ちなみに、霊夢と魔理沙は食うに集中してる。文姉は取材してる。  
桜さんはきよどつてる。

紫姉さんはなにか状況を楽しんでいるというカオスな空間ですわ。

「それで、優子何か用？」

「あ、そろそろ「ちえええええん」・・・試合時間よ」

「え？マジで？」

時間を見るとすでに十二時半・・・試合開始は午後一時。

「じゃ、すぐ行くか」「らんしゃまあああ」

「うるせえぞ狐野郎！！テメエ何様のつもりだゴラァ！！」

「へぶしっ！！」

よし、悪は滅んだ。というわけで優子と一緒に会場へ向かう。

「彩斗~~~~。どこいくの?」

「試合~~~~。暇なら見に来る?」

「行くよー。めったに見れないし」

最近・・・文姉の口調が変わってる気がするな。

なんか可愛くなってる・・・

弟に結婚を先越されて浮ついてるって噂もあるけどな・・・

まあ、秀吉が真っ赤になりながら文姉のほう見てたから脈ありかな。

そんなことを考えていたら目の間にはもう会場が見えていた。

なんか、係員の先生が手招きしている。よっぽど力入れてるんだな。

『さて、皆様。長らくお待たせしました。これより試験召喚システ

ムによる召喚大会の決勝戦を行います！」

なんか高校野球のアナウンスみたいだな・・・雇ってるのか？

『出場選手の入場です。二年Fクラスの吉井明久君と坂本雄二君です。』

向こうからの入場らしいな。

『なんと、最高成績のAクラスを押さえてFクラスのお二人が決勝に進みました！これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！』

これ絶対雇ってるよな！！？。普通こんなこと言わないよな！！？

『そして対するは。二年Fクラスの射命丸彩斗君と二年Aクラスの木下優子さんです』

「さ、入ってください」

係員に誘導され、会場に入る。

会場は盛大な拍手で包まれていた。

『またもやFクラスの生徒が決勝に進んできました！今年のFクラスは何かが違うのか！？』

アナウンス・・・どんだけ金もらったんだ。

『それではルールの説明を行います。試験召喚獣とは――』

そんな感じで、アナウンスが説明を始める。

「そっいや、例の常夏が教頭に加担したのは推薦だったらしいぞ」

俺は雄二と明久にそう言った。

「そうか・・・救いようのない屑だったようだな」

「そうね。まあ放っておうていいんじゃない？」

優子がそう言う。最近また毒舌スキルが上がってるような・・・

「彩斗、何か失礼なこと考えたでしょ？」

「いや、何も・・・」

読唇術まで上がってるよ・・・

「まあ、本来ならここでお前らに勝利を明け渡してもいいんだが・・・」

「いや、本気で来てもらうぞ。そっちのほづが面白いからな」

雄二がそう言う。でもねえ・・・

「いいや、お前らじゃ絶対勝てねえんだよ。それに今回は賞品にアレがあるだろ？」

「・・・そうか。お前らにはあってもいいだろうな」

雄二は察したようだが・・・明久は把握してないようだ。

『それでは選手の皆さん、どうぞ！』

4人が一斉に「試獣<sup>サモン</sup>召喚！」と叫ぶ。

『Fクラス坂本 雄二 日本史 215点 & Fクラス吉井 明久 日本史 166点』

先に、向こうの点数が表示された。

明久にしてはよくやったほうだな。

「確かに、姫路が教えただけはあるな・・・」

しかし、と一拍置き。

「如月グランドパークのチケット・・・俺がいただくぞ」

『Fクラス射命丸 彩斗 日本史 3057点 & Aクラス木下 優子 日本史 358点』

「さ・・・三千!?!?」

見事に驚いている二人。

「彩斗、とうとうやったのね・・・」

優子は呆れてるし・・・まあとうとう本気を出したわけだが、自分

もびつくりだ。

「そついやお前はそのままなのか」

「面倒だからこの前のテストのままよ」

さすがは優等生だ。俺はちゃっかり変えてますけど・・・

「さて、行くか・・・無限一刀流」

俺の召喚獣が刀を生み出し、それを空に投げる。

その刀の落下点は敵の召喚獣だが、二人とも勘がいいのやら避けられる。

その隙を狙って優子が槍を刺しに行く。ちなみに三国無双のモデルだ。

明久はそれを迎撃するが・・・拮抗状態へ入ったようだ。

雄二は二対一の形をつくりたいようだが・・・

「まあ、させねえよな」

俺は刀を一本雄二の召喚獣のほうへ弾き、その方向へ移動する。

横薙ぎに一閃したが、かすっただけだった。

「まあ面白くないだろうがさっさと終わらせる。残念だったな雄二」

「いくらお前でももう少し手間取るだろうさ。向こうが終わるまではな」

「いや、もう退場してもらうぞ。発狂」

そうつぶやいた後に、俺の召喚獣の周りに紅いオーラが纏う。

そして召喚獣が消えたと思ったら雄二の周りには無数の剣が・・・

「無限一刀、狂乱の舞」

全方位からの攻撃に一瞬で沈んだ雄二。

「優子、加勢は・・・いないな」

「ええ、終わったわよ」

心臓部分に槍が刺さっている明久の心臓。グロいな。あと、本体は撃沈してらあ。

『勝者！射命丸・木下ペア！！』

パシンッという乾いた音とともに優子とハイタッチをする。

まさかのおまけだああああ！！

「IF 劇場」天狗な使い魔

いきなり目の前に現れたでかい鏡・・・

これってアレだよな・・・

とりあえず、入ってみるか。

「サーヴァント・セイバー。召喚に命じた。問おう。貴方が我がマスターか？」

ふざけてこんなことを口走ってしまいました。

だがしかし、実際目の前にいるのは衛宮くんじゃなく

長い耳を持った一部自己主張の激しい部分のある少女とその保護者の緑髪の女性でした。

あれ？ピンクじゃない・・・。

これが俺の初めの感想だった。

少女の名はティファニアというらしく、ウエストウッドとか言うち  
つちやい村でひっそり暮らしているようです。

長いからティファでいいと言われたけど。FFのあのティファと被  
る・・・

そして緑髪の方はマチルダ・オブ・サウスゴータって言うんだって  
さ。

・・・・・・。

まさかこっちに来るとは・・・。

まあゼロ魔だとは鏡から薄々感じていたが・・・

ピンクのツルペタツンデレのほうじゃないのか・・・

まあ、ツンデレには慣れてるけどツルペタはきついかもな・・・

え？優子？アイツはBあるよ。こっちはAAAくらいだろ。

一緒にすんなって（笑）

ちなみに、契約のほうはマウストウマウスなんてやってませんぜ。

普通に手の甲で十分っぽいよ。

てかそんなことやったなら俺死んじゃうよ。

ルーンは出てなかったのはなぜだろうな……？

そして数日後には魔法学院で進級試験があるらしい。

俺も無理言ってマチルダさんのお手伝いということで魔法学院へゴー。主に野次馬のため。

ティファ（結局こっちで落ち着いた）はお留守番だが仕方ない。割り切ろう。

あ、俺人間のままじゃん……

どうしよう、タイミングのがしちまったよ。

内心慌てているのも伝わらず、気がつけば数日たった。

というわけでここは魔法学院。

そして本日は進級試験である使い魔召喚の儀式。

俺はお手伝いとしていざというときのため待機してた。

その間ヒマそうに見えるかもしれないけど……

実は召喚済みの使い魔と話してたんだよね。

これがおもろい奴らでな……

つとこの話はまたあとでしようか。

まあそんなこんなでやっとピンクのツルペタが出たわけだ。

何回も爆発してるが・・・ところどころ被害が出ている。

俺は全部反射しているが。

そうそう、俺は一応凄腕メイジとしてここにいますぜ。

向こうで試されたからやったら腰抜かしていたけどね。

もちろん翼隠してるからそんなに力は出ないけど。

つとそろそろかな。

何回目かわからない爆発の中から人影が見えてきた。

さて、面白くなってきた。

・・・そろそろ優子が迎えに乗り込んできそうで怖いな。

いや、今は考えないでおこう。

第24話俺と優子と清涼祭―二日目開始!―（後書き）

決勝短い・・・

あとどうしてこうなった・x・

というわけようやく清涼祭も終盤ですね。

残るは教頭折檻のみとなりました。

あと、+αのほう・・・

文脈とかは一切気にせず書き走ったので

過度な期待はしないでください。お願いします。

あと、おまけのネタ募集いたします。

採用条件として作者が知っているというものを付けさせていただきますが・・・

知らぬものをいきなり二次で書けとかどんな拷問っすか・・・

というわけでまた次回ノ

実は+αの方が楽しかったりそうでなかったり。

第25話俺と優子と清涼祭・終・清涼祭終了!!・（前書き）

今までで一番sadです。どうして（前回以上に）こうなった・  
x・

第25話俺と優子と清涼祭・終・清涼祭終了!! -

ババアからの表彰はとばして……

無事優勝してデモンストレーションを能力で無理やり成功させた。

というか、初めから境界いじってたら失敗なんてありえないんだよね。

紫姉さんマジチート。

そして現在……

「3番テーブル!注文入ったぜ」

「はいよっ」

「2番テーブル、客が怒鳴ってるけど……」

「彩斗、消してこい」

「メンドクセエ、ゆかりん、ごーごー」

「ごあんな〜い♪」

店が大繁盛いたしました。俺はフォーオプアカインドで厨房2人、ホール2人で働いている。ちなみに本体は厨房にいる。ホールめんどいもんね!

ちなみに、霊夢と魔理沙はバイト中。貧乏巫女攻略したり。

人手は大切だもんね！

「5番テーブルの注文じゃ！」

「はいよ」

「7番テーブル、また客がキレてる！」

「ゆかりん、ふぁいとー」

「ごあんない♪」

また、尊い犠牲が・・・

てか、キレる奴多くな？

Mはいらないぜい。・・・とそろそろ終盤だな。

「野郎共！ラストスパートだ、ここで踏ん張れ！！」

俺は声を張り上げて喝を入れる。

「「「サーイエッサー！！」」」

男どもの返事がこれだよ・・・随分調教されている気がするが・・・  
まあいいだろう。働けば。

『ただいまをもって清涼祭を終了します、生徒はすみやかに撤収して下さい』

やっと終わった・・・

最後は死ぬかと思ったな。

しかも分身消した瞬間疲労がああああああ！！

ってなつてそのまま過労で死んでいたと思う。メイド服の優子が来なければ・・・

メイド服いいよねっ！そのまま持ち帰りいゝしてそのまま食べちゃいたいね！

・・・最近自分を見失ったような気がする彩斗です。

しかし、新しい自分も見つけるもの一興・・・。

そんなことを優子の膝の上に頭を置いて考えていた。

「おい、彩斗。お楽しみのこと悪いが学園長室へ行くぞ」

悪いと思うなら呼ぶな。

「というわけなんだが・・・優子、ついてくるか？」

「うん・・・まだ一人が怖いから行こうかな」

「よし、じゃあ行こうか」

そうして学園長室へ行くメンバーは俺、康太、明久、雄二、秀吉（チャイナ服）

そして優子（メイド服）だ。コスプレ集団と取られてもおかしくないと思う。

そして学園長室へたどり付いた。

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

相変わらず敬意なんてクソ食らえな連中だな。

一応ノックはしているところがなんとも言えない。

「お主ら全く敬意を払ってないと思うのじゃが・・・」

全くその通りだ

「優子は見ちゃダメ」

俺は優子の目を隠す。こんなもの見せられない。バカすぎて。

「彩斗、前見えない」

可愛いからこのままだ。ゼツタイ。

「きちんとノックはしたのだけど・・・」

「アタシは返事を待つように言っただけだがねえ」

そして報告会が始まる。

俺はこの辺はノータッチだから聞いても意味がない。

それより、外に何かいるんだが・・・

優子のほうをチラ見してみると同じく気がついていた。

『・・・ねえ外の奴。どうするの?』

『うーん・・・どうしようかねえ』

お互い心を読みあつて会話を成立させる。優子は服の下にサードアイでも出したのだろうか。

『とりあえず、スキマにごあんないでよくない?』

『それがいいわね』

会話終了。

「待て明久!その話はマズい!!」

ごあんない。ってやった瞬間雄二が叫んだ。何事だ?

あと、スキマはこの部屋の中央の天井につないであるが……

何か落ちてきた。

ぼうずとモヒカンがあらわれた！！

すみません、ちょっと調子に乗りました。

ともかく、天井のスキマから常夏が落ちてきた。

「いててて……どこだここ？」

「俺に聞くなよ、あゝ腰が砕けそうだ」

啞然とする俺達。今だ気がついてない常夏。

「なあ、優子」

「何？」

「こういつときってアレやるんだよな？」

「アレって……ああ。アレね」

やっぱりこういつときは

「「ごうもん、しまっしょ」」

常夏が震えあがった気がする。

以下、簡略化タイム。

「常夏よ、お前らに指示した奴はなんて言っただ？」

「ハッ、これ以上言うかよ。てかお前知ってるだろ」

話が通じない

「よし、優子やれ」

「わかったわ。行くわよ！本格的な足つぼマッサージ・妖怪編！！」

「「ぎゃあああああ、足がああああ」」

確か、妖怪にはちょうどいい足つぼマッサージだね。どこで覚えただろう？

「ほら、話せば楽になるぞ？カツ丼奢るぞ？スシクウナー」

「は、話さないって言っただろう！！」

「やれ」

「「ぎゃあああああああ」」

「ほら、話せ」

「わ、わかった！！教頭の野郎が推薦出すから邪魔しろって言ったんだよ！！」

「よし、吐いたな。優子録音したか？」

「ええ、ばっちりよ」

簡略タイム終了。

「というわけでババア長、教頭はこっちで始末する。こいつは公の理由とかに使えや」

俺は録音したものを渡す。

「いろいろありすぎてどうなってるのやらねえ・・・もう勝手にしな」

「というわけだ。後明久達についてくるなよ。吐くぞ」

血の匂いとかグロさで。

「え？どういうこと」「それじゃ、後で合流ってことで場所連絡よろしく!!」

俺は明久に物を言わせず教頭のところへ・・・

教頭室に入ったのだが誰もいない。少し待つか・・・。

・・・・・・。

・・・・・・。

・・・・・・。

誰もこない。俺泣きそう。

心の中で愚痴っていたらドアが開く音が聞こえた。

それを聞いた後、俺はスキマを展開した。部屋ぎりぎりいっぱい。

俺だつて優子と一緒にいたいんだよ。早く終わらしたいんだよ。

・・・よし、教頭が落ちたな。おそらくさっきの悲鳴だろう。

まあ、ルーミアに食われて映姫様のところで説教がオチだな。

説教半日行きそうだ・・・。

・・・・・・目玉の数がグロかったな。

まあいい。移動しよう。

集場所は近所の公園だった。

すでにFクラスのヤロー共と翔子以下Aクラスの一部メンバーがいた。

「よう翔子、楽しんでるか？」

適当に見つけた翔子に話しかけてみた。

「…………雄二が相手にしてくれない」

「押してダメなら引いてみな」

「…………やってみる」

「あと、これをあげよう」

俺が差し出したの『如月グランドパークプレミアムオープンチケット』だ。

「…………これ、優勝の景品」

「ああ、その通りなんだが……生憎俺達はババア長に自粛しろと言われてね…………」

実はババア長が余ってるからくれたっていう……。

「…………ありがとう。彩斗」

「気にするな。あと写真がほしければいつでも言え」

「・・・わかった」

さて、もうしばらくぶらつきますか・・・

公園をぶらついているとようやく明久達と合流した。

・・・のだが、姫路の様子がおかしい。

「おい、明久。どういうことだ？」

「彩斗、来てたんだ・・・。実は誰かが酒持ってきていたらしくて、それを瑞希が飲んじゃったんだ」

「そーなのかー。・・・でどのコップだ？一応確かめるぞ？」

「あゝ・・・確かこれかな」

俺は明久の指さしたコップを手に取り、飲んでみた。

うん、酒だ。しかもめっちゃ弱い。

ということは、姫路は酒弱いな、ものすこく。

「今日はあきひしゃくんの家にとまるのねふ〜〜」

おお、爆弾発言。

とりあえず、久々に使う気がする『嫉妬心を操る程度の能力』。

これで「なんだ・・・いつものことか」ってスルーされるはずだ。

ひとまず、明久。今夜が勝負だ。

心の中でそうつぶやいた。

さて、これで学園は安泰かあ。また暇になるがそのほうが平和だからいいだろうな。

そう言うわけで俺、射命丸彩斗は自らの使命。学園を監視し、学園の不利となる者を排除せよ。というものを実行し終えた。

二度とないほうがいいが、もう一回こういうのもありだな・・・。

よっしゃいくぜ！「i f 劇場」パート2「冷やし中華始めました」  
なノリで言ってみよ〜〜

『バカと河童と召喚獣』

「ねえちよつとお願いできないかしら？」

八雲紫の一言で決まった河城にとりを学園の召喚システムの整備士  
として入学させることが・・・。

にとりは入学後、整備士としてか授業以外ほとんど教室にいない。

もしくは、人と話すのに慣れていないのか・・・。

そんな中であつたのが吉井明久であつた。

二年になり、にとりはFクラスにいた

まあ、テスト前日に徹夜でなんか作ってたらしうなる。

そしてFクラスがいきなり試召戦争を始めるといふ暴挙に・・・。

にとりは化学、物理、数学といった理系科目が化け物並みの点数の  
ため戦力に。

しかし、Aクラスには敗北。

そして清涼祭。

にとりはあるものを作りだしていた。

『召喚獣融合装置』

そう名付けられたものであった。

簡単に説明をすると・・・

召喚獣と召喚者を精神の部分で融合させるもの。

効果は召喚獣の力が召喚者に流れるというもの。召喚者の潜在能力に左右するが・・・。

しかし、何を見ながら作ったのか、それは完全に仮面ライダーの変身ベルトだった。

それを明久に渡した。何故かって人脈が驚くほど狭いから。

清涼祭一日目・・・。

妨害事件がいろいろ起きた。ウェイトレスがさらわれても召喚獣の力を得た明久の敵じゃない。

しかし、何を思ったのか明久は雄二から教えてもらったこと・・・教頭が悪役ということを知っていてすぐさまベルトの力を使い、教頭室へ走った。

案の定、教頭はその部屋にいた。

明久は反論されながらも教頭を一步步追いつめていく。

そして最後の一手が決まり教頭が膝をつく

「さあ、お前の罪を数えろ」

そう言い切った明久であった。

つづくかも。

第25話俺と優子と清涼祭・終・清涼祭終了!! - (後書き)

最近恋人にするなら同じ年以外受け付けなかったけど1コ下ならいいかなとか

思い始めた紅月です。

はい、全く関係ないですね。

とりあえず、清涼祭を終わらせました。ほぼ強制的に。

教頭のことかもっと多くしたかったけど彩斗君暴走。

そしてこの物語は一応主人公TRUEE。

そんなわけでアンケートです。

まあ、秀吉の扱いですが・・・

秀吉に彼女をつけるなら?ということ

案?このノリで文いっちゃおうぜ

案?いや、ここは明久争奪戦に負けてしまった美波にチャンスを・・・。

案?いや、ほかの子にもチャンス・・・(希望添えてね!!)

この三つあたりでお願いします。

そして、おまけ。

吉井明久様が感想で本編の内容の希望があったのですが・・・

書いたあとで見ちゃったお・x・

さあどうする、俺。

ということとで考えたのがおまけ。

冷し中華、始めました。

なノリでホント気軽に。

そして例のセリフ・・・。

明久言いたかっただけじゃね？w

書いた自分がそう思った。

ということで次回は3・5巻を少しはさむかはさまないかで、

3巻の強化合宿編、またの名をヒステリックGo to Hell  
編に入ります。

しかし、あくまで予定。・・・変更の可能性もあるのであしからず。

ではまた次回ノ

本編よりあとがきの方が楽しい件について。

第26話俺らと雄二たちと如月グランドパーク（前書き）

久々に眺めとなりやした。

というか。無理矢理一話に・・・。

## 第26話俺らと雄二たちと如月グランドパーク

清涼祭も無事終わったことで、一安心していると……。

「……あ」

大事なことを忘れていたようだ。

鞆の中から出てきたのは一枚の紙切れ。

もちろん、ただの紙切れではない。

どっかのババア長が献上しやがってくれた一品である。

「もしもし、優子。明日暇？……うん、じゃ、明日は駅集合で。うい、りょーかい」

久しぶりに帰省中の優子に連絡を取る。

そして鞆から出された紙には

『如月ハイランドプレオープンチケット』と書かれてあった。

次の日・・・。

朝少し早めに起きた俺は普段着の袴でなく、ジーンズとシャツに着替える。

ちなみに俺の家なんだが・・・

幻想郷オンリーとなっている。

外の家だったものは結構前に消えたらしい。

隣人だった木下家がそう証言している。

幻想郷にあるといっても紫姉さん以下数名の力を借りて外の電波をつないであるから

ケータイが使用可能だ。

こんな話をしているとイタ電とか来そうだな・・・。

それはともかく。

俺は朝食の準備をする。

それでも料理はできるんだぜ。彼女がズボラとか姉が残念なことになっっているとかいろいろ理由が重なった結果だが・・・。

いつものようにサクサク作っていく。もちろん和食だ。

ちなみに洋食は紅魔館か偶に守矢神社行けば食える。

俺は和食はだけどな。

そこまで時間かけずに食事を作り、姉である射命丸文（職：新聞記者兼妖怪の山護衛）

を起こしに行く。どうせまた徹夜でもしたんだろう。

「文姉……。飯だぞ……」

……反応がない。ただの屍のようだ。

「文姉……。入るぞ……」

いつもならもう少し粘るが、今日は時間が惜しい。

強行突破に出ることにした。

「文ね……。え？」

襖を開けるとそこにいたのは……………

「うふふ……。はあはあ……。ふふふ……」

パタン。と襖を勢いよく閉めた音が響く。

嘘だろ、オイ。嘘だといってくれ。アレは他人だ。ウチの姉貴はあややが口癖のはずだ。

そんな内心の葛藤の元、俺はもう一度襖をあける。

「あやや・・・可愛らしいのに凜々しいですねえ」

ボタン。ともう一度閉める。今度は写真を持っていたようだった。

・ ・ ・ ・ ・ 認めようじゃないか。アレはウチの姉貴だ。

どうしよう。これじゃ、危ない人決定だよ。

仕方がない、放置して一人で食うか。

朝食を終え、時刻は午前8時あたり、

俺は家を出発する準備を終えて、少しばかり余った時間を潰していた。

P  
r  
r  
r  
r  
r  
r  
r  
r  
P  
r  
r  
r  
r  
r

ん、誰だ？なんだ非通知か。

俺は放置することにした。  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・  
 が。

しばらくしてケータイを開くとメッセージが残されてあった。

俺はそれを聞いてみることにした。

「・・・・・・・・キサマヲコロス」

どこの脅迫電話だよ。

電話の履歴を見てみると・・・雄二の番号じゃないか。

そう言えば、翔子にチケット上げたっけな・・・。

人の親切心が無碍にするとは・・・仕返しをしてやろう、うん。

P r r r r r P r r r r r

「ただいま、電話に出ることが（ry」

留守番サービスが出てきた。チツさすがに出ないか。

とりあえず、伝言を残すか。

「やれるものならやってみやがれ」

よし、これで大丈夫だろう。

そして時は進んで・・・

場所は待ち合わせの場所である駅。

・・・ちよつと早く来すぎたか。優子はまだ来てないようだ。

「ごめん、まったく？」

どこことなくそんな声が聞こえてきた。

声のほうへ振り向くと、すごくおしゃれな格好している優子が小走りで来た。

いや、めっちゃ可愛いし、抱きとめたいけど・・・

「ごめん、まったく？」とくればスルーが基本だろう！

俺達の敵の能力を持つ人的な意味で。

二次元知識の高めな優子ならわかるはずだが・・・

「まったく？って言うてんでしょうが無視すんなやこらー」

さすがだ。空気を読んで頭突きをしてきた。

まあ、来るのがわかっていたら受け止めることは容易だが・・・。

ぐふう・・・。いてえ。

そして受け止めた優子がすごい形相でにらんでいます。

「・・・いやな、その場のノリがあるだろ？」

「・・・」

・・・これはマズイ。やりすぎたか？

「あとで何でもするからな？な？」

「・・・。パフェ」

「はい？」

どういうことだ？

「後でパフェ奢って」

はあ・・・仕方がないな。

「わかった。後でな。じゃ、行くか」

「うん」

姉さん。今日も優子が可愛いです。

電車とザ・ワールドと能力を使って本来より短い時間で俺達は如月  
グランドパークについた。

「よう、雄二。ちゃんとプレオープン来たんだな」

「よう、彩斗。今朝は随分ナメタ真似してくれたな」

はて、何のことやら・・・

「そろそろ入ろうぜ。翔子、こいつを逃がすなよ？」

「・・・わかってる」

そう言った翔子は雄二のほうへ歩いて行き腕を・・・いや、

腕に関節技をかけた。痛そうだ。

そしてそのまま入場ゲートへ。

俺は優子が少し抱きつきかけているが・・・コイツ、また胸が大きくなったか。

程よく成長してもらいたいものだ。

「いらっしやいマセ。如月グランドパークへようこそ！」

誰だよこいつ。もっとまじな奴雇えよ。

「本日はプレオープンなのデスがチケットはお持ちですか？」

「・・・はい」

翔子がチケットを出す。

「ハイ、大丈夫デース。そちらの方は？」

「これだ。後、俺達は婚約済みだからここに書いてあるのはこっちの二人に集中してくれ」

「彩斗！テメエ・・・」

ゴリラがキレた。皆離れて・・・って翔子がアイアンクローかましてる。

一度計ってみたいな。翔子の握力。

「分かりました。では、ちょっとお待ちくだサーイ」

よくわからない従業員は俺達に背を向けてどこかに電話し始めた。

「・・・私だ。例の連中が来た。確実に仕留める」

「オイ、なんだその不穏な会話は」

間違いなく工作員の誰かだな。

「では、こちらの二人はお世話させていただきマース。断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ！そんなことをされたら我が家は食中毒で大変なことになるてしまう！」

どんな家庭だ。オイ。

「では、記念撮影を撮りマス」

「・・・記念撮影？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人のメモリーを残しマス」

翔子は従業員の言葉で顔を赤らめていた。

「ねえ、写真なら撮ってもいいんじゃない？」

「うん・・・そうだな。写真くらいならいいか」

「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を深めに被ったどこか見たことあるスタッフが現れた。

・・・明久だな。どこからどう見ても。本人の言葉を借りて365。  
どう見ても明久だな。

雄二も気がついたのだろう。ケータイを取り出して電話をかけている。

「ああ、すいません。僕の携帯ですね」

「いよう明久。テメエ面白いことしてくれるじゃねえか・・・！」

「人違いです！」

逃げた……。雄二は追いかけようとするが・・・似非外国人に阻まれる。

「えーと・・・スタッフさん？先にアタシ達の写真お願いしていいですか？」

「あー、ハイ。わかりました。はい、チーズ」

俺達は互いにより合うとフラッシュが焚かれた。

似非外人が雄二を手放した瞬間に翔子が雄二を取り押さえていた。

あと、カメラマンは康太だよな。・・・試しに能力使ってみよう。

『・・・・・・・・雄二達を婚約させたら雄二を殺す大義名分になる』

心を読んだらこんなこと言ってましたよ。さすがFFF団

「——はい、印刷終わりました。どうぞ」

うん、よく撮れてる。さすが康太。

「じゃ、優子。行こうか」

「うん」

俺達は手をつないで中に入っていった。

後ろから断末魔が聞こえてきたが・・・気にしない。

「さて、優子。ほとんど回ったんだが・・・どうする？」

「こんな短時間で回れるのは便利だけどね・・・これじゃあちよつと物足りないわね」

こんなことを言ってるのも、俺がザ・ワールドで止めて回りまくった結果なんだけどな。

「とりあえず、秀吉に電話してみるか」

「何で秀吉に？」

首を少し傾げて質問する優子。今日の優子は何か持ってるぞ。めっちゃカワユス。

「明久と康太がいたんだ。おそらく秀吉と島田と姫路もいるだろうさ」

「確かにそうね」

よし、早速電話しようか。

P r r r r r P r r r r r r

『もしもし、彩斗？ちよつと今忙しいのじゃが・・・』

「よーう秀吉、面白そうなことをしてるじゃねえか」

『な、何のことかの?』

ふむふむ・・・あくまでしらをきると。

「雄二、翔子、如月グランドパーク、結婚」

『っ・・・・・・・・!!』

凶星ですね。

「まあ、今なら黙っておいてもいいが・・・条件付きで」

『な、なんじゃ?』

「俺らも混ぜろ」

さて、いい暇つぶしができそうだ。

秀吉との連絡で俺達はスタッフの服に着替えてレストラン的なところに待機していた。

どうやらここに来るように仕向けるらしい。

「それにしても、良かったのか?」

俺は優子に問う

「何がよ？」

「いや、俺の暇つぶしに付き合わせてしまっただけな」

「別にいいわよ。アタシも代表たちが結ばれてほしいし」

《皆様、本日は如月グランドパークプレオープンイベントに参加いただき誠にありがとうございます！》

明久のアナウンスが始まった。どうやら無事ここに入れたようだな

《なんと、本日この会場に結婚を前提としてお付き合いをしている高校生のカップルがいらっしゃるのです！》

あ、雄二が吹いた。

《では、題して。如月グランドパークウェディング体験プレゼントクイズ〜》

そして、出入り口が閉められた。

《内容はいたってシンプル。クイズに五問正解したら弊社のウェディング体験していただけるというものです。もちろんそのまま入籍してもらって構いません》

雄二にとっては大問題だろう。

《それではお二方。前方のステージでどうぞ！》

翔子が張り切った感じで雄二を引っ張りながらステージへ上がった。  
いった。

《それではクイズを始めます》

始まったな。とりあえず、千里眼で不審者くらいは見つけるか。

《第一問！坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょう？》

おかしいな。問題がずれてる気がする。

——ピンポン！

そんな問題だが、翔子がボタンを押した。

《はいどうぞ！》

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

雄二がわめいている。しかし、正解ではな——

《正解です！》

嘘だっ！！！！！！

《第二問！お二人の結婚式はどちらで挙げられるでしょうか？》

俺の心の叫びはむなしく二問目へ……

——ピンポーン！

お、今度は雄二が押したぞ。

「鯖の味噌煮！」

《正解です！》

「なにいつ！」

《お二人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名“鯖の味噌煮”で行われる予定です》

「待てい！！その名は絶対この場で付けただろう！」

俺も雄二の言う通りだと思う。司会者よ、もう少し頑張れや。

《第三問！お二人が初めて会ったのはいつ？》

これなら雄二も……「ふおおおっ！！？目が、目があっ！！」  
……。

——ピンポーン！

「……小学校」

《正解です！お二人は小学校のころからの長い付き合いです。なんとも仲睦まじいですね！》

目潰しされたよね・・・雄二は。ほら、優子も絶句してるじゃん。

《第四問！》

——ピンポン！

「わかり——」

《正解です！それでは最終問題です！》

これでもう決定だな。と思った時。不愉快な声が響いた。

『ちょっとおかしくな〜い？アタシらも結婚する予定なのにどうしてそんなコーコーサーだけが特別扱いなワケ〜？』

その声の主は何故かステージの前まで歩み寄っていた。

俺は裏方から回って司会者のほうまで来た時にはどうやらチンピラがクイズを出すことに決まっていた。

『じゃあ問題だ。ヨーロッパの首都はどこか答える！』

・・・・・・は？

コイツ明久以上のバカか？

ヨーロッパは州の名前だぞ？国じゃねえぞ？

「・・・・司会さん、ちょっと収集つけるから交代願います」

「わ、わかりました・・・」

司会の人さえ引いてるし。しかたがない。いっちょ立ちなおすか。

《えゝ急用のため一時司会を交代いたします。まず、坂本夫妻様ウエディング体験おめでとうございます。・・・ちなみに申しますとヨーロッパという国は存在しません。詳しいほうはお手持ちの携帯端末等でご確認ください。あと、その乱入したお二人、そのような行為は営業妨害のほうに当たりますので二度目は警察のほうへ連絡します。謹んでください》

「ありがとうございます。では続きをお願いしますね」

「はい。まかせて下さい」

うん、頼りになりそうだ。

後ろで「俺達は結婚しねえ」とか

「・・・許さない」とか聞こえるが無視だ。無視。

そこで一度雄二達は退場した。

「優子、次奴らが出たら変装して殺るぞ」

「ええ、わかったわ」

これで大丈夫だろう。絶対に失敗なんぞにはさせない。

《それでは新郎が入場します。拍手でお迎えください》

会場の大半が拍手を始める。

雄二はタキシードに着替えていた。意外とにあっているな。

《それでは新郎のプロフィールを――省略します》

手え抜きすぎだ。

『ま、紹介なんていらねえよな』

『興味ナシ』

また奴らか・・・そろそろルーミアの餌行きだな。

《・・・その前のお客様。そのような行為は営業妨害。さらには名誉棄損の可能性も出てきますので、牢屋に入りたくなかったら  
謹んでください》

少し司会者がキレてるぞ。あの人は法学部卒じゃねえの？

『これ、アタシらのことってんの？』

『違えだろ。俺らはオキヤクサマだぜ?』

『だよ〜』

こいつら、完全な屑だな。俺が人間じゃなくてよかったと思ってしまうな。

そろそろ我慢の限界なんだが……。

《それでは新婦のご登場です》

ステージへ出てきたのは綺麗なドレスで着飾った翔子だった。

「……………綺麗」

隣にいた優子もそうつぶやいた。

「俺はどうもドレスってのは気に入らねえが綺麗だな」

「素直じゃないわね」

「お前ほどじゃない。それに俺は和服派だ」

「ちょっと、それって私が素直じゃないってこと!？」

「最近デレ期って奴だな。昔はあんなにツンツンしてたのに」

たまにはツンデレしてくれるとすごくゴチになるんだけど……。

「悪かったわね。ツンデレで」

ふいつとそつぽを向く優子、いいねえ。それだよそれ。写真とつとこ。

「ちよつと、彩斗！ここで写真は・・・」

俺がシャッターを切るとものすごい速さで撮影されていく。

・・・コレ、1万枚連射カメラじゃん。

《ど、どうしたのでしょうか？花嫁が泣いているように見えますが・・・？》

ん？どういうことだ？

「・・・ずっと・・・夢だったから・・・」

涙混じりのかすれた声が響く。

《夢、ですか？》

「・・・小さいころから・・・雄二と二人で結婚式を挙げることが・・・。だから・・・本当にうれしい。雄二とこうしていられることが・・・」

・・・それはそれは、壮大な夢だな。決して一人で叶わない・・・。

《どうやら嬉し泣きのようですね。さて、花婿はどう応えるのですようか？》

なんか雄二が断りそうな雰囲気だな・・・。

答えるならとづくに付き合ってるだろうし。

『あゝあ、つまんなーい!』

そんな中、一人だけ、横やりを入れた奴がいた。

『そうだよな。お嫁さんが夢です、ってオマエいくつだよ?これってコントじゃねえよな?あんなキモい夢普通小学生で卒業だろ!』

『えゝコントなのお?超ウケるんだケドおゝ!』

その瞬間俺は我慢の限界を壊した。

「あや・・・と?・・・この感じ。あの時の・・・」

隣で優子が何か言っているが頭に入れない。入らない。

俺の中には奴らを血祭りにあげることしかなかった。

《霧島さん?霧島翔子さん?皆さん花嫁を探してください!!》

どうやら翔子は姿を消してしまったようだ。

が、今はそんなことよりもチンピラを探しに行く。

「・・・みいゝゝつけたアアゝゝゝ」

『ああ?あんだよ?』

茶色い顔をこっちに向けてくる。

「・・・ちょっと、ツラ貸せよなア？」

殺撃の・・・始まりといこうか。

「うーん・・・またやっちまったな」

俺の目の前には血だまりが二つ。全部妖怪のいそうなところへ送った。

そして、その血だまりも・・・消す。

「ふう・・・こんなものか」

「何が、どんなものなんだ？」

ふと、後ろから声がした。

「悪いな。獲物を横取りしちゃって」

「気にしてねえさ。俺からお礼をしたかったけどな」

沈黙が俺達を包む。

「まあ、お前らに何があつたかは知らねえがよ」

俺は静かに語りだした。

「お前と翔子が仲良くするのは意外と皆が思ってるんことだ。俺と優子は当然だし。秀吉も姫路も島田も、明久も康太もだな。全員がお前に協力したんだ。表面ではアレだが、皆お前に期待してんだ」

「・・・・・・・・」

「まあ俺があーこー言う問題じゃねえが……。頑張れや」

俺はそう言って去った。雄二はまだ座ったままだった。

雄二と話をした後、俺は優子を探していた。

「・・・・・・・・いた」

少し前のベンチに優子が座ってうつむいていた。

「よう。待たせたな」

俺は優子の顔を覗き込む。

「彩斗っ！！」

俺の姿を確信してすぐに飛びついてきた。

「つとどうした？また甘えたくなっただか？」

さすがはデレ期。大胆だな。

「・・・また、彩斗が・・・どつかにいつちゃったと思った」

「ごめんな。まだ力が制御できなくて」

自分で出せば抑えられるんだが・・・どうも怒りの延長で発狂するかどうかにもならないらしい。

「もうどっかいかない？」

ぐふっ・・・涙目＋上目づかいは反則だ・・・。

「ああ。どこにも行かない」

「じゃあ・・・パフエ2つに追加ね」

「ってオイ、そりゃねえだろ・・・」

「女の子を悲しませた罰よ」

「・・・下手したら俺より強いのにねえ・・・」

「はいはい。わかりましたよう、と」

適当に承諾の意を表して俺達は帰路についた。

「ねえ彩斗」

「何だ？」

「代表たちもうまく行くといいね」

「ああ．．．．．そうだな」

## 第26話俺らと雄二たちと如月グランドパーク（後書き）

ひとまず、3・5巻の内容です。

さすがにこれはやつとかないとまずい気がした。

後は吉井クロスをやるのかやらないのか決めてから

3巻、強化合宿編へと入ります。

アンケートまだ続くよ！

Q：秀吉の彼女は誰？

？（。。。）○ミ。あやや！あやや！（現在3票）

？いや、ここは美波だ！

？待たれよ、ほかにいるであろう（希望添えてね！）

の3つです。実現予定・・・合宿後で手を打ちますwww

ではまた次回ノ

宿題おわってねえ・・・orz

第27話俺と恐怖とラブレター？（前書き）

先生・・・クオリティが・・・ほしいです。

## 第27話俺と恐怖とラブレター？

「……はい、これにて会議終了。次からも頑張るように」

「おつかつれしたー」

ある日の文月学園の早朝。

俺こと、射命丸彩斗は新聞部の会議のため朝早くから学校へ来ていた。

会議といっても、先日行われた清涼祭の様々な情報を報告しあう場だ。

まともな報告からゴシップネタまで。

その原因は部長にあるんだけど……。

うちの部長はゴシップ好きな方だからね。パパラッチ候補生みたいな人だから。

文姉を見ているし、人のこと言えないし、楽しいから別にいいけども。

そして現在、新聞部の部室——普通のプレバブ小屋——から玄関へと移動している。

今日は会議が長引いたからな。ある2年の生徒の別れた原因について。という話題で。

ちょっと急ぎ気味の心持で靴箱を開けると・・・何やら手紙が置いてあった。

（ってまたこのパターンかよ）

過去の記憶を思い起こして、似たようなことがあったことを確認する。

（まあ、誰かが血迷ったんだよな。俺と優子のことは全学年に知れ渡ってるらしいし）

ちなみに、情報元は我らが新聞部。

「・・・・・・彩斗よ。そこで突っ立っておられると迷惑なのじゃが？」

「いっつやっほう！！！」

いきなりの声にびっくりして殴っちまった。大丈夫か？

「って何だ秀吉か」

後ろを振り向いてみると秀吉が地面にたたきつけられていた。

俺はさっさと手紙を鞆にしまいこみ、秀吉を起こすことにした。

さて、・・・・・・どうやったら起きるんだ？

仮にも俺がほぼ全力で殴ったんだぞ？

生きてるほうがおかしいよな？

ま、まさか・・・俺達の妖気にあてられて軽く妖怪っぽくなったか？

そ、そんなはずは・・・調べてみよう。

・・・・・・よし大丈夫だ。まだ人間のままだ。

「おい、秀吉～～～」

・・・・反応がない。ただの屍のようだ。

って、そうじゃない。と、とりあえず、秀吉の喜びそうな言葉をかけよう。

「秀吉、可愛い～～」・・・・反応なし。

「秀吉、女の子みたい～～」・・・・反応なし。

どうしよう、秀吉が反応しない。・・・・生きているはずなんだがな。

次は見方を変えてみよう。うん、男として見てみよう

「秀吉、かっこいい～～」・・・・ピクッ

おお、動いた。これならいけるぞ・・・

「秀吉、男前～～～」

「おはようなのじゃ！さあ！早く教室へ行くぞい！！」

.....。

どうなってんの？

朝の秀吉昏倒&リザレクション発動疑惑もあり、少し頭の整理がついていないけれど

現在朝のHR中。

俺は新たな能力、『無意識を操る程度の能力』を使い。堂々手紙を読んでいた。

「近藤」「はい」

今は鉄人が出席の確認をしている。

「斉藤」「はい」

うん、今日は珍しく平和——

「坂本」「.....明久と彩斗がラブレターをもら

ったようだ」

「「殺」あゝきゝゝひゝゝさゝゝくううううん」ヒイイイ  
イイツ！！！」」

じゃなかった。てかいつもより、混沌と化してしまった。

そうなんといつても・・・姫路からドス黒いオーラが出ている。

周りの男子は全員ビビってるし。皆！ヤンデレ姫路がINしたお！

いや、正直俺も普通に怖い。ふざけてる場合じゃないコレ。何アレ  
？いろいろぶっ飛んでるよ！！

「先生？少し、明久君を借りていいですか？」。

さあ！どうする鉄人！最後の砦はアンタだけだ！！！！

アンタの言葉で明久は生きることができる！！

「姫路、今はHRだ」

おお、さすが鉄人。これを止めるか・・・。

「終わってからにしないさ」

残酷な死刑判決であった。明久はもう、死んでいる・・・。

まあ、応急処置として嫉妬心を操っておこう。

「では、出欠確認を続けるぞ」

そして何事もなく出欠確認を続ける鉄人。

「射命丸」 「・・・実は先日雄二がデートした。相手はAクラスの霧島翔子」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺的には反応がほしかった。ガン無視はひどい。

「手塚」 「姫路さんパネエ」 「藤堂」 「姫路さんパネエ」

「戸沢」 「姫路さんパネエ」

「皆大丈夫！！？返事が『姫路さんパネエ』になってるよ！」

「吉井、静かにしろ！！」

「せ、先生！これは異常事態です。早急に対処して下さい！！」

「新田」 「姫路さん怖い」 「布田」 「姫路さんヤバイ」 「根岸」  
「姫路さん怖い」

明久の言葉は無残にもスルーされていた。

「よし。遅刻欠席なしだな。今日も一日勉強に励むように」

・・・俺も逃げとこう。巻き込まれるし、下手したら優子も混ざって乱戦になる。

「こういつときいいよね。『無意識を操る程度の能力』」

しかし、あの手紙の字は誰かに似ているような……。

そして、俺は屋上に逃げ込んだ。

直後、黒姫路と雄二と優子がやってきた。

そしてしばらくすると明久がこのこやってきたので、

そろそろ盗聴しよう。

『さあ、明久くん、さつさと、お手紙を渡してください』

『い、いや、これは……僕自身の手で処分したほうが……』渡してください』イエス、ママ!』

『ふふふ……さあて、誰のお手紙でしょうね……ってなあんだ。コレ私のじゃないですか?』

……は?

『これは私が今年書いてたやつですよ、Bクラス戦のときの奴です』なるほどね……。何らかの因果で明久の手に渡ったのか……。

・・・ということは。俺のも誰か知り合いのものなんじゃ・・・？

俺は手紙を隅々まで見渡したが・・・名前はなかった。

「みいゝゝつけた」

急に後ろから声がした。この声は間違いなくアイツだ。

「・・・なあ、優子。この手紙って見おぼえないか？」

「ッ／＼／＼／＼そ、そんなもの知らないわよ!!」

ビンゴ、これは優子のだ。

「分かった。じゃあ俺が預かっておこう」

俺はその場を脱出した。

「ちょっと、待ちなさいってどこ行ったのよ!!?」

『無意識を操る程度の能力』ここでも役に立つ。

例の手紙は木下優子小学六年生のものであった。

家に飾っておこう。

本編が短い？ならばおまけだ！！

「射命丸彩斗の彩花帖」

オープニングBGM~~~~風神少女~~~~

さあ、始めました。射命丸彩斗がお送りするラジオ番組。

『射命丸彩斗の彩花帖』の時間だ。

今日も沢山のお便りありがとうございます！！

その中で今日は二つほど紹介するぜ

まず一つ目、ペンネーム『あの人は私の物』さんから。

「愛しの彼がなかなか両親にあわせてくれません。どうしたらいいですか？」

というものだ。

そうだな。まずはそのペンネームなんとかしようか。

ひとまず。その彼氏さんとゆっくり話し合ってみたらどうだ？

彼にも家庭の事情があるかもしれないよ。

自分だけを押し付けずに相手を受け入れてみな。

そんなあなたのために1曲行きましょうか。

「冷やし中華始めました」をどうぞ。

冷やし中華、はじ〜めました〜♪

どうだった？いろんな意味ですごい歌だろう。

さあ、次のお便りだ。ペンネーム『我は男』さんから

「最近女としか見られないのじゃ。どうなったら男として見てもらえるか押してもらいたいのじゃ」

どっかで聞いたような語尾だな。まあいいや。

俺の予想通りの人物ならおそらく容姿がかなり女性としてみられるのだろう。

しかし！男というものは心だ！魂だ！

過去の偉人をみよ！皆大和魂に燃えている！

そんなアンタにこの曲をおくるぜ！

「英雄」をどうぞ！！

男なら誰かのためにつゝよくなれゝ」

これで男らしさつてものがわかっただろう。

今日はこれでお別れだ！エンディングはリクエストから行くぜ！

本日のエンディングは・・・『もってけセーラー服』

それでは皆！またな！



## 第27話俺と恐怖とラブレター？（後書き）

最近、時間と集中力がない・・・。

というわけで一応この話を挟んでみた。

あと、イギリス皇太子様。ご結婚おめでとございます。

お嫁さんは大事になさってください。

しかし、市民の方々活気がすごいね。日本も負けなように活気を取り戻さなきゃ。

というわけで今回は黒姫路ことヤンデレ姫路さんがINしたお！

この先しばしばINするかもしれないお！

3巻はいろいろ楽しみたいぜよ。

ヒステリックな方とマグマな方が出てくるからねwwww

なんたらバリヤーも出したいねw

ではまた次回ノ

イギリスと聞いたら禁書が出てくるのは俺だけじゃないはず。

俺と監視とプール掃除（前書き）

おまたせいたしますた

## 俺と監視とプール掃除

——ある日の出来事。

「ご機嫌はいかが？」

いきなり目の前に現れるスキマ。

「……何の用？」

「いきなりだけど貴方の点数に上限をつけさせてもらっわ。3000とか出されたらたまったものじゃないわ」

……はあ！？

「オイ、スキマア。一体どういうことだア」

最近ようやく手に負え出した狂気が暴走。

「だから、点数に上限をつけさせてもらっわ。10000くらいでいいかしら？」

「だが断る」

「もう決定事項よ」

「これ以上いろいろつけられてたまるかア！！」

スキマに突撃するが、スキマに吞まれてしまった。

「（あら、貴方の制限は成長によって解除されていくのよ。だって、貴方はまだ二桁しか生きてないじゃない）」

何か言っていたようだが、うまくは聞き取れず、意識は遠のいた。

姫路のラブレター事件があつた週末。

実はあの手紙は下書きだったりとか、過去のものだったりとかいろいろ曰く付きであつたが、この際あまり気にしないでいいだろう。

週末だが俺は学校に来ている。

いろいろな事情でババア長に話が…な。

さっさと帰りたいのでそそくさ学園長室へ。

——コン、コン。

「ちゃーす」

「……いい加減返事を待ってから入ったらどうだい」

俺がきちんとノックをして入ったのにババア長は愚痴をこぼした。

うん、相変わらずの妖怪顔だ。

「それで、何のようだい？」

「清涼祭の決勝、俺がたまたま本気出して3000点取っただろ？  
アレが紫姉さんの耳に入って点数制限されたわけだ」

「そりや助かるねえ」

「それでだ、点数制限の代わりに技術のほうを使うことの許可に成功した」

全力で紫姉さんを叩きに行って引き分けだからな……。

「だから、改良よろしく。詳細はこいつに書いてある」

スキマから書類を取り出す。

「……なるほどねえ。アンタらには借りがあるから今回はやってやるじゃないの」

珍しい。ババア長がやる気だ。

グングニールでも振るんじゃないか？

「強化合宿までには終わらせておいたんで良いかい？」

「十分だ。じゃ、俺は帰らせてもらう」

そうして、学園長室を去った。

学園長室を出ると、鉄人がいた。

「射命丸か。ちょうどいい。来週プール掃除の監督をやってくれないか？」

「……良いですけど。誰が掃除するんですか？」

「バカだ」

なんだ、明久か。

「わかりました。来週ですね」

「ああ、掃除ついでにプールを自由に使っていていいぞ」

……優子と一緒に行くか。

――週明け

「ちーす」

俺はいつものように教室へと入っていった。

「彩斗か、実は週末に自由にプールが使えるんだが、お前もどうだ？」

いつものメンバーで集っている中、雄二がそう言った。

これって掃除のあれじゃないか。

「悪いな、週末はちょっと頼みごとを頼まれたんだ」

「そうか、残念だ」

暇つぶしにサプライズでもしますか。

「ちなみに、秀吉とムッツリーニはどうだ？」

康太が頷こうとしたところ……

「ただし、掃除を手伝ってもらおう」

雄二の一言で動きが止まった。

「ちなみに、姫路と島田も呼ぶつもりだ」

「……………ブラシと洗剤を用意しておけ」

現金な奴だ。

「なら、ワシも行こうかの。無論、掃除も手伝おう」

秀吉、参戦。

「結構大変だと思うけどいいの？」

「うむ。お安い御用じゃ」

秀吉は良いやつだ。うん。

そついや、最近またウチの姉貴は壊れてるな。

河童に直してもらうか。

そんなことを考えているうちに雄二は姫路らへと話を進め、

実質、皆で週末にプールに行くこととなった。

そんでもって週末。

俺は優子と何故か強引についてきた文姉と学校のプールに向かって

いた。

「くれぐれも翼出さないようにね」

「わかってるわよ。それにしてもこういうのも難しいわね……妖力上がらないかしら」

いつもの記者口調じゃなく、砕けた口調で話す文姉。

いつもの服装に翼がないと意外と違和感があるな。

俺と優子は制服である。

一応学校だしな。

校門前につくと、もう皆揃っていた。中には葉月

「ちーす」

「あれ？ 彩斗、今日は頼みごとがあったんじゃ……」

キョトンとした明久がそう言う。

「ああ、『プール掃除の監視』という頼みごとを鉄人から受けてな。ホラ、一応貰ってきた証明書」

証明書を明久につきつける。

「ん、彩斗。お前来たのか？」

ちょうど雄二がどこから帰ってきた。

「とりあえず、明久が持つてる紙読め」

二人して証明書を読み始める。

すると、いきなり雄二が破ろうとした。

が、対策済みだ。紙の強度の境界を弄ってある。

「というわけだ。お前ら掃除ガンバ」

俺の高みの見物が成立した瞬間だった。

敗北感を味わっている二人は姫路と翔子に介抱されていた。

「んじゃ、着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついて行ってくれ着替えたらプールサイド集合だ」

姫路、島田、優子、文姉は翔子のほうに。その他はこっちに……って何故島田妹がこっちに……？

「ここら。葉月ちゃんと秀吉は向こうでしょ？ 霧島さんについて行かないと」

明久がそう言った。

「えへへ、冗談ですっ」

「ワシは冗談ではないのだが……」

相変わらずの秀吉の扱われ方。

「秀吉、適当なところ送るから着替えてくるか？」

「……頼むのじゃ」

1名様ごあんなうい。

「ところで、彩斗と一緒に来た人。アレって誰？ 清涼祭にも来てたけど」

明久が訪ねてきた。

「アレ、姉貴」

「へー、綺麗な人だね」

「だが人間じゃないぞ」

「わかってるって」

確か実年齢1000歳超えていたか。

どうせ、聞きに行ったら弾幕が飛んでくるだろう。

そして更衣室へと入っていった。

―― 20分後

「やっぱり、女子はまだのようだな」

「ところで、康太。血液のほうは大丈夫なのか？」

「……問題ない。イメージトレーニングを256パターン行い、256パターンの出血を確認した」

「閻魔様によりしく言うておくから安らかに逝け」

実はまだ会ったことないんだけどね。幻想郷の閻魔様。

説教が長いのが有名だそうだ。

「お、誰か着たぞ」

不意に雄二がつぶやく。

顔を向けるとどうやら島田妹が来たようだ。

―― が。

何故か胸部がおかしい。

そついや、似たようなものを紅魔館で……。

サク……

「彩斗、お前いつから頭にナイフ生やしたんだ？」

雄二に言われて初めて気がついた。

自分の額に咲夜さんのナイフがあることに。

引っこ抜いたらすごい勢いで血が出てきた。

「……おまえ大丈夫なのか？」

「ああ、このくらいなら大丈夫だ」

フランに腕1本持ってかれたときよりは……

「それより、こいつらのほうが大変だと思うが」

流血している康太と動揺を隠せない明久。

そんな中に別の人物が入ってきた

「こら、葉月！お姉ちゃんのソレ、返しなさい！」

島田が胸元を押さえて走ってきた。

「……………パッド」

と、庫田がつぶやいた。やはりか……。

「あう、ずれちゃいました」

島田妹はそう言ってパッドを取り出した。

そんなやり取りをしているとまたもや誰か来た。

明久が固まっている中、自然に歩み寄ってきた翔子は雄二の目を潰した。

「……雄二。他の子を見ないように」

「ぐあああつ！目が、目がああつ！！」

「……翔子、それじゃあ雄二は何も見えないぞ」

「……どうすれば？」

「いい薬をあげよう」

八意印のものをね。

「……ありがとう」

ん、そういや康太の反応がないな。

辺りを見渡すと、血だまりの中に康太が倒れていた。

「ケアル。大丈夫か？康太」

すぐに回復魔法を使った。

「……恩にきる」

さて、誰が康太をこんなにしたのやら…。

「す、すみません。ちょっと背中 of 紐を結ぶのに手間取って……」

そこには姫路がいた。

すると、明久は見とれて何も言えなくなるし、島田はドイツ語らしき言葉で壊れているし、

雄二はまた目潰しされるなどの事態が起こった。

「あの、明久君？　大丈夫ですか？」

「え？　ああ、うん。瑞希、すごく綺麗だね」

「本当ですか？　よかったですう……」

再起動した明久は姫路といちゃつき始めた。

……優子まだかな。

「待たせてすまぬの」

「待たせたわね」

「あやや、私たちが最後ですかね」

ようやく木下兄弟と文姉が来た

俺は優子の姿を見た瞬間行動を起こした。

「瞬符『風神天翔』！！」

全速力で優子のところまで行き、そのまま上へ上昇した。

「ちょっと、行きなりなにするのよ！」

「いや、単に独占欲が働いた。なんか誰にも見せたくない」

優子の顔が少し赤みを帯びた気がした。

もう少しこのままでもいいよか。

「あやや…抜け駆けはよろしくないわよ？」

しばらくすると文姉が飛んできた。

「皆さんは泳ぎ始めたわよ。早く行ったらどう？」

「なら下りようか」

「そうね」

今度は急降下した。

寸でのところで翼を消して着地する。

どうやら今は明久が島田妹と遊んでいて、島田が姫路に泳ぎを教えていて、雄二は翔子に捕まっていた。

「しばらく横になるー」

俺はそういつて寝転がった。

……どうやら寝てしまったようだ。

視線を他にやるとどうやら今は水中バレーをやっているようだ。

何故かAクラスの愛子とDクラスの島田ゾッコンさんとかいるが・・。

「何でこんなに険悪な雰囲気でバレーやってんだ？」

「あら、彩斗。起きたのね」

隣で優子が座っていた。

その向こうには秀吉と文姉と一緒にいてその先で雄二と明久がいた。

「多分女の意地をかけてるのね……」

なんだ、胸か

「しかし、翔子は運動神経も高いな」

姫路のパートナーである翔子を見てつぶやく。

それに対して島田のパートナーはわざと手を抜いているように見える。

しばらくそんな感じで試合が進んでいった。

2セット目に入って島田が何か言つと……。

島田のパートナーが打ったサーブが垂直に落ちた。

「あ……ごめんなさい。少し力を入れすぎました。新しいのを探してくるので休憩しててください」

そうして、いったん休憩となった。

「皆さん、ワッフルを作ってきたのですけど食べますか？」

姫路の言葉で反応したのがFクラスメンバー。

「おいしそうだね。それじゃあ貰おうかな」

愛子がワッフルを一口口に運んだ。

「うん、おいしいね」

Fクラスのメンバーに安堵が訪れた。

「お、俺も貰おうか」

「僕も……」

そして皆がワッフルを持って一斉に食べた。

被害はゼロだった。

「もう無くなっちゃいましたね。じゃあ次は……」

なんだ、嫌な予感しかない。

「……………私オリジナルのワッフルが3つ」

「第一回！」（雄二の声）

「最速王者決定戦！」（明久の声）

「ガチンコ、水泳対決——っ！！」（明久と雄二の声）

「「「イエー！！」」」（その他の男子の合いの手）

「ルールは簡単だ。ここのプールを往復して最初にゴールした人の勝ちだ」

ワッフルは3つ。

つまり生き残れるのは3人だ。

姫路の料理がどこまで上達しているかはわからんが。

要するに、3位以下なら死が仮定される。

…軽く女子の皆さんがかけ事をしているような気がしなくてもない。

が、明日を迎えられる可能性を高めるには勝つことだ。

「それじゃ、ボクが判定するね」

愛子がスタート&ゴール地点達、俺は左右には明久と雄二がいるスタート位置へと入った。

「はい、いくよ」位置について――」

飛び込みの態勢を作って俺は左右から来ると思われる襲撃をどうにかすることを考える。

「よいい」

というか、心読んだから確定だ。必ずくる。

「――スタート！」

「くたばれええっ!!」

その合図と共に左右から襲撃が来た。

「妖怪甘く見るなよ、三下ア」

THE WORLD……すべての時は止まる。

その間に俺は10mほど進んだ。

そして時は動き出す。

後ろでは2人がぶつかり合ったようだ。

その間にも俺を含む三人は進んでいく。

「1位、彩斗君」

愛子のコールが聞こえた。

プールのほうを見ると他二人は何故か明久と雄二に妨害されていた。

そして、次の瞬間……

プールが血に染まった。

原因は康太の鼻血。とりあえず、回復させないと……。

週明けの朝。

「……射命丸。ちょっと聞きたいことがある」

「黙秘します」

朝から鉄人に呼びこまれた。

「そうか……何か言いたいことはあるか？」

「早急に秀吉の性別の明確化を……………」

そう言うつと鉄人はため息交じりに一言。

「今度の強化合宿の風呂は木下は別にしないとな……………」

とつぶやいていた。

## 俺と監視とプール掃除（後書き）

放置してから早2ヶ月が経とうとしています。

ひとまず、最新話更新です。

まずは言い訳を。

ネトゲと勉強で大変でした。

最悪の言い訳ですなw

これからは目指せ週1ペース。

だがしかし、来週はテストなのでおそらく更新できず…。

ぼちぼち、頑張っていきます。

さて、今回はつなぎのようなところです。

面白いとこなんて全くない。

とりあえず、彩斗君の能力制限。

清涼祭決勝を書いて数日でやりすぎたと思ったさ。

強化合宿あたりからネットゲの技ネタが入ってくるともつのでご了承を・x・

制限の一環です。

今日はこのあたりで。

恋姫で封神演義の聞仲的な存在を入れてみたい・・・。

第28話俺と狂気と強化合宿ゝ初日ゝ（前書き）

またおそくなりました。

## 第28話俺と狂気と強化合宿〱初日〱

「よし、レベルUP」

「おめ〱。なかなか早いわね」

ある日のこと、俺は召喚獣の能力のベースになる物を探していた。

今回は無駄に範囲が厳しく、なるべくマイナーなものというのが某賢者さんからの要望。

普段なら、適当にゲームから引つ張るのだが、そうはいかない。

そこで、悩んだ結果。ある人に相談することにした。

その人の名は……蓬萊山輝夜。

皆さん〱存じ二ト姫です。

そして、衝撃の言葉を食らった。

「それならネトゲで良いんじゃないかしら？」

……正直そこまで衝撃は来なかった。

だが、このアイデアはすべての条件を満たしていた。

ネトゲなんて知ってるヤツと知らない奴の差が激しいものだ。……  
おそらく。

早速俺は輝夜さんの紹介の元、ネットゲを開始した。

それが冒頭の少し前のことである。

それから言うものは1日中パソコンの前という生活が始まった。

もちろん、学校は通っている。

その間、家では『フォーオブアカインド』の分身がローテーションでゲームをしているが……。

新たな力を得るのはいいのだが、縛りプレイ（RPGのほうだよ！）的なことを

試召戦争でやらねばなくなっている。

ちなみに、狂気INしちゃうと、この束縛は取れるようです。

そして、そろそろ夏が来る季節となった。

夏と言えば、怪談。驚かす妖怪にとっては忙しい季節となるだろう。

そんな中、俺こと、射命丸 彩斗は遅めの登校をしていた。

隣で一緒に登校している優子も寝不足のようだった。

昨日は激しかったからな……。

格ゲーが。

優子がDIEOなんぞ使うから俺は承太郎を使わないと対処できないではないか…。

閑話休題。

遅刻ギリギリのまま、なんの能力も使わず、普通に靴箱へ行き、Aクラス前で優子と別れてから、我がFクラスへと足を進める。

教室へはいると、明久の周りにいつものメンバーが固まっていた。

「おはよ〜」

「お、彩斗か。ちょうどいい少し話があるんだが……」

雄二が話しかけてきた。

「あ、彩斗。少し話があるんだけど……」

明久も話しかけてきた。

「よし、面倒だから2人同時に話せ」

俺は聖徳太子にでもなるのだろうか……

バカ&ゴリ説明中……。

「なるほど、2人が脅迫を受けているのはわかった」

「そこでだ。新聞部としての力を借りたい」

「ああ、いいぞ」

俺はあっさり了承してやった。犯人は俺が喰らい尽くしてやるのか……。

だがしかし。

「明久のその写真……新聞部から盗まれたものだ」

驚愕に泣きだす明久……。すぐさま、姫路が介抱と交渉にやってくる。

ひとまず、1枚200円で話がついた。

「そして、雄二。お前のは……俺が翔子にプレゼントしたものだ」

「死ねえ!!」

雄二がごぶしを放ってきた。俺は冷静にそれを受け止める。

「まあ、話は最後まで聞け。俺が渡したのはCDだ。MP3プレイヤーなんぞ幻想郷にはまだない」

CDは河童がつくりだしたのだが……。

「……わかった。ムツツリー二にも依頼しているが、2人がかりのほうがいいだろう頼んだぞ、彩斗」

「任せとけ」

新聞部の情報力は文月——イイイイイイイイ！！

……。

そして、鉄人が教室へはいつてきた。

明日の学力強化合宿のついてのしおりを作っていたらしい。

さらには我々Fクラスは現地集合らしい。地図はくれるのか？

翌日、俺は学校で作業にふけていた。

康太が敵さんの声を掴んだらしい。

スキマで侵入して新聞部の機材で解析中だ。

何故こんなものがここにあるかなんて無粋な質問はなしだ。

俺でも知らん。

変声はかかっておらず、素の声だといっているので俺はディスプレイに表示される音を出してみた。能力を使えば不可能ではない。

「あゝあゝ……この声は確かプールの時に」

確かこんな感じで……こう言っていたはずだ。

「お姉様……」

……うん、これはもう確定だ。

その音声データをUSBにコピーして機材の電源を落とす。

尻尾はつかんだ。さあ……あとは尻尾を引っ張るだけだ。

俺の中でうずめく狂気を抑えながら、明久達と合流するため、スキマを開く。

「ちゃーす……ってもう合宿所かよ」

俺は康太に持ってもらった自分の羽を頼りにスキマを開いて合流を果たした。

そこはすでに合宿所であった。時刻はそろそろ真昼であった。

「えーと、明久はどうしたんだ？」

「姫路にやられた・・・出血のほうで」

雄二がそう答えた。

なるほど・・・料理のほうはほぼ安全ってところか。

とりあえず、仲は良好のようだなにより。

「それじゃあ、俺はちよつと出かけてくる」

「…………どこまで？」

康太がそう言う。

「何——少し盗聴機の類を探しにな・・・」

数時間後……

俺は部屋に戻った。ちなみに、盗聴機はなかった。

俺のほかのメンバーは録音機に耳を傾けていたようだ。

「……今、例の音声を確認していたところ。そちらの結果はどうだった？」

康太がそう告げる。そして俺の返答はこうだ。

「まず、現段階で盗聴機はなかった。そして……俺は敵を完全に確定した」

「「「な、なんだってー！！」」」

皆、驚きすぎだ。

「おい、彩斗。どうやって確定したんだ？」

雄二からの質問が飛んでくる。

「新聞部の極秘機材だ。詳細は言えない。あと、新聞部のある機材が盗まれていた」

「……ある機材とは？」

「CCDマイクと小型集音カメラだ」

「何でそんなものが新聞部に……」

明久、それは俺のセリフだ。

「それで、犯人はどんな奴だ？」

「ああ、俺達……とくに明久が主にDクラス戦時にお世話になったであろう奴だ」

俺はDクラス戦ほとんど出てないからな。叫び声は聞こえてきたが。

「なるほどな……」

「……納得」

「あ奴ならやりそうじゃの」

明久以外はもうわかったようだ。というか、秀吉いたのか。

「え、皆わかったの？ 誰か教えて」

「自分で考えろ、ヒントはFクラスの戸籍上女性だ」

戸籍上という言葉がなければ明久は間違いなく秀吉を女子に含み、島田を女子から除くであろう。

明久が一人で勝手に唸っている時のことだった。

ドバン――

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

女子たちがいきなり部屋に入ってきた。

「木下はこつちへ！そつちのバカ三人とパパラッチは抵抗をやめなさい！」

あろうことか、明久たちはそろって窓から飛び出ようと考えたらしい。

まあ、必要に応じて俺が回収するが。

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

窓を閉めながら女子と対抗する雄二、他二人も鞆をおろしてそつちへ向く。

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。貴方達が犯人だってことくらいすぐにわかるというのに」

後ろにいたＣクラス代表が言い放つ………そう言えば、優子や姫路の姿が見えないな。

「犯人？犯人ってなんのことさ？」

「コレのことよ」

Ｃクラス代表が何かを突きつけてきた。

「これは……新聞部から盗まれていた小型集音マイクとＣＣＤカメラ」

俺はそうつぶやいた。やはり、犯人が……。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

間違いなく、犯人の仕業だな……

「え！？ それって、盗撮じゃないか！ いったい誰がそんなことを」

「トボケないで。貴方達以外に誰がこんなことをするの？」

いやいるだろうよ。Fクラス以外でも。

というか、そろそろキレていいですか？

「あゝ、明久達。何かいいたのはわかるがここは俺が出る。黙ってる」

俺は何か言いたそうな明久達を制止する。

「……彩斗、やりすぎるなよ」

「それは保証しかねん」

俺は雄二に言葉を返しつつ女子勢に向かった。

「さあ、女子勢の皆さん。俺達がそれを行った証拠はあるのですか？」

あくまでも、穏便に進める。管理者として……。

「そんなもの、なくても犯人は貴方達よ！」



「姉上…どうかとめてほしいのじゃ」

外野の方少し黙ってください。

「テメエらは覗きが犯罪と言っのだろうなア。だったら…ばれなければ良いんじゃないか？どんなことでも…カンニングでもよオ」

最後の言葉に反応したのＣクラス代表。それを確認して俺は続ける。

「ばれなければ、イカサマも反則も有つてのがこの世だ。なら…ここにいる奴ら全員消しても…バレナキヤいいよなアアアア！！」

俺が弾幕を展開した瞬間、その弾幕一つ一つにナイフが当てられていた。

「……幻符『ザ・ワールド』か」

時を止められたようだ。

この場でこんなことができるのはただ一人

「彩斗！今は抑えて」

やはり優子か。

「ハッ、興がそがれた。視界から消えろ」

俺は女子たちに宣告を言い渡した。

部屋に残されたのはもともといた５人と優子であった。

## 第28話俺と狂気と強化合宿ゝ初日ゝ（後書き）

お久しぶりです。

テストは無事終わり、先日には模試を受けておりました。

地味に忙しいです。

何とか3巻の内容に入れました。

展開によっては4巻が消えるパターンです。たぶん。

実は最終章の構想が半分できています。

どのタイミングにするかは微妙ですけど…。

この話も残り20ゝ30話もあれば終わるでしょう…たぶん。

どうか、最後までよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8235o/>

---

バカと鴉天狗と召喚獣

2011年7月16日17時10分発行